

920301
陳 懌懿

関西外国語大学大学院外国語学研究科

博士学位申請論文 2022 年

世界の女性文学に見る Siblings 像と多様な女性像

関西外国語大学大学院
外国語学研究科 言語文化専攻

920301

陳 懌懿

謝辞

本博士論文の執筆にあたり、熱心にご指導及び助言をくださった服部典之教授に、誠に感謝致します。

並びに、研究指導の副査として、博士論文の執筆を助けていただいた伊東治己教授に感謝の意を表します。

また、研究活動を支えていただいた笠井正隆教授、近藤富英教授、村松擁助教、夏影氏、及び川口尚毅氏に、感謝を表します。

最後に、経済的に研究活動を支えてくださった家族、及び、精神的に応援してくださった丸々、五百、美々、板々、小花、桂々、そして、故・懿妹児、故・兔々、故・啵々に、愛を送ります。

目次

第一章 序論.....	1
1.1 はじめに.....	1
1.2 近世イギリス女性文学	1
1.3 近世アメリカ女性文学と「新しい女性」(The New Woman)	3
1.4 現代中国女性文学	4
1.5 論文の構成.....	5
第二章 Jane Austen と <i>Pride and Prejudice</i>	6
2.1 愛の執着 ——Jane Austen の人生——.....	6
2.1.1 Austen 略伝.....	6
2.1.2 Austen 作品紹介	7
2.1.2.1 <i>Northanger Abbey</i> 『ノーサンガー僧院』	7
2.1.2.2 <i>Sense and Sensibility</i> 『分別と多感』	8
2.1.2.3 <i>Mansfield Park</i> 『マンズフィールド・パーク』	9
2.1.2.4 <i>Emma</i> 『エマ』	10
2.1.2.5 <i>Persuasion</i> 『説得』	11
2.1.2.6 <i>Pride and Prejudice</i> 『高慢と偏見』	12
2.1.2.7 Austen の作品の特質.....	13
2.1.3 Austen の恋愛結婚観	13
2.1.4 Austen と <i>Pride and Prejudice</i>	15
2.2 エリザベスの目覚め及び恋愛結婚観	15
2.2.1 エリザベス・ベネットの性格	16
2.2.1.1 エリザベスの持つ劣等感	17
2.2.1.2 高慢と偏見.....	20
2.2.1.3 エリザベスの目覚め	27
2.2.2 エリザベスの恋愛結婚観.....	32
2.2.3 幸福な女性	33
2.3 リディアの不確定の未来.....	35

2.3.1	リディア・ベネットの性格.....	35
2.3.1.1	自惚れ.....	35
2.3.1.2	自己反省能力の欠乏.....	36
2.3.1.3	無関心.....	37
2.3.1.4	無教養.....	38
2.3.1.5	思考力の欠乏.....	40
2.3.1.6	自己中心.....	41
2.3.1.7	軽薄さ.....	42
2.3.1.8	厚顔無恥.....	43
2.3.2	リディアの恋愛結婚観.....	45
2.3.2.1	閃婚（スピード婚）.....	45
2.3.2.2	裸婚.....	46
2.3.3	不確定な未来.....	47
第三章	Louisa May Alcott と <i>Little Women</i>	48
3.1	波瀾万丈 ——Louisa May Alcott の人生——.....	48
3.1.1	Alcott 略伝.....	48
3.1.2	Alcott 作品紹介.....	49
3.1.2.1	<i>Hospital Sketches</i> 『病院のスケッチ』.....	49
3.1.2.2	<i>Work A Story of Experience</i> 『仕事、または経験の物語』.....	50
3.1.2.3	煽情小説.....	51
3.1.2.4	<i>Little Women</i> 『若草物語』シリーズ.....	52
3.1.2.5	Alcott の作品の特質.....	54
3.1.3	Alcott の恋愛結婚観.....	55
3.1.4	Alcott と <i>Little Women</i>	56
3.2	非典型的「家庭の天使」ベス.....	56
3.2.1	ベス・マーチの性格.....	57
3.2.1.1	優しい心.....	57
3.2.1.2	内気の克服.....	59
3.2.1.3	感謝の心.....	61
3.2.1.4	共感力.....	63

3.2.1.5	家庭の天使.....	66
3.2.1.6	責任感.....	67
3.2.1.7	無私なベス.....	68
3.2.1.8	死を恐れない.....	69
3.2.2	ベスの恋愛結婚観.....	71
3.2.3	非典型的「家庭の天使」.....	73
3.3	模範的「新しい女性」エイミー.....	74
3.3.1	エイミー・マーチの性格.....	74
3.3.1.1	自己中心.....	75
3.3.1.2	虚栄と自惚れ.....	77
3.3.1.3	報復心.....	79
3.3.1.4	エイミーの成長.....	81
3.3.1.5	芸術性.....	84
3.3.1.6	上流社会への渴望.....	85
3.3.1.7	礼儀正しいエイミー.....	86
3.3.1.8	自己主張.....	89
3.3.1.9	自己認識.....	92
3.3.2	エイミーの恋愛結婚観.....	94
3.3.2.1	フレッド.....	94
3.3.2.2	ローリー.....	96
3.3.2.3	エイミーの結婚.....	98
3.3.2.4	結婚後.....	99
3.3.3	模範的「新しい女性」.....	99
第四章	張愛玲と『半生縁』.....	101
4.1	人間性の弱み ——張愛玲の人生——.....	101
4.1.1	張愛玲略伝.....	101
4.1.2	張愛玲作品紹介.....	102
4.1.2.1	《传奇》 『伝奇』.....	102
4.1.2.2	《色戒》 「色、戒」.....	106
4.1.2.3	《小团圆》 『小団円』.....	107

4.1.2.4	《半生緣》 『半生緣』	108
4.1.2.5	《小艾》 「小艾」	109
4.1.2.6	張愛玲の作品の特質	110
4.1.3	張愛玲の恋愛結婚観	110
4.1.4	張愛玲と『半生緣』	112
4.2	曼璐の悲劇人生	114
4.2.1	顧曼璐の性格	114
4.2.1.1	父親の死	114
4.2.1.2	長女意識	115
4.2.1.3	仕事の悲劇	116
4.2.1.4	恋の悲劇	119
4.2.1.5	愛しない人と結婚する	120
4.2.1.6	出産できない	123
4.2.1.7	夢の幻滅	125
4.2.1.8	妹への迫害	128
4.2.2	曼璐の恋愛結婚観	130
4.2.3	悲劇人生	131
4.3	曼楨の孤独	132
4.3.1	顧曼楨の性格	133
4.3.1.1	曼楨の負担	133
4.3.1.2	孤独な「新しい女性」	134
4.3.1.3	平等意識	135
4.3.1.4	偽りのない曼楨	136
4.3.1.5	自立と自尊心	137
4.3.1.6	自己主張	138
4.3.1.7	矛盾の始まり	141
4.3.1.8	矛盾の深刻化	143
4.3.1.9	孤立無援	145
4.3.1.10	逃走	149
4.3.1.11	自己犠牲	150

4.3.1.12 「理想的な女性」曼楨.....	153
4.3.2 曼楨の恋愛結婚観.....	154
4.3.2.1 過剰な自己主張.....	154
4.3.2.2 伝統思想の束縛.....	155
4.3.3 曼楨の孤独な人生.....	156
第五章 結論.....	159
5.1 Siblings 像の多様性.....	159
5.1.1 <i>Pride and Prejudice</i> に見る Siblings 像の多様性.....	159
5.1.2 <i>Little Women</i> に見る Siblings 像の多様性.....	160
5.1.3 『半生縁』に見る Siblings 像の多様性.....	161
5.2 女性たちの恋愛結婚観.....	162
5.3 女性像の多様性.....	166
5.4 将来の課題.....	166
テキスト.....	168
日本語引用文献.....	168
英語引用文献.....	171
中国語引用文献.....	173

第一章 序論

1.1 はじめに

社会は人間によって構成されるもので、様々な複雑さや問題を抱えている。また人間は多元的な存在であるため、社会はより多様なものになりうる。男性はこの社会で重要な役割を果たし、それぞれが異なる分野で活躍していると同時に、女性もこの社会の不可欠な存在である。同じ女性でも異なる人間観を持つため、どのように上手く女性社会を築いていくのかが現代社会の重大な課題となってきた。文学の世界でも現実世界と同じように、女性は重要な役割を担い、ストーリーと歴史を彩っている。しかし、多くの女性たちが伝統思想の束縛に囚われ、男性のように外で働いたり、財産を継承したり、自由に恋愛したりするなどのことができない場合がある。本論文では、**Siblings**、つまり姉妹たちが登場する文学作品を研究対象とする。**Siblings** は似たような外貌を有し、同じ家庭環境で育てられ、あまり差違が無い女性たちの一団だと考えられることが多い。つまり、女性像は単純化されやすいといえる。しかし、似たような外観をしても、同じ社会的属性であっても、文学作品に登場する **Siblings** は異なる性格を持ち、同じ規範や風習に対して異なる交渉の仕方をする人が多いと考えられる。本論では、**Siblings** の性格及び恋愛結婚観を研究し、彼女たちに多様な **Siblings** 像が存在することを検証していきたい。また、様々な階級、人種、そして様々な国の女性が描かれる文学作品を吟味することによって、異なる女性像を見出していきたい。

1.2 近世イギリス女性文学

近世のイギリスでは、人々は男性が女性より優越した性であると信じ、女性がほとんど権利や機会を与えられず、自由に生きることができなかつたと考えられる。女性史を見てみると、ヴィクトリア女王の治世の間に、女性の地位に多くの進歩があった。1837年以降に作られた一連の議会制定法により、女性の法的不平等の多くが取り除かれ、女性の自由は拡大したが、選挙権を持つには至らなかつた。女性たちは自分の置かれた状況を改善しようとし、学校に通い始め、自分たちの団体も組織し、家庭の外に広がる世界で活躍するべきだと考え始めた。

注目に値する女性の一群は、文学作家として活躍した女性たちだと考える。その中でも、Jane Austen、二人の Brontë 姉妹、そして George Eliot は 19 世紀の真の偉大な 4 人の女性作家だと考えられる。彼女達は子供を持たず、晩婚、あるいは未婚であったが、家族生活において助けとなる、つまり娘としての責任感を持っていたのである。彼女たちの作品は私生活に基づいて書かれたもので、女性たちが完全に自由になることは許されない状況が描かれている。特に Austen の作品では、19 世紀初期の中流階級の女性が、限られた範囲の経験しか許されていないことが描かれ、家から遠く離れたことがなく、人生の計画を立てることや結婚することにも父親の指示に従わなければならないという状況が書かれている。しかし、彼女の小説に登場する女主人公たちは幸せな結婚という究極の目的地に着く前に、沢山の困難を乗り越えなければならない。また、女主人公は望む男性を強引に誘惑することはせず、自己の誠実さを保つことに固執する。Austen と彼女に描かれた女主人公たちは、限られた狭い世界にしか生きる機会を持たなかったにも拘わらず、自由な精神を持ち、知的頭脳で事態を解決することにより喜びを見出せる女性だと考えられる。

Pride and Prejudice (『高慢と偏見』) は Austen の最も優れた作品だと考えられ、陽気で、元気な精神に満ち、活力にあふれているこの作品は、五人姉妹の性格や結婚をめぐる、「高慢」や「偏見」に纏わる恋愛小説である。女主人公のエリザベスは強烈な個性を持ち、男主人公のダーシー氏との会話において、機知とユーモアを見せている。姉のジェーンがネザーフィールドで病気になった時、エリザベスは 3 マイルの道のりを歩くことに、ダーシー氏は尊敬の念を覚えた。レディー・キャサリンに勇ましく立ち向かう姿にみられる強い意志と自己主張が見られる。また、この物語には、魅力的な脇役も存在する。たとえば、エリザベスの家族にはベネット夫人、姉のジェーン、妹のリディアなどが居るし、親族や友人にはコリンズ氏、レディー・キャサリンなどが居て、物語を彩っている。もちろん時代背景はこの作品の前提として重要なものではあるが、多様な人物像や女性像こそが重要な考察点だと考える。そこで、この Austen の最高傑作を本論の一つ目の研究対象として、特に主人公のエリザベス、そして愚かで、無知な末娘のリディアに注目し、彼女たちの性格と恋愛結婚観を分析していきたい。

1.3 近世アメリカ女性文学と「新しい女性」(The New Woman)

イギリスと同じように、近世アメリカでも女性にはほとんど権利が与えられず、自由に家庭から出たり、働いたりすることができなかつたと考えられる。しかし、南北戦争時に、男性のほとんどが戦場に行き、家に残される女性たちは「家庭の天使」という枠を超え、力強く生きていくことになった。戦争を契機に、封建制や奴隷制が解消され、産業化、工業化、都市化が進み、「新しい女性」(The New Woman)という思想も芽生え、Kate Chopin、Charlotte Perkins Gilman や Edith Wharton などの女性作家が活躍するようになってきた。彼女たちは自我を持つ女性として精神面において自立を求める女性を描き、当時の父権制社会も批判した。その中でも、Louisa May Alcott が代表的な人物だと考えられる。彼女の根幹となる性質から、彼女のような女性を論者は「新しい女性」(The New Woman) という概念を提唱する。彼女たちは新しい思想を持った女性で、男女不平等を打ち破り、女性の新しい地位を獲得しようと自覚する女性を指す。

Alcott は父親の影響で、超絶主義者のエマソンやソローと親しくなり、高い教養を持つ女性だった。少女期に、彼女は貧しい家計を助けるために執筆活動を開始し、やがて家庭教師、針子、など多くの職を経験した。南北戦争時、Alcott はワシントンの病院の看護婦として勤めたこともあり、家庭の外の世界を見て、人生の充実感を感じた女性だと考える。小説家としての Alcott は男性社会の周縁にいる女性の視点に立ち、異なる女性像を提示した数々の小説を創造したと考えられる。その中でも彼女の最も優れた作品は、半自叙伝の *Little Women* (『若草物語』シリーズ) だと考える。

Little Women は南北戦争前後のアメリカを背景として創造され、個性溢れるマーチ家の四人姉妹の日常が描かれる。作者の Alcott は次女のジョーのモデルだと言われている。しかし小説の中でジョーは結婚するが、Alcott 自身は生涯独身を貫いた。お転婆な次女ジョーのほかに、知恵に満ちている母親、優しい長女のメグ、大人しい三女のベス、そして可愛い末娘のエイミーなどの女性たちもいる。物語では、マーチ家に起こる出来事や悩み、事件、大きな試練を経験しながら、四人姉妹が少女から大人へと成長し、それぞれが異なる分野で輝いていくことが描かれている。同じ家庭環境で育てられた Siblings に多様な女性像もみられると考える。この Alcott の *Little Women* を本論文の二つ目の研究対象として、特に新女性の末娘エイミーと「家庭の天使」(The Angel in the House)と考えられる三女ベスに目を向け、彼女たちの性格と結婚観を見ていき

い。

1.4 現代中国女性文学

1940年代の中国は、共産党の統治する「解放区」、中華民国の支配する「国統区」及び日本軍の占領する「淪陷区」に分立された。「淪陷区」と異なり、「解放区」と「国統区」の人々は愛国抗戦という精神によって統治されていた。新旧文化が交代するこの時期に、従来重視されていなかった女性たちの声が聞こえるようになってきた。丁玲、盧隱などの女性作家が活躍し始め、古来の卑屈で従順な姿をとる代わりに、彼女たちは強い女性意識の覚醒を示し、父権制度のもとで女性の自己解放を主張していた。彼女たちの作品は、古い封建の桎梏と束縛から脱出しようという願望を表しながら、愛情主義を第一義として自由な結婚を求め、抗戦や革命に参加する女性を主人公とするという特徴がある。しかし、これらの女性作家が創造した女性像と異なり、「淪陷区」の上海出身の張愛玲が描くのは、「男尊女卑」という桎梏から逃げられない、家庭を中心とする女性たちのことである。時代の変革に影響されても、彼女たちは未来への憧憬を持たず、数千年間も続いてきた封建意識のまま、男性の付属品となる。張愛玲は経済的、精神的に自立していない女性たちに目を向け、父権制や女性自身による向上心の欠乏を批判しながら、人間の心理構造を解明し、女性意識の進化と発展に貢献したと考えられる。

張愛玲は人間性と欲望の間で迷走する人物を描き、彼女の作品には新時代の思想と旧社会の伝統に圧迫される女性、金銭と性を求める女性、無知な女性、そして悪辣な女性が多く作品に登場するが、「理想的な女性」(The Ideal Woman)は彼女の物語にはあまり登場しない。張愛玲にとっての「理想的な女性」(The Ideal Woman)とは、苦難を受け入れることができ、変化しつつ生活に対応し、悲惨な状況に陥ろうとも、諦めずに前に進んでいく「新しい女性」(The New Woman)であると考えられる。

張愛玲の「十八春」、後に『半生縁』には、伝統的な女性と「理想的な女性」が同時に登場する。主人公の顧曼楨は普通の家庭で生まれたが、父親の死に伴い、家計の支えがなくなり、主人公の姉が家族を養うために水商売をし始めた。曼楨は複雑な環境で育てられたが、善良で自立的な女性であり、職場で中流家庭出身の沈世鈞と恋に落ちた。しかし、曼楨は姉の曼璐に騙され、姉の夫に暴行され、約一年間監禁された。そのため、世鈞は曼楨のことを誤解してしまい、その後二人は18年間会えなかった。

中華人民共和國成立後、二人は再会し、誤解を解いたが、曼楨は「もう過去に戻れない」と世鈞に言い、物語は終結する。悲劇的な顧曼璐と「理想的な女性」(The Ideal Woman)の顧曼楨は姉妹であるが、異なる性格と価値観を持ち、結局二人も異なる人生を送った。この作品では、Siblings における多様な女性像がみられると考え、本論文の三つ目の研究対象として、姉妹二人の性格と恋愛結婚観を分析していきたい。

1.5 論文の構成

本博士論文は、似たような容貌をして、同じ社会的属性の Siblings が登場する文学作品を研究対象とする。Siblings の性格及び恋愛結婚観を研究し、彼女たちに多様な Siblings が存在することを検証していきたい。また、様々な階級、人種、そして地域の Siblings を分析することによって、世界各地の多様な女性像をみていくことを目的とする。研究対象はイギリス女性作家 Jane Austen の *Pride and Prejudice*、アメリカ女性作家 Louisa May Alcott の *Little Women*、及び中国女性作家張愛玲の『半生緣』とする。論文の序章では、研究目的、研究対象、そしてそれぞれの作品の時代背景が紹介される。第二章では、イギリス女性作家 Jane Austen と *Pride and Prejudice* を見ていきたい。第一節では Austen の略伝、作品紹介及び恋愛結婚観を紹介する。第二節と第三節では、主人公のエリザベスと末娘のリディアの性格と結婚観を分析する。第三章では、アメリカ女性作家 Louisa May Alcott と *Little Women* を見ていきたい。第一節では Alcott の略伝、作品紹介及び恋愛結婚観を紹介する。第二節と第三節では、マーチ家の三女ベスと末娘エイミーの性格と結婚観を分析する。第四章では、中国女性作家張愛玲と『半生緣』を見ていきたい。第一節では作者の張愛玲の略伝、作品紹介及び恋愛結婚観を紹介する。第二節と第三節では、顧家の長女である顧曼璐と主人公の顧曼楨の性格と結婚観を分析する。第五章は本論文の結論となる。第一節では Siblings 像の多様性をまとめ、第二節では女性の恋愛結婚観がまとめられ、第三節では、異なる文化背景に見る女性像の多様性を総括する。将来の課題として、男性の恋愛結婚観を簡単に見てみる。

第二章 Jane Austen と *Pride and Prejudice*

2.1 愛の執着 ——Jane Austen の人生——

2.1.1 Austen 略伝

Jane Austen は、1775年の冬、イギリス南部のハンプシャーの片田舎の村の牧師の第7子として生まれた。3年年上のカサンドラを除いて、他のすべては男の兄弟だった。Austen は姉と共に7歳から11歳までは寄宿学校で学んだが、その後彼女は自宅に戻り、独学を始めた。父親のジョージと兄のジェイムズは文学が好きであり、Austen は家の500冊を超える蔵書や近隣の街の貸本屋などを利用して読書に励んだ。彼女はこのような環境で創作を始め、家庭演劇も行っていた。20歳から、Austen は家族を楽しませようとして、沢山の短い物語を書き、やがて後年の作品へと発展する小説を書き始め、本格的な創作に乗り出した。

その後、年頃になった Austen は母親の親戚の屋敷や近くの街で開かれる舞踏会によく顔を出し、社交界を楽しみ、最初の恋愛も経験した。1801年、父親が老齢のため、長男に牧師の職を譲って、妻と二人の未婚の娘を伴ってバースに転居を決意した。しかし、父親は娘たちに全く相談しなかったため、Austen はその決意を聞かされた瞬間、気を失ったと伝えられている。

1805年、金銭的に恵まれない Austen 家に悲しいことが起きた。父親のジョージが亡くなったのだ。翌年、母娘三人は、海軍軍人となった兄のフランク夫婦と一緒にサウサンプトンで暮らすことになった。しかし、それは長く続かず、1808年の秋、大地主のナイト家の養子となった三男のエドワードの世話で、ハンプシャーのチョートンにある家に、三人が移住した。

1809年から、精神的に落ち着いた Austen は断続的に行っていた創作を再開し、『分別と多感』、『高慢と偏見』、『マンスフィールド荘園』、『エマ』と言った彼女の主な作品も完成させた。

『説得』を創作した頃から、Austen は身体の不調を感じ始めた。1817年の春、彼女は病気治療のため、ウィンチェスターに移った。病状にもかかわらず、創作意欲は減退しなかった。同年の7月18日、Austen は41年の生涯を閉じることになり、その後

ウィンチェスター大聖堂に葬られた。

2.1.2 Austen 作品紹介

Austen はかなり平凡な生涯を送り、独身で一生を過ごした。彼女はイギリス各地への旅をしたことがなく、非常に貧困な生活に苦しんだこともなく、男性と同棲して世間を驚かせた恋をしたこともなかった。彼女の作品は田舎の紳士階級の娘たちの恋愛や結婚を主題として書かれたもので、壮大なドラマや悲劇とは無縁だった。しかし、Austen の一見平凡な人生、及び平凡な人生を描く小説は、彼女死後約 200 年の現在でも、世界中で多くの人々に読み継がれている。本節では、Austen の主要な作品を紹介し、彼女の物語の特色を見出していきたい。

2.1.2.1 *Northanger Abbey* 『ノーサンガー僧院』

『ノーサンガー僧院』は 1818 年、Austen の死後に、兄のヘンリーによって『説得』(*Persuasion*)と合本で出版された。1815 年 8 月から筆を起し、1816 年 6 月までに完成されたものであることは Austen のメモによって明らかになったため、彼女の最晩年の作品だとよく考えられている。この作品は、ゴシック・ロマンスに対する諷刺という形を通して、Austen の完成作のうち、内容でも、技法でも、最も若々しさを表しているものだと、松本啓は指摘している。

キャサリン・モーランドは田舎の牧師の娘で、近くのアレン夫婦に連れられて 6 週間の予定でバースに行った。そこで、キャサリンはアレン夫人の友人のソープ夫人と出会い、その娘のイザベラに紹介された。イザベラの兄のジョンはキャサリンの兄のジェイムズと大学の親しい友達であるが、キャサリンがそのジョンにしつこく迫られることになった。その後、イザベラはジェイムズと婚約した。キャサリンはある社交パーティーでヘンリー・ティルニーと知り合い恋に落ち、ヘンリーの妹のエリナとも友達になった。キャサリンが資産家の娘と思い込んだティルニー将軍（ヘンリーの父親）に招待され、中世風の館ノーサンガー僧院へ行った。イザベラの勧めで沢山のゴシック小説を読んだキャサリンは、この僧院に怪奇なことを期待していた。ティルニー将軍は彼の妻に犯罪的なことをしたのではないかと疑ったりしたが、すべてはキャサリンの妄想でしかなかった。その間、ジェイムズから、イザベラとの婚約解消を伝えてくる手紙が来て、その手紙で、ティルニー将軍はキャサリンがお金持ちの娘で

ないことを知り、彼女をノーサンガー僧院から追い出し、ヘンリーも彼女と交際するのを禁じられた。キャサリンは哀れな状態で実家に戻るが、ヘンリーは彼女を追いかけて行き、父親の命令に背いて、キャサリンに求婚した。ティルニー將軍はエリナがお金持ちの子爵と結婚したことで、やっと折れて、ヘンリーとキャサリンの結婚を許した。

バースでの話とノーサンガー僧院の話は前半部、後半部と分かれていて、テーマ的にも前半は風俗小説的で、後半はゴシック小説的になっていることによって、この物語は Austen のほかの小説と比較すると、「若書き」だと指摘されることが多い。人物と物語のパロディ性、金銭崇拜などの特徴が見られ、主人公のキャサリンとヘンリーの結びつきは、全体のパロディ性が故に、あまり説得力がないように見えるが、無知、あるいは初心な女性こそ、知的な男性にとっては魅力的な存在だというのが Austen の考える人間の持つ一側面だった。『ノーサンガー僧院』は当時既存の作品に対する一種の挑戦であり、Austen が彼女の最晩年に、このように若くて挑発的な作品の手直しをしながら出版したことは注目すべきだと考える。彼女の小説に対する態度は、基本的には若い頃と変わらず、そのような若々しい精神を貫き、常に新しいものを創作しようと Austen は試みたのである。

2.1.2.2 *Sense and Sensibility* 『分別と多感』

Austen が 20 歳過ぎの 1795 年から 1796 年にかけて書かれたとされる『エリナとマリアン』が土台にあって、それを 1797 年から大幅に書き直したのが『分別と多感』である。Austen はリアリスティックな作家だったが、決して現実をそのままに描くのではなかった。彼女は大変寓意性に満ちた作品を書く作家で、抽象語の題名をつけることで、現実の経験に基づいて創られた物語の主題をより明らかにした。

父親のダッシュウッド氏の死後、長女のエリナは母親、次女のマリアンとマーガレットと一緒に、義理の兄のジョン・ダッシュウッド夫婦に家から追い出され、親戚の世話で田舎の小さな家で暮らすようになった。そこで、若くて魅力的なウィロビィ氏が現れ、文学好きで情熱的なマリアンが彼に惹かれるようになった。しかし、マリアンと恋愛中のウィロビィ氏が突然ロンドンに行ってしまう、マリアンはそれについて悩んだ。一方、姉のエリナはエドワード・フェラーズという青年（兄嫁の弟）に思いを寄せた。その後、ウィロビィ氏は全く誠意のない打算的な男だということが次第に

明らかになり、マリアンは深く傷ついた。姉のエリナは優しくマリアンを慰めるが、実は彼女自身もフェラーズ氏のことで密かに深く苦しんでいた。後にマリアンは病気になるってしまったが、それをきっかけで年上のブランドン大佐の誠実さに感動し、求婚を受け入れた。エリナも紆余曲折の後、フェラーズ氏と結婚した。

冷静で常識を弁えたエリナと、感受性が強く感情に流されやすいマリアンという二人の姉妹の性格と恋愛が Austen によって対照的に描かれている。物語に、心理描写や日常的な会話が多用されただけでなく、手紙も小説の中で Austen は使っている。主人公たちが直面する社会、経済、そして倫理などの問題をきっかけとして、自他をより良く知り、自己を形成していくことは Austen の巧妙な言葉と技法によって生き生きと描かれている。『分別と多感』は、経験から学ぶという点で、広い意味で教育の問題を扱ったものと見なすことができるのではないか。

2.1.2.3 *Mansfield Park* 『マンズフィールド・パーク』

Austen はバースやサウサンプトンを転々とした後、チョートンに落ち着くことができた。そこで、彼女は若き日の作品に手を加えて、1811 年に『分別と多感』、そして 1813 年に『高慢と偏見』を出版した。それと同時に、Austen はその二作と全く色調が異なる新作に取り掛かった。それは『マンズフィールド・パーク』である。

プライス家は 9 人の子供がいる貧しい大家族で、長女のファニーは口減らしのため、10 歳の時、伯母の嫁ぎ先のマンズフィールド・パークに引き取られて暮らし始めた。そこで、ファニーは屋敷の主人のトーマス卿、伯母のノリス夫人、長男のトム、長女のマライア、そして次女のジュリアたちと馴染むことができなかった。次男のエドモンドは優しく、ファニーは彼に好意を持っていた。トーマス卿が家に不在の時、子供たちは家庭内での素人芝居上演などを行った。そのようなマンズフィールド・パークに、ヘンリー・クローフォードとメアリー・クローフォード兄妹が現れ、マライアがヘンリーと戯れ、エドモンドはメアリーに惹かれた。しかし、ヘンリーはファニーに贈り物を送り、彼女の兄であるウィリアムの昇進を助けた後で求婚したが、ファニーは断固として拒絶した。このような行為を行ったファニーは保護者のトーマス卿の目から見ると、またとない機会を逃した恩知らずな行為となり、怒りのあまりファニーを実家に帰らせた。やがてマライアはヘンリーと不倫、トムが重病、ジュリアがトムの友人と駆け落ちするなどの事件が起こり、混乱の後にトーマス卿はようやくファニ

一の本当の人間的な価値を見出し、彼女に至急戻ると言った。最後、倫理感の薄いメアリーと分かれたエドモンドはファニーと結婚し、トーマス卿は心から喜んでくれた。

社会から孤立し、孤独な存在になるのは最も恐ろしいことだと考えられる。鋭い人間観察で人間関係を描き続けた Austen は、このような恐怖を十分意識していた。それを強烈に感じさせるのがこの『マンスフィールド・パーク』である。主人公のファニーはその置かれた社会環境から孤立感を感じ、実家から出され、伯母の家で歓迎されず、他人に取っては意味の無い存在となってしまった。小説の前半では、ファニーは最小限の反応しかせず、このような自ら行動を起こさない主人公は、それまでのイギリス小説に登場したことがなかった。その意味で、ファニーは新しいタイプの主人公である。ファニーは自分の恋心を抑え、エドモンドとメアリーの恋愛にひたすら嫉妬を感じながらも黙って見守っていた。結局エドモンドとメアリーの恋が不調に終わり、ファニーは最終的にエドモンドとめでたく結婚したことから見ると、彼女は終始受動的な位置にあったと言える。しかし、彼女は社会的な存在として、社会に必要な人間として認められるようになった経緯が、この物語の中心的プロットだと考える。

2.1.2.4 Emma 『エマ』

Austen の『エマ』の冒頭部で、エマの父親が彼女に極めて甘かったこと、母親は昔に亡くなっていたこと、姉が若い頃に結婚していたこと、家庭教師の女性が母親代わりのこと、主人公エマの置かれていた状況が簡潔かつ明確に述べられている。裕福な家の出身のエマは頭が良く、美人の娘だった。彼女は自分より年齢も身分も下の友人ハリエットに結婚相手を見つけてやろうと考えていた。ハリエットはマーティンという青年とお互いに好感を持っていたが、エマはマーティンが農民であるという身分が気に入り、彼のことを落第生だと考え、ハリエットを牧師のエルトンと結び付けようとした。しかし、エルトンはエマのことを好きで、エマはそれに気づいた時に驚いた。エマの義理の兄はナイトリー氏であり、彼がエマに忠告できる唯一の人物だと考えられる。彼はエマを見守り、その現実を認識させただけでなく、彼女の甘さも諷めた。その後、沢山の若者が登場し、エマはこれらの人々や物事について愚かな発言をして、ナイトリー氏に叱られた。多くの間違えた推測をしていたことで、エマは自分の常識の欠乏を悟った。いちご狩りパーティーの真相を知らせる手紙などが来た後に、エマ

はナイトリー氏の求婚を受け入れた。ナイトリー氏はエマに厳しかったが、彼女のことを実は愛し続けていた。二人は結婚して、ハリエットもマーティンと結婚するという良い結果となった。

主人公のエマは人間関係や男女関係を自分の思い通りに操り、人間の心理を操ろうとした。他人のキューピッド役をしようとして、かえって自分の価値観を人に押し付けることにエマは後悔した。この物語はエマが人間的に成長する物語だと考えられる。中には沢山の写実があるだけでなく、人物の心理を描写するシーンもあり、心理小説を先取りしている名作だとも考えられている。また、Austen の従来の小説と異なるのは、『エマ』はエマの恋愛を中心にせず、話の展開は、エマに介入、邪魔された幾組かの結婚話だったという点である。(もちろんエマとナイトリー氏の恋愛が底流にあり、最後に二人は結婚した。) 読者は、男女の誰が誰と結婚するのかという推理を楽しみ、その意味で、『エマ』は推理小説的側面を持つ作品だとも考えられている。

2.1.2.5 *Persuasion* 『説得』

若い男女の恋愛に年配者が口をさしはさむことは現在でも多い。年配者たちは自分の経験に基づいて若者たちに忠告するが、恋愛中の若者たちにとって、彼らの忠告は受け入れ難いことであり、そこで対立が起こる。『説得』はこのような現在でも良くある話をテーマにした物語である。

エリオット準男爵は妻を亡くしたが、三人の娘がいた。29歳のエリザベスと27歳のアンは未婚で、25歳のメアリーは結婚していた。エリオット家に息子がいないため、住いのケリンチ・ホールは将来従兄弟のウィリアム・エリオットに継がれることになった。昔、アンはかつて海軍軍人のウェントワース氏に恋していたが、母親代わりのラッセル夫人に、ウェントワース氏が夫としては不適切だと説得され、結婚を断念した。やがて二人は8年後に再会し、ウェントワース氏は出世して大佐になり、アンは彼への思いを断ち切れず、28歳になっても独身のままだった。誤解やすれ違いがあったり、アンの親戚の娘であるルイザはウェントワース氏と親しくなっていたが、海岸の突堤で軽率にも飛び降りて大けがをした。ウェントワース氏にも事故の多少の責任があり、ルイザと結婚するのではと見られたが、逆に彼の気持ちはアンに戻っていった。いろんな事件を経て、二人は互いの思いが少しも変わっていなかったことを確かめ合い、アンはウェントワース氏の求婚を受け入れた。

この物語は Austen の最後の長編小説であり、落ち着いた穏やかな美しさをたたえた作品だと考えられている。ラッセル夫人は危険を伴う海軍軍人のウェントワース氏が財産もなく、将来も不安定だとアンに説いた。アンの場合、彼女は多くの若者と異なり、意外に素直にラッセル夫人の忠告に従い、父親と姉に男のほうの地位が低いということから反対されたこともあって、ウェントワース氏のためにも良いと彼女が思い、19歳の時に、愛し合っていた彼との結婚を自分の側から断った。しかし、まもなく彼女にとってそれが取返しのつかない間違った選択だと悟った。その後、彼女はウェントワース氏への思いを断ち切ることができず、その後良い条件の縁談話もあったが、アンは愛は変わらなかった。『説得』のテーマは本当の愛・変わらない愛であり、本当の愛は Austen の小説の基底に一貫していた観念であった。しかし、変わらない愛は当初の誤りにもかかわらず、幸運な偶然にも助けられて成就する様子を Austen は描いた。

2.1.2.6 *Pride and Prejudice* 『高慢と偏見』

『高慢と偏見』は単に Austen の代表作だけではなく、イギリス小説史に確固たる地歩を占める傑作であることは、松本啓が指摘する通りである。忘れがたい人物が次々と現れ、見事なストーリーの展開や、辛辣であるけれども温かみを失わない人間性の描写などで、何度でも読み返したくなる一冊だと考える。

ベネット氏には5人の娘がおり、ベネット夫人は娘達に良い結婚相手を見つけてやることを人生の最大の目的として生きていた。そのような中、年収5千ポンドの独身青年ビングリー氏が年収1万ポンドの友人ダーシー氏を連れて近所に引っ越してきた。しかし、優しいビングリー氏が長女のジェーンの心を捉えたのに対して、気位の高い態度を取るダーシー氏に、主人公である次女のエリザベスは強い反感を持っていた。やがて、ジェーンとビングリー氏との行き違いや、不誠実な軍人のウィッカム氏に騙された妹のイディアの駆け落ちなどの事件を経て、エリザベスはダーシー氏に対する見方を改め、彼の高貴さと誠実さを知った。物語の最後では、ジェーンとビングリー氏が結婚し、エリザベスもダーシー氏の求婚を受け入れ、ベネット夫人は歓喜した。

この小説の最大の魅力は、主人公のエリザベスの存在だと考えられる。彼女は、優れた洞察力と理解力を持つ魅力的な人物である。エリザベスは身の回りの人間を観察するのが好きで、自らをも含めた人間のおかしさを笑うことができ、この点で作者の Austen 自身の特性を与えられているとも言える。そのほかに、滑稽な牧師のコリンズ

氏、自惚れの強いリディア、下品なベネット夫人などと言った愉快的脇役たちも物語に登場している。作品はアイロニーに満ち、若々しい生气も発散している。物語の明るさで、人気になったという側面もあるだろう。

2.1.2.7 Austen の作品の特質

Austen の小説に、リアリズムという特質があると言われている。彼女は自分が知り抜いていることしか書かなく、すべての小説は田舎の紳士階級の日常を背景とし、それ以外の場所に場面を移しても、彼女が自分の小説の舞台とするのは実際に訪れたことがある土地に限られていた。また、Austen の小説では、女性主人公たちが紳士階級の娘であり、その娘たちの結婚に至る経緯をめぐってストーリーが展開される。それぞれの作品にプロットや主人公たちの性格が異なる部分は見られるが、中心テーマは一貫していると考えられる。それは、女性主人公たちが結婚問題に直面する時に出てくる社会問題、経済問題、そして倫理問題を契機とし、彼女たちが他人、そして自分のことをよりよく知り、自己形成していくというテーマだと考える。彼女たちは、劇的な事件によるよりも、日常生活の出来事において登場人物が示す行為によって自己啓発をして、自己形成を成し遂げていくのである。実は、Austen の描く小説の物語は、Austen 自身も含む、イギリスの 18 世紀から 19 世紀にかけて紳士階級の子女が置かれていた状況と深く関わっていた。彼女にとって、結婚するか、結婚せず家に残り、親の世話をするか、または家庭教師になるかという三つの前途しか存在しなかった。したがって、結婚こそは彼女たちにとって自己実現のできる前途だった。しかし、Austen にとって、理想的な結婚はゆるがせにできない問題で、結局彼女は結婚せず家に留まることを選んだ。

また、Austen の小説は緊密な構成、鮮明で正確な描写などと言った特質もある。さらに、彼女自身の持つ鋭い観察力を働かせ、ユーモア、辛辣なアイロニーをも発揮し、近代の写実小説として完成度の高い作品の数々を産み出したと考えられている。

2.1.3 Austen の恋愛結婚観

Austen は彼女が創造した女性主人公たちと異なり、華々しい恋愛をしたことはない。彼女は自身の恋愛を隠そうとしていたから、研究者は、Austen の実生活について推測に頼る部分が多い。生涯を独身で過ごした Austen だが、親戚などの情報によって、五

回の恋愛、またはそれに近い事件を経験したことが分かる。

Austen が 20 歳の時、近所にトーマス・ルフロイという青年が滞在していた。彼は Austen よりわずかに年下の男性で、アイルランド出身で、若くてハンサムだった。しかし、当時トーマスはお金がなく、野心家だったと言われているから、裕福でない Austen と結婚するなどのことは考えてなかった。やがて、トーマスはアイルランドに帰国して、二人の恋も終わりになった。トーマスは別の立派な家出身の娘と結婚し、その後アイルランド首席裁判官という地位に出世した。Austen との恋愛はトーマスにとって幼稚だったかもしれないが、Austen とにとって、この恋が一生心に残っていることが、彼女の手紙から分かる。この恋愛経験が彼女の最後の作品『説得』のテーマ、男性よりも女性の方が、いつまでも変わらない愛を持ち続けるということに反映されていたと考えられる。

二度目の恋愛は 1798 年のことだった。サミュエル・ブラッコールという男性がいて、Austen のことが好きになった。彼は積極的だったが、Austen の気持ちは全く動かなかった。トーマスとの恋愛と比較すると、サミュエルへの愛情は弱いもので、トーマスとサミュエルへの気持ちには違いがあったと Austen は手紙に書いている。

三度目の恋愛はバースに転居していた 1801 年のことだった。Austen は一家で出かけたデヴォンシャー海岸で会った青年と好意を寄せ合い、青年と翌年も同じ時期に会うとの約束した。しかし、青年が病気に掛かり、まもなく亡くなってしまった。この恋は Austen の姉カサンドラが後年になって語ったもので、真偽の確証はない。

そして 1802 年の 11 月下旬、Austen は長兄の家に滞在した。近隣のメニーダウンという町には、友人のビッグ＝ウィザー一家が住んでいた。この一家の長男であるハリスは Austen より 6 歳年下だが、彼は 12 月 2 日に Austen に結婚の申し込みをした。唐突な申し込みではあったが、Austen はそれを受け入れた。しかし、一晩考えた後、翌朝に彼女は前言を翻し、求婚を断ってしまった。いずれは財産を相続するハリスとの結婚が、あらゆる点で望ましいものではあったが、Austen はハリスのことが結婚に踏み切るほど好きになれなかったため、彼と結婚するのはできなかった。

そして最後の恋話は、1808 年の夏のことだった。兄の妻の弟であるエドワード・ブリッジズは Austen より 4 歳年下の牧師だった。この時の Austen は、前回の教訓を活かし、慎重に言葉を選んで、彼を断ったようだ。一説にはその後、エドワード・ブリッジズは Austen の姉カサンドラにも結婚を申し込んだと John Halperin によって指摘

されている。この牧師であるエドワード・ブリッジズは『高慢と偏見』のコリンズ牧師の原型になる人物だとよく考えられている。

Austen の以上のような恋愛経験から見ると、彼女はかなり新しい思想を持っていたと考えられる。継嗣相続という法律が存在した時代に、一家の財産は長男に限定し、娘である Austen は相続できないということだった。娘たちの将来は、すべて結婚相手によって決定される状況だったが、Austen は経済的なことを考えるより、自分の本心に執着していた。

2.1.4 Austen と *Pride and Prejudice*

Austen の略伝、作品紹介、そして恋愛結婚観を考察した。Austen は彼女自身が生きていた環境を土台とし、リアリズム、ユーモア、推理などの要素を融合し、傑出した作品を創造してきた。Austen の恋愛結婚観に関して、相手のことが本当に好きでなければ、それ以上に進めたり、求婚を受け入れたりしないのが良いと彼女は考えていた。愛情のない結婚は辛いもので、愛情のない相手に縛られたまま、別の人が好きになることも惨めだと彼女は言っていた。Austen は *Pride and Prejudice* の主人公エリザベスのように、勇敢に愛していない人を断ったり、憧れの愛情を求めたりしていた。誰にも愛のために結婚する権利があると彼女は考え、もしその本当に愛する人が現れなかったら、老女になり、人生の終焉まで一人のままでも、Austen は構わないと考えていたのだ。これから Austen の *Pride and Prejudice* に着目し、主人公のエリザベス及び末娘のリディアに目を向け、二人の Siblings の性格と恋愛結婚観を分析していきたい。

2.2 エリザベスの目覚め及び恋愛結婚観

『高慢と偏見』は今でも人気があり、何度も映画化にされている。女性の成長や新しい結婚観を示すこの小説は後世の人々に莫大な影響を与え、特に主人公であるエリザベスに注目することが重要である。また、物語の冒頭の一文は有名である。

It is a truth universally acknowledged, that a single man in possession of a good fortune, must be in want of a wife. (5)

立派で、財産を持つ独身男性は、きっと妻を求め。女性はその立派で、財産を持

つ男性の妻になろうとすることは「真理」だと認められていた。

当時のイギリスでは、継嗣相続という法律があり、子供たちに財産の均等分与をせずに、相続を長男に限定し、一家に男子がいない場合は、最も血筋の近い男子をその対象とするのである。したがって、父親が亡くなったら、エリザベス一家の財産は、娘しかいないため、その継嗣相続人のものとなり、娘たちは財産を失うことになってしまう。このことについて、前田淑江は以下のように述べている。

限嗣相続とは、財産の相続資格を法的に限定することで、資格は男子のみにある。

したがって、父親が亡くなった場合、一家の財産はその限嗣相続人のものとなり、娘たちは財産を失うことになる。母親が娘たちの結婚に、しかも財産のある男との結婚に躍起になるのもそのためである。(前田, 111)

当時、働くことは墜落と見なされ、女性にとって中産階級以上に、財産を手に入れるためには、結婚が唯一の手段だと考えられていた。女性側は経済を目的とし、男性側は家族の財産を相続させる後継者を産むのを目的として結婚するのだと考えられていた。また、この時期の多くの結婚は金銭や社会的理由によって行われ、人々の大半は愛情のため結ばれるのではなく、自分の利益のため、打算的・利己的な結婚をささざるを得なかったのであろう。

しかし、主人公のエリザベス・ベネットの理想は当時の「真理」に疑問を呈するものであった。彼女は当時の社会現実に対する不満を持ち、社会的規範内で自立する意識があり、自己を主張する積極性も持つと述べられている。本節では、物語を分析し、エリザベスはどのように成長し、目覚めてきたかを見ていきたい。また、エリザベスはどのように、不況な状況に妥協せず、より自分の理想の結婚を求めているのを、小説の中にある描写を見ながら検証していきたい。

2.2.1 エリザベス・ベネットの性格

エリザベスは自分の生まれ持った真の値打ちを強く意識していると Paul Poplawski は論じている。父親のベネット氏のお気に入りであり、楽しいことを解する活発な雰囲気を持ち、「滑稽なもの」に常に興味がある。茶色の目は彼女の特徴となり、鋭い洞察力も持っている。しかし、その洞察力がいつもきちんと働いているのではなく、エリザ

ベスはダーシーに偏見を持つようになってしまう。けれども、エリザベスは自分の誤りを認識し、後に自分の間違いを正直に認め、結局、ダーシーと結婚することになる。エリザベスの魅力を論ずるだけでなく、彼女の成長や目覚める過程についても、研究する価値があると考え。では、具体的に、エリザベスはどのように成長して、自己を主張するように目覚めてきたのかを見てみよう。

2.2.1.1 エリザベスの持つ劣等感

エリザベスは先に論じたように、元気が良く自由な精神の持ち主であり、自分の生まれ持った真の値打を意識する女性だと考えられる。しかし、これらの性格を持つと同時に、エリザベスは劣等感を抱えていると考えられる。本節は社会要因と家庭要因から、エリザベスの持つ劣等感を分析していく。

まず、当時の社会背景から見てみると、女性は政治的にも経済的にも、非常に低い社会地位に置かれていた。

Mr. Bennet's property consisted almost entirely in an estate of two thousand a year, which, unfortunately for his daughters was entailed in default of heirs male, on a distant relation, (29)

当時のイギリスでは、継嗣相続という法律があり、財産相続を長男に限定し、一家に男子がいなかったら、娘たちは財産を失うことになってしまう。ベネット家の娘たちは良い結婚相手を見つけることを夢見ながら、将来の不安定な生活に恐怖も感じている。エリザベスも例外なく、将来の生活に不安を感じてしまう。

また、エリザベスの家庭環境から見てみると、ベネット一家は小さな村に住み、人々が安定した快適な生活を送ることを目指すため、新しい思想を取り入れることは彼らにとって難しくなる。民主思想はまだ普及しておらず、金銭しか考えられない人は多かった。周りの人々の多くは素朴であるが、思考力に欠け、物語の主人公のエリザベスはこのような環境で育てられてきた。では、父親であるベネット氏はどのような存在であるのかをみていこう。

Mr. Bennet was so odd a mixture of quick parts, sarcastic humor, reserve, and caprice,

that the experience of three and twenty years had been insufficient to make his wife understand his character. (7)

ベネット氏は良い頭を持ち、皮肉、ユーモア、そして不愛想、気まぐれが混ざった人物なので、23年の夫婦生活をして、妻に自分の性格をわかってもらおうとはしない。また、ベネット氏は妻のベネット夫人を軽視していることが分かる。

Her father captivated by youth and beauty generally give, had married a woman whose weak understanding and illiberal mind, had very early in their marriage put an end to all real affection for her. Respect, esteem, and confidence, had vanished for ever; and all his views of domestic happiness were overthrown..... Elizabeth, however, had never been blind to the impropriety of her father's behaviour as a husband. She had always seen it with pain; but respecting his abilities, and grateful for his affectionate treatment of herself, she endeavoured to forget what she could not overlook, and to banish from her thoughts that continual breach of conjugal obligation and decorum which, in exposing his wife to the contempt of her own children, was so highly reprehensible. (228)

ベネット氏は当時、ベネット夫人の「若さと美貌」に魅了され、彼女の美しさや自分の性的な衝動で理性を失い、求婚してしまった。結婚後、ベネット氏は落ち着いてきて、自分の立場を冷静に見てみると、ベネット夫人の「無教養」、「理解力の欠如」に気づき、ベネット夫人に冷淡になり、それから彼女を蔑視するようになってしまったので、ベネット氏は「不適當」「unsuitable」(229)な結婚に責任があると考えられる。結婚してすぐにベネット夫人に愛想を尽かし、妻の愚行を止めようとせず、妻が人々の笑い話になっていることに無関心だった。ベネット夫人は人々に笑われると同時に、ベネット家の全員も嘲笑されるようになってしまう。ベネット氏は夫や父としての務めは実行していないことが分かり、エリザベスは父親の態度に不満を持ち始めた。一方、ベネット夫人を見てみると、彼女は確かに思考力が欠け、神経質な人間だとよく考えられる。

Her mind was less difficult to develop. She was a woman of mean understanding, little

information, and uncertain temper. When she was discontented she fancied herself nervous.

The business of her life was to get her daughters married, (7)

若い時は美人だったが、今は愚かになり、娘達の結婚しか考えられなくなり、そのために、ベネット夫人は訪問に行ったり、情報を収集したりして、自分の心を慰める。ベネット夫人は、おしゃべりで鈍感、下品で、洞察力が欠如しており、世間が狭く、少しでも気に入らないことがあると、彼女はすぐに神経質となり、ボロボロになったと言い出してしまう。母親の無教養や愚行が人々に見られ、ベネット夫人だけでなく、ベネット家全員が人々に馬鹿にされることになってしまい、エリザベスは娘として、損害を被っているようになり、恥ずかしくなる。

可愛く、無邪気で親切なジェーンはエリザベスの姉ではあるが、親密な友達とも考えられる。ジェーンは常に善意を持ち、人を悪く思わないが、自分のことに自信が欠けている。ビングリー氏はジェーンの美貌に惹かれ、ジェーンもビングリー氏が魅力的な存在だと考える。メリトンの舞踏会で、ビングリー氏は何回もジェーンを誘い、彼女とダンスをした。しかし、舞踏会が終わって、ジェーンはエリザベスに以下のことを言い出す。

“I was very much flattered by his (Mr. Bingley) asking me to dance a second time. I did not expect such a compliment.” (16)

もう一度踊ってくださいと言われたとき、ジェーンは喜んでいて、そこまで大切にしてもらえると、ジェーンは思っていなかったのである。ここで見られるのは、ジェーンの自信欠如だと考えられる。その場にいる女性の中、ジェーンは最も綺麗で、ビングリー氏がもう一度誘ってくれたことは当たり前だとエリザベスは考える。しかし、ジェーンは自分の美貌に自信がなかった。

また、三女のメアリーは才能も趣味もなく、「虚栄心」“vanity” (25)から熱心に読書を頑張っているが、その虚栄心は知ったぶりや自惚れの態度だけをもたらしたのである。さらに、四女のキティーと末娘のリディアはベネット氏に「イギリスの最も愚かな二人の女の子」“two of the silliest girls in the country” (30)と評価され、軽薄で、愚かな娘だとして考えられない。

継嗣相続という社会要因、素っ気ない父親、無知かつ下品な母親、自信欠如の姉、そして虚栄で、軽薄で、愚かな妹たちがいるという家庭要因から、エリザベスは自身と自分の家族に劣等感を感じるようになってしまう。しかし、劣等感を感じると同時に、エリザベスは強くなりたいという気持ちが高まり、最終的には優越感を持つようになる。その優越感は後に高慢とつながっていくと考えられる。

2.2.1.2 高慢と偏見

中村純子の研究によると、一般に劣等感は自らが劣っていると感じられる感情であり、若者は優れる他者と自己の比較を行い、その差を認識することによって劣等感を感じるようになる。エリザベスは自分の生活環境や家族によって劣等感が生じると考える。また、伊藤正哉、川崎直樹、小玉正博の共同研究から見ると、優越感、自分より劣っている他者との比較に基づく自己肯定感を醸成するものであり、エリザベスは自分の冷淡な、無知な、虚栄に満ちた、そして軽薄な家族との比較で、優越感を得たのであると考える。優越感、あるいは高慢は劣等感の裏返しで、劣等感も高慢もその出所は同じ、それは「不安」だと考える。エリザベスはこのように「不安」を持ち、身の回りの事物や人を扱っている。例えば、彼女はダーシー氏とコリンズ氏に優越感を感じ、高慢になると同時に、偏見も持っていると考えられる。友人のシャーロットがコリンズ氏と結婚することを決めた時に、エリザベスは彼女に偏見を持ち始めたと考えられる。では、具体的なことは以下の分析から見てみよう。

ビングリー氏は近隣のネザーフィールドに引っ越してきて、ベネット氏が妻と娘たちを焦らした後にネザーフィールドを訪問すると、ビングリー氏はベネット家のロングボーンを返礼訪問したが、娘たちと会えなかった。その後、メリトンで行われた舞踏会では娘たちと会うことができ、ビングリー氏は長女であるジェーンの美貌に惹かれることになった。ビングリー氏と同行して舞踏会にやってきたのは、彼の姉妹と高貴な顔立ちをしたダーシー氏である。大きな土地を有する裕福な男性のダーシー氏はビングリー氏と異なり、魅力に欠け、「世界の中で最も誇り高く、最も不快な男だ」“the proudest, most disagreeable man in the world” (13)とメリトンの人々に思われるようになってしまった。ビングリー姉妹としか踊らなく、その場にいる女性の誰にも紹介されることを拒み、エリザベスも含まれていた。また、彼は「彼女は醜くないけど、私にとっては魅力的ではない」“She is tolerable; but not handsome enough to tempt me,” (13)と

エリザベスを評価したが、偶々エリザベスは、その言葉を耳にしたのである。

Mr. Darcy walked off; and Elizabeth remained with no very cordial feeling towards him. She told the story however with great spirit among her friends; for she had a lively, playful disposition, which delighted in any thing ridiculous. (14)

エリザベスはビングリー姉妹と違って、ダーシー氏に慕われようとせず、その言葉を耳にした彼女は、ダーシー氏のことを快くは思わなかったが、それを軽く笑い飛ばすことができた。自分の容貌が軽蔑されたことによって、ダーシー氏は中身より、容貌で人を判断するとエリザベスは考える。ここで、エリザベスはダーシー氏との比較で、優越感を感じるようになる。さらに、ダーシー氏の言葉を聞いて、メリトンの人々と同じように、彼に「世界の中で最も誇り高く、最も不快な男だ」 “the proudest, most disagreeable man in the world” (13)という偏見も持ち始めたと考えられる。

その後、ビングリー姉妹はネザーフィールドで自分たちと共に夜を過ごすようにジェーンを招待した。ベネット夫人は、雨が降りそうだから、ネザーフィールドでジェーンを泊まらせてくれるだろうと思い、ジェーンに一家の馬車を使うことを許さず、馬に乗るように言った。ネザーフィールドについてジェーンが風邪をひき、そこで滞在を延ばすことになってしまった。エリザベスは姉の健康を心配して、泥だらけの野原を通って、3マイルも歩き、ネザーフィールドに行ったのである。ジェーンが病気の間、エリザベスも看病のために泊まるように勧められた。それを見て、ネザーフィールドにいるダーシー氏はエリザベスに惹かれていると彼は意識した。しかし、ダーシー氏はエリザベスの社会的地位の低さが気になり、彼女と結婚するのを妨げる社会的障害と感じ、彼は二人の関係をこれ以上に進展させないことに決めた。ジェーンが元気となって、ダーシー氏とエリザベスは冷ややかに別かれたのである。

エリザベスとジェーンがロングボーンに戻って、牧師であるコリンズ氏もやってきた。彼は継嗣相続のことで不和となったベネット家との仲を修復することを言い訳とし、実際は、彼はベネット家の娘たちの一人と結婚することが目的だった。

Mr. Collins was not a sensible man, and the deficiency of nature had been but little assisted by education or society; the greatest part of his life having been spent under the

guidance of an illiterate and miserly father; and though he belonged to one of the universities, he had merely kept necessary terms, without forming at it any useful acquaintance. The subjection in which his father had brought him up, had given him originally great humility of manner, but it was now a good deal counteracted by the self-conceit of a weak head, living in retirement, and the consequential feelings of early and unexpected prosperity. A fortunate chance had recommended him to Lady Catherine de Bourgh when living of Hunsford was vacant; and the respect which he felt for her rank, and his rights as a rector, made him altogether a mixture of pride and obsequiousness, self-importance and humility.

(69)

コリンズ氏は愚かで、自惚れの強い人間である。機転もきかず、金銭崇拝の性格を持ち、ベネット氏や娘たちの嘲笑の的となった。このようなコリンズ氏を見たエリザベスは、彼へ偏見を持ち始めた。優越感を感じていた彼女は、遂にはコリンズ氏に対して高慢な態度をとってしまった。

ベネット夫人は、コリンズ氏が娘たちの一人に求婚することについて考えていた。ジェーンはビングリー氏への恋心があると信じていたので、ベネット夫人はコリンズ氏の関心をエリザベスに向けさせた。

ベネット家の末娘リディアと四女のキティーはメリトンに駐屯する軍隊との付き合いを好み、メリトンに住む叔母のフィリップス夫人（ベネット夫人の姉妹）を頻りに訪ねていた。彼女たちはフィリップス夫人から最新のゴシップをきくためにメリトンに行き、ジェーン、エリザベス、そしてコリンズ氏も彼女たちと共に行った。一行はリディアとキティーの知り合いのデニー将校と出会い、彼の友人であるウィッカム氏を紹介された。

Mr. Wickham was as far beyond them all in person, countenance, air, and walk, as they were superior to the broad-faced stuffy uncle Philips, breathing port wine, who followed them into the room. (75)

ウィッカム氏は顔立ちが良く、彼の洗練さと魅力がエリザベスに強い印象を与えた。このように立ち話をしているところに、ビングリー氏とダーシー氏が馬に乗って現れ、

ジェーンとエリザベスに挨拶するために近寄ってきた。ダーシー氏とウィッカム氏が出会った時に、お互いに仲が悪そうな様子を見せたので、エリザベスは、二人の緊張関係に気づいた。その後、ベネット家の一行とウィッカム氏がある晩餐会に招待された。エリザベスはウィッカム氏の愛想の良さに惹かれ、ダーシー氏との関係について彼に尋ね始めた。ウィッカム氏は以下のことを言う。

“A thorough, determined dislike of me- a dislike which I cannot but attribute in some measure to jealousy. Had the late Mr. Darcy liked me less, his son might have borne with me better; but his father’s uncommon attachment to me, irritated him I believe very early in life. He had not a temper to bear the sort of competition in which we stood- the sort of preference which was often given me.” (79)

ダーシー氏の父親はウィッカム氏に聖職禄を約束してくれたが、父親が亡くなってから、息子のダーシー氏がウィッカム氏の将来を台無しにするために、その聖職禄を彼に与えることを拒否した。ダーシー氏は、嫉妬心と過剰自尊心からそんなことをしたのだらうとウィッカム氏が言う。

“He does not want abilities. He can be a conversible companion if he thinks it worth his while. Among those who are at all his equals in consequence, he is a very different man from what he is to the less prosperous. His pride never deserts him; but with the rich, he is liberal- minded, just, sincere, rational, honorable, and perhaps agreeable, -allowing something for fortune and figure.” (81)

ウィッカム氏によると、ダーシー氏は価値のある相手だけに愛想が良く、財産と地位しか見ていない人間である。ダーシー氏の性格についてウィッカム氏が上の引用にあるよう説明した。それを聞いたエリザベスは、自身のダーシー氏への印象と一致すると考えた。エリザベスはウィッカム氏の言葉を信じ、彼の苦境に同情しながら、ダーシー氏への偏見はより強くなってしまった。

ビングリー氏はネザーフィールドで舞踏会を行い、エリザベスはこの舞踏会がウィッカム氏をよりよく知る機会だと考え、楽しみにしていた。コリンズ氏もこの舞踏会

に参加し、彼はこのチャンスを捉え、エリザベスに接近しようとしていた。

エリザベスは普段よりも念入りに装いを凝らし、ウィッカム氏の心を征服しようとするが、ウィッカム氏の姿が現れず、彼女はがっかりして、以下のように考えていた。

But in an instant arose the dreadful suspicion of his being purposely omitted for Mr. Darcy's pleasure in the Bingley's invitation to the officers; (88)

メリトンでダーシー氏とウィッカム氏が出会った時に、エリザベスは、この二人の間に嫌悪な雰囲気を感じ取った。彼女はすぐにダーシー氏がその原因ではないかと疑って、彼に対してさらに偏見を抱くようになってしまった。

同時に、舞踏会でベネット夫人と妹のメアリーは滑稽な行為をし、笑いものになった。ダーシー氏はそれを見て、ベネット家の娘たちが結婚相手として相応しくないという考えを強めた。ビングリー氏とジェーンの愛情が明らかになるとともに、ダーシー氏は親友のことが心配となり、彼はビングリー氏をこの生活圏から連れ去り、ジェーンとの結婚を妨げることを決心したのである。舞踏会後の何日も経っていない内に、ジェーンはキャロライン・ビングリー（ビングリー氏の妹）から、ネザーフィールドの全員がロンドンに向けて出発し、冬まで戻る計画はないという内容の手紙を受け取った。それを読んだジェーンはショックを受けた。さらに、キャロラインは手紙の中に、ダーシー氏の妹のジョージアナと兄のビングリー氏が結婚してくれることを切に希望していると書いており、ジェーンはがっかりした。

一方、舞踏会の次の日、コリンズ氏はエリザベスにプロポーズした。コリンズ氏は以下のように述べる。

“My reasons for marrying are, first, that I think it a right thing for every clergyman in easy circumstances (like myself) to set the example of matrimony in his parish. Secondly, that I am convinced it will add very greatly to my happiness; and thirdly- which perhaps I ought to have mentioned earlier, that it is the particular advice and recommendation of the very noble lady whom I have the honor of calling patroness.” (103)

コリンズ氏が 3 つの理由を挙げ、彼は生活に余裕のある聖職者で、教区で結婚の模

範を示さなければならないことや、結婚によって幸福になると確信していることや、レディー・キャサリンに結婚を強く勧められたという理由で、エリザベスに求婚した。しかし、エリザベスははっきりとコリンズ氏を断ったが、鈍感かつ自惚れの強いコリンズ氏は相手が真剣に拒絶していると信じずに、エリザベスが部屋から出て行くまで結婚を迫り続けた。その後、彼は何回もエリザベスに求婚した。

To such perseverance in willful self- deception Elizabeth would make no reply, and immediately and in silence withdrew; determined, that if he persisted in considering her repeated refusals as flattering encouragement, to apply to her father, whose negative might be uttered in such a manner as must be decisive, and whose behavior at least could not be mistaken for the affectation and coquetry of an elegant female. (106-107)

何度断られても、コリンズ氏はエリザベスの拒絶を女の媚態としか受け取れなかった。エリザベスはもともとコリンズ氏に偏見を持っていたが、求婚のことで、彼への偏見がさらに深まってしまった。

コリンズ氏のプライドはエリザベスによって傷つけられたが、シャーロットの登場で、彼の心はいくらか慰められた。ベネット家の娘たちはできるだけ彼を避けているのに、シャーロットは彼に好意を示しているように見える。まもなく、シャーロットが自分の将来のために、コリンズ氏に近づこうと決めたのである。その後、コリンズ氏はすぐにシャーロットにプロポーズし、シャーロットも快くそれを受けた。

実際に、シャーロットはコリンズ氏のことが好きではなく、彼女はただ生活の安定を求めるだけだった。エリザベスはシャーロットから求婚の話を聞き、驚きの他に、シャーロットへも偏見を持ち始めたと考えられる。3日もしないうちに、シャーロットはコリンズ氏に跪かれるようになることを、エリザベスは以下のように評価する。

She had always felt that Charlotte's opinion of matrimony was not exactly like her own, but she could not have supposed it possible that when called into action, she would have sacrificed every better feeling to worldly advantage. Charlotte the wife of Mr. Collins, was a most humiliating picture! – And to the pang of a friend disgracing herself and sunk in her esteem, was added the distressing conviction that it was impossible for that friend to be

tolerably happy in the lot she had chosen. (123)

彼女はこれを情けないことだと考え、コリンズ氏と婚約することで、シャーロットが自ら辱めるとしか考えられなかった。エリザベスは、シャーロットが世俗的な利益のために、良い愛情を犠牲にすることを認められなかった。コリンズ氏と結婚すれば、シャーロットが幸せになれないと確信するエリザベスは、ひどく胸が痛くなり、姉のジェーンに以下のように訴える。

“My dear Jane, Mr. Collins is a conceited, pompous, narrow- minded, silly man; you know he is, as well as I do; and you must feel, as well as I do, that the woman who marries him, cannot have a proper way of thinking. You shall not, for the sake of one individual, change the meaning of principle and integrity, nor endeavor to persuade yourself or me, that selfishness is prudence, and insensibility of danger, security for happiness.” (133)

エリザベスの話から見ると、彼女はシャーロットの婚約に否定的な態度をとる。コリンズ氏のような愚かな男性と結婚しても幸せになれないと彼女は信じ、エリザベスにとっても、シャーロットもまともな考え方のできない女となってしまう。利益や金銭のため、愛情を犠牲するシャーロットと異なり、エリザベスは愛情や人間性を金銭よりも重視する。ここで、シャーロットと価値観が異なることから、エリザベスの高慢もみられると考えられる。

その後、ジェーンはキャロラインから手紙を受け取った。内容はビングリー氏がロンドンに滞在することが確定になり、ビングリー氏はダーシー氏の妹のジョージアナと一歩進みそうだと書かれていた。それを読んだジェーンは、ビングリー氏が自分を真剣に愛していないと考え、さらに落ち込んでいった。一方、ウィッカム氏はこの時に、エリザベスへの愛着は確実なものとなった。エリザベスもウィッカム氏のダーシー氏から受けたひどい処遇を見て、ダーシー氏について抱いた第一印象は正しかったと確信した。

ベネット夫人の弟とその妻であるガーディナー夫人は、クリスマス間にロングボーンに泊まりに来た。商人であるガーディナー夫婦は聡明で育ちが良く、特にガーディナー夫人はジェーンとエリザベスのお気に入りだった。ガーディナー夫人はエリザ

ベスと最近の出来事について話した後、ウィッカム氏との付き合いを慎重に考えたほうが良いと忠告した。また、落ち込んだジェーンを見て、ガーディナー夫人は自分たちがロンドンに帰る時に、一緒に来るよう勧めた。ジェーンもその申し出を受けた。シャーロットは、エリザベスに、三月になったらシャーロットの父親や妹とハンズフォードを訪ねてくることを約束させ、コリンズ氏と結婚し、ケント州に出発したのである。

しかし、ウィッカム氏はこの時点で関心をエリザベスから、キング嬢という、最近1万ポンドの財産を相続した女性に変えていた。それを知ったエリザベスはそれほど心が痛まなく、シャーロットへの態度と異なり、ウィッカム氏へは寛大な態度をとった。

2.2.1.3 エリザベスの目覚め

エリザベスとジェーンはそれぞれの旅に出発した。エリザベスは、ハンズフォードでコリンズ夫婦に迎えられ、シャーロットに家の中を見せてもらった。

Elizabeth was prepared to see him in his glory; and she could not help fancying that in displaying the good proportion of the room, its aspect and its furniture, he addressed himself particularly to her, as if wishing to make her feel what she had lost in refusing him. But though everything seemed neat and comfortable, she was not able to gratify him by any sign of repentance; and rather looked wonder at her friend that she could have so cheerful an air, with such a companion. (154)

エリザベスは安楽な家庭、いわゆるシャーロットの言う「心地よい家」“comfortable home” (123)の中で、シャーロットが満足していることを知り、驚くと同時に、彼女はシャーロットの結婚観が理解できるようになってきたと考える。これがエリザベスの一つ目の目覚めだと考える。

その後、ハンズフォードはロージズから晩餐会へ招待され、コリンズ氏は自分が尊敬する庇護者のレディー・キャサリンの偉大さを人々に示すことができると、興奮した。ロージズで暮らしているダーシー氏の叔母であるレディー・キャサリンは横柄で、虚栄心が強く、身分にこだわる人物で、娘をダーシー氏と結婚させたく、二人

の財産と領地を合わせ、莫大なものにするをもくろんでいた。その娘のド・バークは母親の影のような存在で、痩せ衰え、受け身の態度であった。エリザベスはレディー・キャサリンの傲慢さに威圧されたが、彼女はやはりレディー・キャサリンやその病弱の娘に批判的な目を向けることができた。

ハンズフォードを訪問している間、ダーシー氏はエリザベスに対して以前よりも親切になり、彼は彼女の魅力をより認めるようになったが、エリザベスは、ダーシー氏が以前自分に取った失礼な態度に今でも怒りを持ち、ビングリー氏がネザーフィールドから急に去っていたことにも、ダーシー氏が関係しているのではないかと疑っていた。また、彼女はダーシー氏の従兄弟であるフィッツウィリアム大佐から、ダーシー氏が最近、ある友達（おそらくビングリー氏）を軽率な結婚から救ったという話を聞き、ビングリー氏とジェーンの仲を裂いたのがダーシー氏だという疑いがさらに強くなった。

その日の午後、ダーシー氏はエリザベスに対する恋心を打ち明け、自分と結婚して欲しいと言う。

“In vain have I struggled. It will not do. My feelings will not be repressed. You must allow me to tell you how ardently I admire and love you.”

..... His sense of her inferiority- of its being a degradation- of the family obstacles which judgment had always opposed to inclination, were dwelt on with a warmth which seemed due to the consequence he was wounding, but was very unlikely to recommend his suit. (185)

ダーシー氏は、「エリザベスの身分の低さを感じずにはいられない」という感覚を克服するために、自分のプライドを犠牲してもかまわないと説明した。その話を聞いているエリザベスは、ダーシー氏が自分のことを格下の者として蔑視することが分かり、ますます腹を立てる。エリザベスは気持ちを落ち着け、ダーシー氏が話を終えた時に、彼女ははっきりと求婚を断った。また、彼女はこの機会を捉え、ジェーンに対する彼の判断、ビングリー氏の事柄への干渉、ウィッカム氏へのひどい待遇、彼女自身に対する蔑視などのことで、彼を非難し、彼への偏見は頂点に達したと考えられる。

翌日、エリザベスはダーシー氏から手紙を受け取った。その中で、ダーシー氏はエ

リザベスが彼に向けた非難に対して自己を弁護した。ネザーフィールドの舞踏会で、ジェーンは落ち着いたように見え、ビングリー氏の愛情と比べると、それほど深くはないとダーシー氏は考える。ベネット家は社会的地位に欠け、また、エリザベスとジェーン以外、ベネット夫人、三人の妹、ベネット氏は舞踏会で不適切な行為をして、ダーシー氏の「嫌悪感」“repugnance” (192)を引き起こしたのである。以上はダーシー氏の言うジェーンとビングリー氏を引き離した理由である。次に、彼はウィッカム氏との関係の真実について述べ始めた。ウィッカム氏はダーシー家が所有するペンバリーの家屋敷で働いていた前の執事の息子であり、彼はジェントルマンとしての教育を受け、牧師になるという希望を実現するのである。そして、ペンバリーの聖職禄を与えることをダーシー氏は約束した。また、5年ほど前に、先代のダーシー氏（ダーシー氏の父親）が亡くなる前に、ウィッカム氏が千ポンドを与えられ、今のダーシー氏による様々な援助も約束された。ところが、ウィッカム氏は人々には一見素晴らしい人格に見えるのではあるが、実は「邪悪な性質」“vicious propensities” (194)を持ち、節操のない、お世辞の上手な者だった。さらに、去年の夏、ウィッカム氏はダーシー家の財産を手に入れようとし、ダーシー氏の15歳の妹のジョージアナと駆け落ちしようとしたが、最後にダーシー氏は彼のこの試みを失敗に終わらせた。

エリザベスはこの手紙を読めば読むほど、ダーシー氏の正直さと誠実さを確信するようになり、また、ダーシー氏に対する自分の態度にも疑問を感じ始め、自分はあまりにも彼に偏見を持ちすぎたと気付いてきた。

She grew absolutely ashamed of herself. – Of neither Darcy nor Wickham could she think, without feeling that she had been blind, partial prejudiced, absurd. (201)

彼女のダーシー氏に対する感情は混乱していたが、この手紙で、彼のことを見直し、より好意的に見ようという気持ちになった。エリザベスは自己反省ができるようになり、ダーシー氏に対する偏見も理解に変わっていくことで、これをエリザベスの二つ目の目覚めだと考えても良いと思われる。

5月になって、エリザベスとジェーンはロングボーンに戻った。リディアは義勇軍連隊の司令官夫人のフォースター夫人に、ブライトンへ招待された。エリザベスは父親に、リディアを一人で行かせるべきではないと強く言ったが、ベネット氏はリディ

アをブライトンに行かせることにした。

夏の旅が近づき、ガーディナー氏の仕事の都合で、湖水地方まで行けなくなったので、代わりにダービシャーに旅行することになった。エリザベスはガーディナー夫婦とダービシャーにあるペンバリーに行き、そこの光景を楽しみながら、これまで気付かなかったダーシー氏の性格のいろいろな面を何気なく目にすることになった。彼らが訪問している間に、ダーシー氏が突然ペンバリーに戻ってきた。ダーシー氏は、彼女とガーディナー夫婦に対して、とても礼儀正しく振舞い、「エリザベスは嬉しく思わずにはいられなかった。また、勝ち誇った気持ちを感じずにはいられなかった。」
“Elizabeth could not but be pleased, could not but triumph” (244)となった。そもそも自分は彼に対してあまりにも偏見を持ちすぎていたと思うようになったエリザベスは、以前のダーシー氏との違いに驚きながら、自己反省をして、彼を尊敬し、彼のことをより好意的に見るようになり、二人の心の距離も縮まってきたのである。

エリザベスはダーシー氏に彼の妹のジョージアナを紹介され、そしてまた、ジョージアナとビングリー氏の間には特別な愛情が全くないことを知り、安心した。ビングリー氏はエリザベスに家族の様子を聞き、彼にはジェーンに対する愛情がまだ残っている様子を見たエリザベスは喜んだ。

一行はペンバリーでの晩餐会に招かれたが、その約束の時間が来る前に、エリザベスはジェーンから手紙を受け取った。ウィッカム氏とリディアがブライトンから一緒に駆け落ちし、結婚するためにスコットランドに行くつもりだったが、結局この二人はスコットランドではなく、ロンドンに行き、ウィッカム氏には、リディアと結婚する意志など全くないようだという内容であった。エリザベスは、ウィッカム氏の性格について知っていたのに、それを家族の人々に打ち明けなかったことで、自分を責めながら、ダーシー氏にことの次第を打ち明けた。ダーシー氏はエリザベスの話を聞いて、深く考え込んで立ち去った。

エリザベスとガーディナー夫婦はロングボーンに急いで行き、ガーディナー夫人はベネット夫人と娘たちを慰めるためにそこに泊まり、ガーディナー氏は、リディアとウィッカム氏を探す手助けをするためにベネット氏を追ってロンドンへ向かった。しかし、ベネット氏はリディアを見つけることなくロンドンから戻ってきた。ガーディナー氏は、遂にリディアを見つけ、リディアとウィッカム氏の結婚が整ったという手紙を書いた。明らかにウィッカム氏は相当なお金を賄賂として、どうやらガーディナ

一氏から受け取ったようだ」とエリザベスとベネット氏は考える。

リディアとウィッカム氏の結婚式が行われた後、二人は家族に会うためにロングボーンに戻ってきた。リディアは結婚式のことを話し、その話の中で、ダーシー氏が式に参列したと口を滑らせた。話を聞いたエリザベスはより詳しく事情を知りたくて、ガーディナー夫人に手紙を書いた。ガーディナー夫人の返事は、次のようなものだった。ダーシー氏がウィッカム氏を見つけ出すと、彼の借金を返済するだけでなく、結婚や生活に必要なお金を与えるとウィッカム氏を説得して、リディアと結婚させたのである。それから、ダーシー氏とガーディナー氏が、二人の結婚式の手配をした。さらに、ガーディナー夫人は以下のことをエリザベスに言う。

“His behavior to us has, in every respect, been as pleasing as when we were in Derbyshire. His understanding and opinions all please me; he wants nothing but a little more liveliness, and that, if he marry prudently, his wife may teach him. I thought him very sly; - he hardly ever mentioned your name.” (307-308)

ガーディナー夫人は、エリザベスに、ダーシー氏がこれほど寛大で立派なことをしたのは、エリザベスのためを思っているためだと自分は考えていると告げた。ダーシー氏からの愛情は明らかとなり、エリザベスは彼を理解し尊敬するだけでなく、愛情も芽生えてきたと考えた。

間もなく、ビングリー氏とダーシー氏の二人がネザーフィールドに戻り、ロングボーンを訪れた。ビングリー氏がジェーンへの求愛を再開し、二人は婚約することになる。

その時に、レディー・キャサリンがこの二人が婚約しそうだとの噂を聞き、ロングボーンにやってくる。そして、レディー・キャサリンはダーシー氏を自分の娘と結婚させるためエリザベスにダーシー氏と婚約などをしてはいけないと約束するように迫る。エリザベスはレディー・キャサリンの横柄な態度や高慢さに我慢できず、憤慨して、断固としてレディー・キャサリンの要求をすべて断ったのである。

“Yes, and I had heard it before. But what is that to me? If there is no other objection to my marrying your nephew, I shall certainly not be kept from it, by knowing that his mother

an aunt wished him to marry Miss De Bourgh. You both did as much as you could, in planning the marriage. Its completion depended on others. If Mr. Darcy is neither by honor nor inclination confined to his cousin, why is not he to make another choice? And if I am that choice, why may not I accept him?" (336)

婚姻関係において、お互いの愛情は重要だとエリザベスは考える。もしダーシー氏がド・バーグさんと無理やり結婚させられても、幸せになれないとエリザベスは信じる。もしエリザベス自身とダーシー氏がお互いに愛情があれば、彼女もダーシー氏を受け入れるであろうと、エリザベス信じている。さらに、レディー・キャサリンがエリザベスの身分を見下し、エリザベスはそれについても弁解する。

“In marrying your nephew (Darcy), I should not consider myself as quitting that sphere. He is a gentleman; I am a gentleman’s daughter; so far we are equal.” (337)

ダーシー氏は紳士であり、エリザベスも紳士の娘で、結婚しても、不平等などはないと、彼女は主張する。以前エリザベスは自分の社会的地位に劣等感を感じ、高慢になったが、今彼女は高慢になるのではなく、自信を獲得したのだと考えられる。これはエリザベスの三つ目の目覚めである。

レディー・キャサリンが怒り、後にロングボーンで起こったすべてのことをダーシー氏に告げたが、ダーシー氏はエリザベスに再び希望を抱くことになる。二人は再会し、ダーシー氏の愛の告白は以前と同じように情熱的で、エリザベスも彼と同様な気持ちを持っている。ダーシー氏が改めてエリザベスにプロポーズし、エリザベスはそれに同意し、二人は結婚することになった。

2.2.2 エリザベスの恋愛結婚観

ベネット家の二千ポンドという収入は、ジェントリー階級の人々として少なくはない。しかし、継嗣相続制度のせいで、ベネット家の資産のほとんどはコリンズ氏の資産になってしまうので、将来ベネット氏が亡くなったら、ベネット夫人と五人の娘達がわずかな収入しか手に入らない状態になってしまう。ベネット夫人はそれで不安になり、彼女の人生の一大事は娘達を結婚させることであり、そのために彼女が人を

訪問したり、情報を収集したりして、それが彼女の「慰め」“solace”(7)となっている。

このような状況の下で、女性に対して、結婚が生存手段となるので、エリザベスは不満を感じる。エリザベスは、もし自分の両親だけを見て、結婚を考えたら、夫婦になることの幸福感や楽しさを思い描くことができないと考えている。

父親は若気の至りで結婚してしまい、母親の美しい容貌に捕まってしまったのであった。塩谷清人も指摘するように、Austen は、男女がお互いに理解しあい、知的に釣り合いを持つことが結婚において最も重要であると主張しているのだと考えられる。エリザベスは Austen 自身の生き写しとして、お互いの理解や知的釣り合いを重視しながら、「尊敬、敬意、信頼」“Respect, esteem, and confidence”(228)というものも将来の結婚生活に期待しているのではないだろうか。

また、友人のシャーロットの結婚をみると、コリンズ氏は滑稽な愚物であるため、エリザベスはまさかシャーロットが承諾すると思っていないので、驚いた。しかし、シャーロットとエリザベスの結婚観は全く異なっている。

“I (Charlotte) am not romantic you know. I never was. I ask only a comfortable home; and considering Mr. Collins’s character, connections, and situation in life, I am convinced that my chance of happiness with him is as fair, as most people can boast on entering the marriage state.” (123)

シャーロットが「住み心地の良い家」“comfortable home”(123)を求めるのが、エリザベスは理解できたが、シャーロットのような結婚を自らしようとはしない。相手の性格などをよく知らず、ただな生活あるいは金銭、地位のためだけで結婚するなどというのは、エリザベスにとって考えられないことである。エリザベスは、愛なき結婚に否定的な態度をとった。

2.2.3 幸福な女性

女性であるエリザベスは継嗣相続の法律によって、ベネット家の財産を継承することができない。また、素っ気ない父親や、無教養な母親と妹たちのことで、エリザベスは将来について不安となり、次第に劣等感を感じ始める。劣等感を持つエリザベスは、それを克服しようとして、強そうに自身を偽装し、高慢となり、身の回りの人々

へ偏見も持つようになってしまう。

コリンズ氏の求婚、親友のシャーロットのコリンズ氏との結婚、ダーシー氏の求婚、リディアとウィッカム氏の駆け落ち、そしてレディー・キャサリンの非難などを経験したエリザベスは数々の目覚めを経験した。高慢な性格はなくなり、かわりに人々の考えや価値観を理解できるようになり、高慢は自信に変わったと論者は考えている。また、彼女はコリンズ氏やダーシー氏に偏見を持っていたが、コリンズ氏への偏見は理解へと変わり、ダーシー氏への偏見は尊敬、そして愛情に変わってきたと考える。

最後に、高慢と偏見から目覚めてきたエリザベスの結婚をみてみよう。ダーシー氏はエリザベスとの誤解を解き、また、彼はレディー・キャサリンからエリザベスの自分への愛情を知り、再びエリザベスに求婚する。今度はエリザベスが喜んで受け入れる。父親との会話から、エリザベスはダーシー氏のことを愛していることが分かる。

“I do, I do like him,” she replied, with tears in her eyes, “I love him. Indeed he has no improper pride. He is perfectly amiable, you do not know what he really is; then pray do not pain me by speaking of him in such terms.” (356)

愛なき結婚はできないと考えるエリザベスだが、ダーシー氏のことは心から愛している。さらに、エリザベスはダーシー氏が「自分が本気で選んだ人」“really the object of her choice” (356)だと思い、お互いに「尊敬、敬意、信頼」“Respect, esteem, and confidence” (228)を持ち、彼に対する自分の評価が徐々に高まったことを父親に説明する。エリザベスとダーシー氏の愛情は一日にして出来上がったものではなく、何カ月にもわたって、熟してきたものであると述べ、さらに力を込めてダーシー氏の美德（リディアとウィッカム氏の駆け落ちという問題を解決してくれたこと）を挙げた。父親は彼女の話聞き、結婚の許可を出した。エリザベスは自分を理解してくれるお金持ちのダーシー氏と結婚し、理想郷のペンバリーの女主人となるのである。

エリザベスは愛情を金銭より優先し、「尊重」、「敬意」、そして「信頼」を信念として、ダーシー氏の言う「はつらつとした心」“the liveliness of your mind” (359)を持ち、この理想的な男性と結婚することができ、彼女は幸運かつ幸福な女性となった。

2.3 リディアの不確定の未来

次女のエリザベスは父親のお気に入りだったが、ベネット家の末娘リディアは母親のお気に入りだった。母親に愛されて育ったリディアは、普通よりも早く社交界に入ることができた。しかし、彼女の愚かさや自己中心などの性格のために、彼女自身や家族が笑い者になってしまう。16歳の時に、リディアはウィッカム氏と駆け落ち、後にウィッカム氏に捨てられそうになったが、ダーシー氏の助けでウィッカム氏と結婚できた。しかし、リディアは姉たちよりも早く結婚したことを自慢し、自分の愚かさを全く悟っていなかった。

本節では、物語を分析しながら、姉のエリザベスと比較し、リディア・ベネットの真の性格を見出していきたい。また、リディアにまつわる描写を吟味し、駆け落ち、そして荒唐無稽な結婚をしたことの理由を考察することにより、彼女の結婚観を見ていきたい。

2.3.1 リディア・ベネットの性格

リディアは15歳の少女の姿で物語に登場する。彼女は母親に甘やかされ、自己満足をする傾向を持ち、思慮を持たなかったと考えられる。また、リディアは典型的な10代の若者で、どのような結果になろうとしても、自分さえ楽しければよいと決める人物だと Poplawski によって指摘されている。では、リディアはどのような性格を持っていたかを見てみよう。

2.3.1.1 自惚れ

若くて金持ちの独身男性であるビングリー氏はベネット家の近隣のネザーフィールドを借り、ベネット夫人は自分の娘たちをできるだけビングリー氏と会わせたいと必死になり、早めにネザーフィールドを公式訪問するようにと夫のベネット氏にしつこく乞う。その後、ベネット氏がネザーフィールドを訪問し、ビングリー氏もロングボーン（ベネット家の住む場所）を返礼訪問した。ビングリー氏はメリトンで舞踏会を行うことを決め、ベネット家の娘たちを誘った。それを聞いたベネット夫人はリディアにこのように言う。

“At our time of life, it is not so pleasant I can tell you, to be making new acquaintance

every day; but for your sakes, we would do any thing. Lydia, my love, though you are the youngest, I dare say Mr. Bingley will dance with you at the next ball.” (10)

知らない人と近づきになるのはベネット夫人にとってあまり愉快なことではないけれども、娘たちのためなら、ベネット夫人は何でもする覚悟だった。娘たちの中で、ベネット夫人は末娘のリディアを最も愛し、今度の舞踏会でビングリー氏は間違いなくリディアと一緒に踊ると思った。そこで、リディアは平然と云う。

“Oh!” said Lydia stoutly, “I am not afraid; for though I am the youngest, I’m the tallest.”
(10)

末娘であるものの、リディアは姉たちと一緒に社交界に出る許可を母親からもらった。また、母親の偏愛によって、彼女の心の中に根拠のない自信も生じ、上の引用のように、「年齢は一番下だけど、背が一番高いんだから」と言ったのであった。リディアは社交界に出る時に少女の持つ緊張感を感じずに、愚かな発言をすることの中に、彼女の自惚れという性格が見られるだろう。

2.3.1.2 自己反省能力の欠乏

メリトンの舞踏会はベネット家の人々にとって愉快的なものだった。長女のジェーンはネザーフィールドの一行に大いに称賛され、ビングリー氏もジェーンの美しさに惹かれた。次女のエリザベスはジェーンの喜びで気持ちが良くなった。三女のメアリーは教養のある娘だとビングリー嬢（ビングリー氏の妹）に褒められ、四女のキャサリン、そしてリディアは踊りの相手を常に確保していた。

ベネット夫人の姉フィリップス夫人はメリトンに住んでいた。ベネット姉妹たちはよくメリトンに行き、特にキャサリンとリディアは週に三、四回の頻度でそこへ出掛けて行って、伯母のフィリップス夫人を訪ねたり、そこにある婦人帽子店を覗いたりした。姉たちと比べると、キャサリンとリディアは機転が利かないため、他に面白いものや面白いことを探すために、どうしてもメリトンへ出掛ける必要があった。近頃、二人は伯母から、軍隊が近在にやってきたことを聞き出し、軍隊はこの冬メリトンに駐屯することになったのを知った。二人は士官たちの名前や縁故関係をフィリップス

夫人に聞き、士官たちの宿舎へ行き、後に士官たちと知り合いになり始めた。二人の話題は士官のことばかりであった。

ある朝、ベネット氏は二人がこのことを話題にして夢中になって喋っているのをしばらく黙って聞いていたが、やがて冷やかな口調で言う。

“From all that I can collect by your manner of talking, you must be two of the silliest girls in the country. I have suspected it some time, but I am now convinced.”

Catherine was disconcerted, and made no answer; but Lydia, with perfect indifference, continued to express her admiration of Captain Carter, and her hope of seeing him in the course of the day, as he was going the next morning to London. (30)

ベネット氏は二人の娘の話ぶりから、キャサリンとリディアは愚かな娘だと確信したと率直に述べる。四女のキャサリンは父親の話聞いてから不安になり、返事ができなかった。しかし、リディアの方は父親の話が聞こえていないように、カーター大尉が素敵な人で、彼と会いたいなどと相変わらず夢中であった。

以上の引用から見ると、キャサリンとリディアは姉たちのように勉強をせず、自分の楽しみを第一にする愚かな娘だったということが分かる。士官たちの話に夢中になってしまい、他の事が考えられなくなった。父親に皮肉を言われ、キャサリンは自分の行為に不安となり、自己を恥じるように見えたが、リディアはそうでなかった。リディアは父親の皮肉を無視することにし、キャサリンのように自己を恥じることもなかった。士官と恋愛ができるように祈っていたリディアは、全く自分の愚かさを認識せず、自己反省能力の持たない人間だと考えられる。

2.3.1.3 無関心

ビングリー姉妹は、ジェーンをネザーフィールドで自分たちと共に夜を過ごすよう誘った。ベネット夫人の指示（雨が降りそうだから、泊まるように言ってもらえるかもしれない）で、ジェーンは馬車を使わず、馬に乗って、ネザーフィールドに行った。途中、雨に降られ、ジェーンはびしょ濡れになってしまい、風邪もひき、ネザーフィールドでの滞在を延長せざるを得ないようになってしまった。ジェーンのことを大切に思ったエリザベスは徒歩で家からネザーフィールドまで行き、そこでジェーンの世

話をしていた。ジェーンの調子が少し良くなると、ベネット夫人はキャサリンとリディアを連れて、一緒にネザーフィールドを訪ねた。ジェーンを見舞ってから、ベネット夫人、エリザベス、キャサリン、そしてリディアはネザーフィールドの一行と雑談をし始めた。そこで、リディアはビングリー氏に次の舞踏会の話を持ち出した。

She had high animal spirits, and a sort of natural self-consequence, which the attentions of the officers, to whom her uncle's good dinners and her own easy manners recommended her, had increased into assurance. She was very equal therefore to address Mr. Bingley on the subject of the ball, and abruptly reminded him of his promise; adding, that it would be the most shameful thing in the world if he did not keep it. (45)

15歳のリディアは体格が良く、母親に甘やかされ、幼い頃から人前に出ることに慣れていて、それに加えて、彼女はフィリップス伯父の家で士官たちと食事を取り、彼女の気さくな態度で、士官たちに気に入られたので、自惚れがさらに高まってしまった。その自惚れによって、リディアは臆せず平気でビングリー氏に舞踏会の話を持ち出し、いきなり約束のことを思い出させ、もし約束を守らなかったらこれ以上の恥はないとビングリー氏に言った。ビングリー氏はリディアの言葉に対して、「約束は必ず守るよ。ジェーンが快くなったら、舞踏会の日取りはどうぞあなたが決めてください。ジェーンがまだ病気のうちには踊りたくないだろう」*“I am perfectly ready, I assure you, to keep my engagement; and when your sister is recovered, you shall if you please the very day of the ball. But you would not wish to be dancing while she is ill.”* (45) と巧妙に返事をした。リディアはそれを聞き、満足の意を表明した。

姉のジェーンが病気になったが、リディアはエリザベスと異なり、ジェーンの病気を心配することもなかった。代わりに、彼女は自分の楽しみを第一義とし、ビングリー氏に次の舞踏会のことを思い出させた。ここで、リディアは自惚れや軽薄であるうえに、自分以外の人に無関心な人間でもあることが分かる。

2.3.1.4 無教養

リディアとキャサリンは真赤な軍服を着る士官たちに夢中になりつつあり、他の人間には何の興味も覚えなかった。その時、ベネット氏の甥であるウィリアム・コリン

ズ牧師がベネット家にやってきた。ベネット家には息子がいないので、ベネット氏が亡くなったら、コリンズ氏は一家の財産を継承する人になる。相続の問題で、コリンズ氏はベネット家と不和となり、その関係を修復するのを口実にして、実はベネット家の娘の誰かと結婚しようと計画していた。

お茶の時間に、ベネット氏は嬉しそうにコリンズ氏を客間に案内した。そしてお茶が済むと、今度は娘たちのために何かを朗読してもらえないだろうかと言い出した。コリンズ氏は喜んで求めに応じた。そこで一冊の小説が差し出されたが、コリンズ氏は後退りし、自分は小説を一切読まないのだと断言した。コリンズ氏の言葉を聞いたキャサリンとリディアは以下のように反応した。

Kitty (Catherine) stared at him, and Lydia exclaimed. –Other books were produced, and after some deliberation he (Mr. Collins) chose Fordyce’s Sermons. Lydia gaped as he opened the volume, and before he had, with very monotonous solemnity, read three pages, she interrupted him with,

“Do you know, mama, that my uncle Philips talks of turning away Richard, and if he does, Colonel Forster will hire him. My aunt told me so herself on Saturday. I shall walk to Meryton to-morrow to hear more about it, and to ask when Mr. Denny comes back from town.” (67)

コリンズ氏が小説を読まないと言った後、キャサリンは目を丸くして彼を見詰めたが、それはかなり教養のない反応だと考えられる。しかし、リディアは叫び出すことにより、キャサリンよりも失礼な行為をしたと考えられる。その後、コリンズ氏はフォーダイスの説教集を選び、朗読を始めたが、彼の読み方は単調で、3ページも進まないうちに、リディアは士官たちのことについて喋り始め、コリンズ氏の朗読の邪魔をした。

彼女は上の姉の二人から静かにするように注意されたが、コリンズ氏は気分を害しており、リディアは真面目な本が苦手なようだと言い、彼女の失礼な行為に驚きを禁じ得なかった。それを見たベネット夫人は上の娘たちと一緒に、リディアが邪魔したことを鄭重に謝り、二度とそのようなことをさせないから、どうぞ本を読み続けてくださいと言った。しかし、コリンズ氏はまたその振舞を侮辱だと思って腹を立ててい

たので、朗読をやめ、ベネット氏とバックギャモンの準備に取り掛かった。

コリンズ氏は確かに自惚れの強い人間で、機転もきかなく、金銭崇拜の性格で、ベネット氏や娘たちの嘲笑の的となった。しかし、リディア以外、ベネット家の人々はコリンズ氏への軽蔑を表面に出さなかった。ベネット夫婦、そして上の娘たち（キャサリンも含め）はコリンズ氏を尊重していたが、リディアは彼の朗読を邪魔し、基本的な教養が全く見られなかった。また、コリンズ氏の怒りがまだ落ち着いていないのに、リディアは彼に謝ろうとせず、母親と姉たちが彼女の代わりにコリンズ氏にお詫びをしたことから見ると、リディアの無教養さが明らかになったのではないだろうか。

2.3.1.5 思考力の欠乏

ウィッカム氏はハンサムで、育ちの良い紳士で、物語に登場する時には肯定的な言葉で紹介される。彼はメリトンに駐屯する軍隊の中尉に任命されており、ベネット家の娘たち、特にエリザベスにとっては魅力的な存在であった。二人はお互いに好意を持つようになったが、恋愛関係にまでは発展していなかった。ある日、ウィッカム氏と一万ポンドの資産を持つキング嬢の仲が噂されたことがあり、ウィッカム氏が結婚によって経済的な利益を獲得するのもあり得るとエリザベスは考え、彼の不忠実を許してしまった。しかしその後、エリザベスはダーシー氏から、ウィッカム氏は賢い策略家で、お金のためには何でもする不誠実な男であり、女性たちとの関わりにおいては完全に自己中心的で良心を持たない人間だということを知った。それから、エリザベスはウィッカム氏への印象が変わり、愛慕の気持ちも蔑視に変わってしまった。

ある日、ベネット家の姉妹たちはロンドンのグレイスチャーチ・ストリートで時間を潰していた。そこで、リディアは軍隊や士官たちの話を持ち出し、メリトンに駐屯する軍隊が二週間後にブライトンの近くに陣を張ることを姉たちに知らせた。また、それ以外に、リディアはウィッカム氏の「素晴らしい知らせ」「excellent news”(212)も姉たちに知らせた。

“Well, but now for my news: it is about dear Wickham; too good for the waiter, is not it? There is no danger of Wickham’s marrying Mary King. There’s for you! She is gone down to her uncle at Liverpool; gone to stay. Wickham is safe.”

“And Mary King is safe!” added Elizabeth; “safe from a connection imprudent as to

fortune.”

“She is a great fool for going away, if she liked him.” (212)

ウィッカム氏がキング嬢と結婚する「危険」がなくなったと言い、ウィッカム氏が救われたとリディアは考えたのである。彼女はキング嬢やウィッカム氏の本性についてあまり知らなかったが、勝手にウィッカム氏の肩を持ち、キング嬢を悪い立場に置いてしまった。「キング嬢こそは財産目当ての無分別な結婚から救われた」とエリザベスが言っても、リディアはそれを信じず、キング嬢がウィッカム氏と別れることは愚かだったと考えていた。

リディアは士官たちに夢中になり、中尉のウィッカム氏のハンサムの顔にも夢中になってしまったと考えられる。ウィッカム氏がキング嬢と付き合う理由も分からず、その理由について、リディアは考えようとしなかった。また、ウィッカム氏がキング嬢と別れ、リディアは勝手にキング嬢を悪い立場に置き、ウィッカム氏がまるで被害者のようになってしまったと思った。姉のエリザベスがウィッカム氏の本性を教えてくれても、リディアはそれを信じず、キング嬢を責め続けていた。これで、リディアは物事を自分の一方的な感情によって判断し、その背後にある筋や事情が見えていない、思考力が欠けていた人間だと考えられる。

2.3.1.6 自己中心

リディアは、ウィッカム氏の属する軍隊の司令官であるフォースター大佐と最近結婚したフォースター夫人に、ブライトンに招待されたことで喜んでいて、エリザベスは父親のベネット氏に、家族が世間の笑いものになる可能性があるので、若く頼りにならないフォースター夫人のもとに、軽薄な振舞をするリディアを一人で行かせるべきではないと忠告した。しかし、ベネット氏はリディアに強硬な態度を取ろうとしなかった。

“We shall have no peace at Longbourn if Lydia does not go to Brighton.” (223-224)

もしリディアをブライトンへ行かせなかったら、ロングボーンに平和な暮らしは望めないとベネット氏は考え、結局リディアをブライトンへ行かせることにした。もし

リディアがこの時のエリザベスとベネット氏の話の内容を知ったら、腹を立て、その怒りを自分の限られた表現力では表現しきれなかったろう。

In Lydia's imagination, a visit to Brighton comprised every possibility of earthly happiness. She saw with the creative eye of fancy, the streets of that gay bathing place covered with officers. She saw herself the object of attention, to tens and to scores of them at present unknown. She saw all the glories of the camp; its tents stretched forth in beautiful uniformity of lines, crowded with the young and the gay, and dazzling with scarlet; and to complete the view, she saw herself seated beneath a tent, tenderly flirting with at least six officers at once. (224)

彼女の想像では、ブライトンに行けばこの世の幸せすべてが待っているのだった。彼女は士官たちの注目の的になっている自分の姿が眼に浮かんだ。ブライトンに行くのを切望していたリディアは、その期待が現実になりかかっていると感じた。その時、彼女は自分の軽薄さのためにすでに家族の評判を落としていることが分からず、これから家族の名誉をより損なうことを考えず、リディアは自分の楽しみしか考えていなかった。彼女の心の中で、自分の楽しみは家族の名誉よりも重要であり、自己中心の性格が見て取られる。その後、リディアはブライトンで楽しみを求めることができたが、家族に莫大な災難をもたらしてきたのである。

2.3.1.7 軽薄さ

リディアはウィッカム氏とブライトンを去り、ロンドンまで駆け落ちした。ウィッカム氏はリディアと結婚する気が全くなく、ブライトンを去ろうとした最大の理由は、そこで莫大な借金から逃れようとしたことだった。結局、ダーシー氏がウィッカム氏とリディアを見つけ出し、ウィッカム氏の借金を返ただけでなく、結婚生活を始めるために必要なお金も与え、ウィッカム氏を説得し、リディアと結婚させた。一方、リディアはウィッカム氏の計画を知らず、彼を本心から愛していた。

Wickham's affection for Lydia, was just what Elizabeth had expected to find it; not equal to Lydia's for him. She (Elizabeth) had scarcely needed her present observation to be

satisfied, from the reason of things, that their elopement had been brought on by the strength of her love, rather than by his; and she would have wondered why, without violently caring for her, he chose to elope with her at all had she not felt certain that his flight was rendered necessary by distress of circumstances; and if that were the case, he was not the young man to resist an opportunity of having a companion. (300-301)

リディア自身はそれを知らなかったが、姉のエリザベスには分かっていた。ウィッカム氏のリディアに対する愛情は、リディアのウィッカム氏に対する愛情ほど強いものではなかった。彼はリディアと結婚する気がないにも拘わらず、リディアと駆け落ちすることで、ベネット家に甚大な損害を与えたのを考えようとしなかった。二人の駆け落ちがウィッカム氏よりもむしろリディアの愛の力によるものであった。それに対して好きでもないリディアを連れてウィッカム氏が姿を消すことにした理由は、借金がかさんで夜逃げするしかないからだった。つまり、リディアと一緒に来てくれることによって、ウィッカム氏が逃走の途中の寂しさを解消するためだった。しかし、リディアはウィッカム氏の本心を見ることができず、一時的な楽しみを追求しようとし、家族の名誉を忘れ、このような不誠実な男と駆け落ちしてしまった。

二人の駆け落ちはベネット家を揺るがし、このような不面目なことをしたリディアは自分の名誉を汚した上に、家族全員に「屈辱」「humiliation”(264)と「不幸」「misery”(264)をもたらした。当時、女性の貞節は何よりも大切なもので、未婚の女が正式の結婚をせずに男と駆け落ちをしたことは、墮落だと考えられ、一族の不名誉とされていたのである。自分を愛していない人を好きになるのは愚かで、また、その人と駆け落ちしたことから見ると、リディアの軽薄さは明らかである。さらに、彼女の軽薄さは家族全員に恥辱と苦痛をもたらした。幸いに、ダーシー氏がすべての困難を解決してくれたので、ベネット家の体面が保たれた。

2.3.1.8 厚顔無恥

結婚式の後、リディアはウィッカム氏を連れてロングボーンに戻ってきた。ベネット家一行は新婚夫婦を出迎えるため朝食室に集まった。馬車が玄関前で止まる音がすると、ベネット夫人は喜んでいたが、ベネット氏は依然として厳しい無表情な顔をしていた。長女のジェーンと次女のエリザベスは、恐れと不安で居ても立ってもいられ

なかったが、リディアは馬車から降り、勢いよく駆け込んできた。

Lydia was Lydia still; untamed, unabashed, wild, noisy, and fearless, she turned from sister to sister, demanding their congratulations, and when at length they all sat down, looked eagerly round the room, took notice of some little alteration in it, and observed, with a laugh, that it was a great while since she had been there. (298)

ジェーンとエリザベスは、駆け落ちから戻ってきたリディアの立場を我が身に置き換え、妹はどれだけの辛い思いを味わっているだろうと気を揉んでいた。しかし、リディアは辛い思いを味わったことが全くなく、相変わらず厚顔無恥で、粗野で、騒々しく振舞っていた。姉たちに次々とお祝いを要求していた。

It was not to be supposed that time would give Lydia that embarrassment, from which she had been so wholly free at first. Her ease and good spirits increased. She longed to see Mrs. Phillips, the Lucasses, and all their other neighbors, and to heat herself called “Mrs. Wickham,” by each of them; and in the mean time, she went after dinner to shew her ring and boast of being married, to Mrs. Hill and the two housemaids. (300)

家族内部だけではなく、恥知らずのリディアは自分が結婚したことを親戚や近隣の人々にも見せびらかそうと図っていた。「ウィッカム夫人」と呼ばれたく、彼女は晩御飯の後にはわざわざ近隣のヒル夫人のところ、そして使用人のところに行って指輪を見せびらかした。また、実家に戻った後間もないある朝、ジェーンとエリザベスの居る場所に居合わせたリディアは結婚式前後の話を持ち出した。結婚する前の二週間から、叔父と叔母（リディアはその時にベネット夫人の弟のガーディナー氏の家に泊まっていた）が彼女の外出を厳禁し、パーティーにも参加させてくれなかったことに文句を言い続け、結婚式の当日のことについて、彼女は以下のように姉たちに言った。

“Well, and so just as the carriage came to the door, my uncle was called away upon business to that horrid man Mr. Stone. And then, you know, when once the get together, there is no end of it. Well, I was so frightened I did not know what to do, for my uncle was

to give me away; and if we were beyond the hour, we could not be married all day. But, luckily, he came back again in ten minutes time, and then we all set out. However, I recollected afterwards, that if he had been prevented going, the wedding need not be put off, for Mr. Darcy might have done as well.” (302)

結婚式の当日、リディアの引き渡し役の叔父はストーン氏に用事で呼び出され、二人が話を始めるときりがないと感じたリディアは焦りを感じた。しかし、叔父はすぐ戻ってきたので、みんなで結婚式場に出発した。リディアは後から考えてみると、叔父が来られなくても、ダーシー氏が代わりにできると口を滑らせた。それを聞いたエリザベスは叔母に手紙を書き、事情の詳細を聞き出し、ダーシー氏がウィッカム氏の借金を返し、リディアと結婚する必要なお金も渡したということを知った。ダーシー氏がリディアを救っただけでなく、ベネット家の名誉も救ってくれたことで、エリザベスはダーシー氏に心を込めて感謝した。一方、ダーシー氏の恩恵を受けたリディアはやはり無神経に振舞い、良心の呵責を感じることもなかった。

以上のことから見ると、リディアは自分の荒唐な行為を反省せず、ウィッカム氏との結婚は彼女にとって恥じるものではなかった。また、ダーシー氏の恩恵を受けても、ダーシー氏に感謝しようとしめない態度を見ると、リディアはやはり厚顔無恥な人間だと考えられる。

2.3.2 リディアの恋愛結婚観

以上の分析で、リディアの性格を見てきた。彼女は自惚れの強い人間で、士官たちに注目されたかった。また、自己中心な思想を持ったリディアは自分の楽しみを第一義にし、家族のことを考えず不誠実な男と駆け落ちしたことで、彼女は軽薄な女だったということも考察した。これから、リディアがウィッカム氏と駆け落ちをし、そして結婚に至る経緯を見ながら、リディアの結婚観を見出していきたい。

2.3.2.1 閃婚（スピード婚）

社会の開放は社会環境を変え、人間の交流も容易になった。時代の変遷に伴い、社会競争が激しくなり、中国の若者の言葉で言うと、「閃婚」と「裸婚」などの結婚が多くなってきた。しかし、19世紀のイギリスでは、このような現象は極わずかしかなか

ったが、リディアとウィッカム氏の結婚はこの両方に当てはまると考えられる。では、「閃婚」からみてみよう。

「閃」は一瞬きらりと光るという意味で、「閃婚」は閃光のごとく、付き合ってからすぐ結婚するという意味である。リディアはウィッカム氏と駆け落ち、その後家族とダーシーに見つかり、結婚することになった。互いの本性を知らず、長く付き合ったこともなかったから、二人の結婚は「閃婚」だと考えられる。このような「閃婚」の結果は、失望して離婚するケースが多い。誰かに惚れ込んでしまうと、理性的な判断は難しくなる。また、恋に陥ると、結婚や将来に対して冷静に判断することも簡単でなくなる。リディアはウィッカム氏のハンサムな顔に惹かれ、理性的な判断を失い、そして彼と駆け落ちしてしまった。また、結婚したリディアは幸せそうに見えたが、一旦ウィッカム氏の「邪悪な性質」“vicious propensities”(194)が分かると、彼女は自分が騙されたことに気づき、「閃婚」に後悔するだろう。

2.3.2.2 裸婚

「裸」とは服などを着ていない意味で、「裸婚」は結婚について物質の準備など何も持たないことを指す。ウィッカム氏は結婚しても大して変わらず、正当な職業を見つけないことができず、日々を無駄に暮らしていた。また、リディアは学問も教養もなく、外で働くのが不可能だった。結婚当初、ベネット氏と寛大なダーシー氏からある程度新婚夫婦の生活を応援してもらっていたが、時間が経つと、ウィッカム夫婦は家庭の経済状況を不安に感じ始めた。物語の最後に、長女のジェーンはビングリー氏と結婚し、次女のエリザベスは裕福なダーシー氏と結婚した。ダーシー夫人になったエリザベスは妹のリディアから以下のような手紙を受け取った。

“It is a great comfort to have you so rich, and when you have nothing else to do, I hope you will think of us. I am sure Wickham would like a place at court very much, and I do not think we shall have quite money enough to live upon without some help. Any place would do, of about three or four hundred a year;” (365)

手紙を読むと、リディアはエリザベスが裕福な人の妻となったことに、羨ましい気持ちを感じることができる。また、ウィッカム氏は宮廷護衛の任務に着きたがって

て、ウィッカム家の家計は助けなしにはやっていけないと述べた。ウィッカム家の経済状況は既に赤字となり、働かないと二人の生活は続けられないことになる。このことから、物質条件が充たされない婚姻関係の多くは維持できないと考えられる。その時のリディアはウィッカム氏と結婚したことに、後悔の念を持ったであろう。

2.3.3 不確定な未来

母親に甘やかされてきたリディアは自惚れ、家族へ無関心、無教養、そして過剰な自己満足などの性格上の欠点を持っていた。また、リディアは自ら勉強する意欲がなく、無教養かつ軽薄なままで、本性を知らない不誠実な男と駆け落ちして、その後ダーシー氏の好意により結婚できた。彼女は自分の未来に責任感を感じる事がなく、目の前の楽しさしか考えられない人間で、一時的な楽しさを手にした後、残酷な現実と直面しなければならなかったのである。以上のことにより、結婚前のリディアは沢山の人から助けをもらっていたが、結婚後、もしリディアが自ら現状を変えようとしなかったら、未来は不確定のままに残ると考える。

第三章 Louisa May Alcott と *Little Women*

3.1 波瀾万丈 ——Louisa May Alcott の人生——

3.1.1 Alcott 略伝

Louisa May Alcott は、1832年11月29日に、アメリカのフィラデルフィア市の近くのジャーマンタウンに生まれた。父親のブロンソン・オルコットは哲学者で、理想家で、超絶主義 (transcendentalism) を信奉し、決して裕福ではなかったが、人を差別することがなく、困窮した人や病人などを家に引き取って世話をしていた。Alcott の幼い頃、父親のブロンソンは当時としては過激な学校崇拜や私有財産を否定する菜食主義の禁欲的共同体作りを実践したため、経済的な失敗を繰り返し、一家は非常に貧困だった。そのため母親のアッパ・オルコットは貧しい家計をやりくりすることに苦心したが、四人の娘はやはり物質的な欠乏に苦しんでいた。しかし、姉妹たちは教育を父親から受け、同じ超絶主義者のエマソンやソローと親しくなり、時代を代表する思想家から薫陶を受け、知的な環境には恵まれていた。

Louisa May Alcott は次女で、少女期に父親の下で勉強した学問をもとに、姉のアンナと二人で学校を開いた。その後、彼女は脚本を書いたり、他家に奉公したりして、屈辱や苦勞を忍び、得た給料のすべてを母親に贈った。23歳の時に、初めての物語 *The Story of the Flowers* 『花物語』が出版され、文筆によって家計を助けることができ、彼女の夢が実現されたと考えられる。しかし、その年の11月に妹のエリザベスが病死して、文学の成功で得た喜びと妹を失った悲哀を同時に経験したのである。南北戦争中、北軍の志願看護婦となったが、Louisa May Alcott は腸チフスに掛かり、治療薬がもとで水銀中毒となった。その経験に基づいて、Alcott は *Hospital Sketches* 『病院のスケッチ』を書きあげ、その作品も彼女の作家としての知名度を上げる作品となった。30代になった Alcott は家計や生活費を稼ぐために、情熱的で意志の強い女性を中心に、愛、魔性、狂気、復讐をテーマとした煽情小説を書き出していた。

最も有名な作品である *Little Women* は Louisa May Alcott が 35歳の時に書いた少女向きの家庭小説で、彼女自身の少女時代を題材にし、作品の主人公ジョーは Alcott 自身だとよく考えられている。この物語が出版されてから、全米の少女たちは熱狂して、

Alcott は作家としての地位と経済上の安定を確実にした。父親の負債を返し、母親を楽にさせ、妹のメイをイタリアに留学させ、残りのお金で彼女は友人と共にヨーロッパを見学してきた。

しかし、中年になった Alcott は病弱になった。それにもかかわらず、掃除、洗濯、料理などを引き受け、両親に孝養を尽くした。1888 年、Alcott の体調が悪化したものの、執筆をつづけながら、父親の介護もしていた。父親のブロンソンが亡くなった二日後、Alcott も他界した。享年 55 歳だった。

3.1.2 Alcott 作品紹介

Alcott の作品を概観してみると、経験に基づき現実を描いたリアリズム小説、大人向けのロマンス、スリラー、サスペンスを含む煽情小説、そして *Little Women* をはじめとする家庭小説、児童文学に分けることができると考えられる。当時イギリス社会が礼賛した「家庭の天使」はアメリカにおいても女性の理想とされていたが、Alcott はそれを完全に受け入れることはできなかった。彼女は作品を通して、「家庭の天使」以外にも、女性がそれぞれの人生を送ることができると主張していた。本章では、Alcott の作品を見ながら、小説の特色を見出していきたい。

3.1.2.1 *Hospital Sketches* 『病院のスケッチ』

『病院のスケッチ』は Alcott 自身の経験に基づき描いたリアリズム小説だと考える。南北戦争中の 1862 年 10 月、オルコットはワシントン D.C.に出発した。そこで、彼女はワシントン郊外のジョージタウンにあるユニオン・ホテル病院に配属され、志願看護婦となった。肺炎や腸チフスなどの病気に掛かっている者、身も心もボロボロになっている者、足や手を失った者の看護が Alcott に与えられた仕事であった。Alcott は誠意を込めて兵士たちを看護していたが、粗末な食事、大量の仕事、不規則な生活で、彼女自身が腸チフスに掛かり、病院に配属されて 6 週間後に、家に帰されてしまった。しかし、短期間ではあったが、Alcott は自分の看護婦としての経験や話、そして病院の実情を家族への手紙に書きこんでいた。彼女の友人が『ボストン・コモンウェルス』の編集長を務めており、その友人の助力で、Alcott はその手紙を編集して、本として出版したのである。

その作品の主人公の名前はトリビュレーション(Tribulation)で、「苦難」の意味をもち、

彼女は苦難を受け止める覚悟があり、その思いを実行するために戦傷者病院の志願看護婦になることを決意した。その後、彼女は赴任先に移動し、様々な手続きに悩まされた姿が描かれている。ワシントンに着いた後、彼女が看護婦として働いた様子や、傷病兵士や病院の様子が描写されていた。Alcott は主人公のトリビュレーションの名を使い、看護婦としての日常を手紙や日記に書き残し、本当の戦時の現実を人々に語り伝えていた。この本を出版した後、Alcott はこの作品を読んだ人々の問いかけに答える内容を「後記」に入れ込んだ。小説は病院管理の悪さや無秩序、指導者の欠如、傷病兵士が死を迎える様子などを描き、「スケッチ」と言っても、大まかな「スケッチ」ではなく、苦渋に満ちた生き方を余儀なくされた人々の姿も読者に訴えていたと考えられる。

『病院のスケッチ』は簡潔な小説だが、南北戦争時の病院のあり方を率直に描写し、傷病兵士や戦争の残酷などを書き込みながらも、絶望に陥らず、積極的に仕事に献身して、戦時の現実をありのまま記録したものだと言える。Alcott は兵士たちを看護したことで、戦時の兵士たちの実像を見ることができ、死という恐ろしい征服者の威力だけでなく、兵士たちのヒロイズム、愛、苦悩を見たり感じたりしたことは、彼女に人生に対する深い洞察力を与えたと考える。一方、一カ月余りでしかなかった看護婦生活により、Alcott は健康を損なった。腸チフスの治療の途中、彼女は水銀中毒になってしまい、その後遺症に生涯苦しめられることになった。

3.1.2.2 *Work A Story of Experience* 『仕事、または経験の物語』

この作品は、19世紀を生きる女性が仕事との関係をテーマとした小説である。良家の女性が仕事を持つことは一般的ではない時代に、主人公のクリスティが世の中に出て様々な職業を経験する話である。この小説を創作し始めたのは Alcott が 29 歳の時だが、出版されたのは彼女が 40 歳の時だった。

主人公のクリスティは Alcott 自身の経験に基づいて創造された人物だが、多少脚色が加えられている。クリスティが経験した家政婦、女優、家庭教師、お針子などは Alcott が取り組んだ仕事であり、彼女自身の経験を最も表現している作品だと考えられている。この小説はイギリスのジョン・バニヤンの *Pilgrim's Progress* 『天路歷程』の影響を受けており、主人公のクリスティが天国へ至る道を歩む姿が描かれ、その天国というのは女性の自己実現が叶った場所という意味であり、女性が全般的に仕事に就かな

い時代に女性が働くことの意義を説いたのである。物語の前半では、Alcott の仕事の経験に基づいて、働くクリスティの様子が書かれている。しかし後半には、Alcott が経験したことのない結婚につながるクリスティの恋愛などが作品の中心となっているので、すべてが Alcott の経験とは言えない。小説はまず仕事を得ようとするクリスティの野心と現実の困難が描かれ、その後彼女が仕事から離れ、やがて結婚相手となる男性との出会い、結婚、そして看護婦としての働き、夫との死別も描かれ、最後はクリスティが絶望と懊悩から再生することが描かれている。

作品全体を振り返ってみると、前半部分にあふれていたクリスティの働くことに対する情熱と意欲が、後半部分には希薄になり、夫が亡くなってから、彼女は仕事との関わりが途切れしまったが、小説のテーマは女性と仕事にあり、結婚における夫婦の平等、伝統思想では考えられない共稼ぎ夫婦を描き、Alcott はこの小説によって新しい女性思想と女性観の種を蒔いたと考える。

3.1.2.3 煽情小説

煽情小説はイギリス、アメリカで 1860 年代から 1870 年代に盛ん書かれていた。当時の家庭小説では女性主人公は弱さを逆に力に変え、たとえ無力であってもその高潔さが悪を凌ぐ力になるという特徴を持つ。一方、煽情小説は偽装、重婚、殺人などの毒々しい事柄が多く使われ、通俗性を持つと同時に、19 世紀の女性に求められる受け身で従順な生き方を転覆させることができるという幻想を与えることで、人気を得たのである。

Alcott の煽情小説は主に 1860 年代から書かれ、*Little Women* 『若草物語』が出版されて以降は、この種類の小説を Alcott は敬遠するようになった。彼女は「ポーリーンの激情と罰」という短編で賞金 100 ドルを獲得した後、煽情小説に情熱を注ぎ、作品は主に大衆週刊新聞に匿名で掲載されていた。実際に、*Little Women* 『若草物語』が世に出る前に、煽情小説の原稿料は Alcott 家の生活を守る重要な役割を果たした。*Work A Story of Experience* 『仕事、または経験の物語』のようなリアリズム小説を書くのは簡単ではなく、早く書ける煽情小説を書き、これが原稿料を稼ぐことに最も良いと Alcott は考えていた。しかし、父親のブロンソンは娘に文学のレベルを高く保たせようとしたので、Alcott は煽情小説の代わりに、家庭小説や少女文学に目を向けるようになった。

ここで簡単に Alcott の二作の煽情小説を紹介する。まず、1865 年の *V・V・or, Plots and Counterplots* 「V・V、または策略と対抗策」から紹介していきたい。主人公のヴァージニーは最初から最後まで策略に次ぐ策略を操り広げる。ヴァージニーは富と社会的地位を与えてくれるイギリスの貴族と結婚することを望み、狙いを定めた男性とその婚約者を策略にかけていた。また、この物語は策略をめぐるさせるのは主人公のヴァージニーだけではなく、主要人物たちは自分の都合に従い策略やそれへの対抗策を立て、例えば従兄弟のヴィクターの計略、ヴァージニーとの結婚を企むアランの計画などが次々と描かれている。さらに、物語の中心は夫のウェイン大佐亡き後未亡人となったヴァージニーが結婚相手に狙ったダグラスに掛ける策略とダグラスの対抗策である。

ヴァージニーの策略は詐欺でもあり、彼女の詐欺行為は、相手を死に追い込み、重罪に値するが、彼女は刑に服することはなかった。女性が経済的に自立し、自尊心を持って自由に生きることが許されない社会に対して、作者の Alcott は主人公の行為を通して女性たちの激しい怒りを表していたことが分かる。

次は 1866 年の *Behind a Mask: or, A Woman's Power* 「仮面の陰で、または女の力」を紹介したい。主人公のジーンは貧しくて良い家柄も持たず、三十過ぎの離婚を経験した女性だった。彼女は生活を支えるために、ヴァージニーと同じように計略をめぐるようになった。結婚前の職業であった女優に戻るには年を取りすぎていることを意識したジーンは、その卓越した演技を詐欺師の武器にした。彼女は富と地位を持つ貴族を狙い、自分の過去も現在も嘘で固め、「家庭の天使」(*The Angel in the House*)の仮面をかぶり、演技者としての能力をフルに活用していた。

ジーンは *V・V・or, Plots and Counterplots* 「V・V、または策略と対抗策」の主人公ヴァージニーよりも、胸中に様々な怒りを持っていたと考える。彼女の怒りは富も地位もある者の持つ誇りと偏見、男性の支配、そして当時の閉塞的な女性観に向けられていると考えられる。Alcott も A. M. Barnard という筆名を使うことで、主人公ジーンのように仮面をかぶり、この物語を通して当時の社会への不満や怒りを表していた。

3.1.2.4 *Little Women* 『若草物語』シリーズ

Little Women (『若草物語』と『続若草物語』) はオルコット家がコンコードで過ごした数年間を舞台にして、一家の四人姉妹がモデルとして描かれた作品である。父親の

ブロンソンはフルートランズの共同体が瓦解した後、母親のアッパは父親（Alcott の祖父）の遺産とエマソンの援助で、コンコードにヒルサイド・ハウスを購入し、そこでオルコット家は比較的穏やかな暮らしをし始めた。Alcott は 12 歳から 16 歳までコンコードで暮らしていて、彼女にとって、その時期は最も幸せな日々であったと考えられる。

Alcott は自分の家族をモデルとして、編集経験や、演劇的な手法を活かし、人物を生き生きと描いた。長女のアンナは本作のキャラクターとしてはメグとなり、綺麗で、やがてきちんとした家庭の主婦となった。三女のエリザベスはベスと呼ばれ、音楽好きな少女で、家族にとって天使のような存在だと考えられる。末娘のメイ(May)の名前の綴りの順を変えたのがエイミー(Amy)であり、絵が得意で、上品さを求め、いつも思い通りに振舞って、わがままな末娘だ。次女の Louisa May Alcott は主人公のジョーで、背が高く、インゲン豆のように細くて、栗色の髪の毛をして、頑固で、ぶっきらぼうな話し方をする少女だ。この御転婆なジョーは、自分が男の子だったらよかったと思いい、作家になりたがっていた。マーチ(March)という姓は、母親のアッパが結婚する前の姓メイ(May)を振って、五月(May)を三月(March)に変えてつけられたものだ。Alcott は、メイ家の気質と伝統を取り入れ、メイ家の物語を書いていた。マーチ家の四人姉妹を導く人物はマーチ夫人であり、そのモデルとなったのがフルートランズ時代やそれ以前の、激しい、感情の揺れ動くアッパではなく、後の穏やかな生活における母親のアッパだった。一方、Alcott は父親のブロンソンを登場させず、若い読者向けの本に、彼のような人物はあまりに非現実的だと考えたと思われる。また、子供時代を思い出すと、Alcott はブロンソンをととても愛していたが、家族が幸せを共有したい時に、ブロンソンは不在だった。そこで、物語の中にマーチ氏はほとんど姿を見せず、南北戦争に牧師として行っていることにした。

この物語は *Pilgrim's Progress* (『天路歷程』) のプロットに影響を受けており、四人姉妹がその物語の主人公クリスチャンのように、それぞれの性格上の欠点や悩みなどの重荷を背負いながら、巡礼を続け、「屈辱の谷」を越え、「絶望の沼」を渡り、「虚栄の市」の誘惑を退けていくのである。小説は愛情と安心感に満ちた温かい家庭生活を描き、Alcott もマーチ家の一員であり、姉妹たちはそれぞれの才能を生かして、人のために、そして自分のために働き、賢明な女性として人生を充実したものにしてきたのである。

舞台は Alcott の少女時代の故郷のコンコードである。物語の中では、ジョーが脚本を書き、姉妹たちと芝居を行ったりしていた。剣を持ち、ブーツを履いた男性の役はすべてジョーがやり、美人のメグはロマンティックなヒロインを熱演する。衣装や姉妹たちが着る服のほとんどが古着で、オルコット家の姉妹たちが長年そうしてきたようだった。また、家計のために、ジョーは煽情小説の執筆に没頭して原稿料を稼ぐことも、Alcott 自身の経験に基づいて書かれた。

『続若草物語』は *Good Wives* という副題がつけられ、亡くなったベス以外の姉妹三人は各々結婚して、妻、そして母親になる話である。メグは家事を行いながら、子供の世話や教育をする良い母親になる。ジョーは夫のベア氏と学校を創り、共に仕事をする。エイミーは夫のローリーと一緒に芸術家になるという夢を抱く若者を応援する。この物語は読者に、女性が「家庭の天使」以外に、いろんな生き方を選ぶことができると伝えた。小説の中の女性人物は、個として独立心を守り、当時の女性観に従うばかりではなく、人としての自立心を持ちながら幸せな家庭生活を楽しんでいる。

3.1.2.5 Alcott の作品の特質

Alcott のリアリズム小説、煽情小説、そして家庭小説、児童文学に登場する女性人物たちを見てきた。煽情小説の女性主人公たちが「家庭の天使」を装い、家柄の良い裕福な男性や周りの人々を巧みに騙す様子が鮮明に描かれていたが、その物語の根底にあるのは女性が結婚して男性に依存する以外に生きる方法はなかったことへの批判が表現されていることを指摘してきた。煽情小説を通して、「家庭の天使」(The Angel in the House)を理想とされた女性のイメージやその不条理に対して、作者の Alcott は自らの憤りを表していた。

リアリズム小説と *Little Women* においては、煽情小説の主人公と少し異なるところがあり、ヒロインたちは人々を騙してはいないが、彼女たちは生きながら、社会が女性に求める規範と闘うことがあった。彼女たちは「家庭の天使」の仮面をかぶることなく、自己の意志を尊重し、積極的に行動する。自分の人生が如何にあるべきか、女性としてどのように生きるべきかを、彼女たちは慎重に考え、「家庭の天使」を無視して、自分が正しいと信じる道を歩む気概も持つ。

Alcott の創造した女性人物のほとんどは彼女自身と同じように、伝統的な生き方に従わず、男性が賛美する理想の女性を転覆させ、女性に抑圧的な社会に挑戦し、波瀾

万丈な人生を送ることが分かる。

3.1.3 Alcott の恋愛結婚観

Alcott は男性に求愛されたことがあったが、それらの男性のことを愛していなかったため、Alcott は彼らの求愛を断ったのである。このことから見ると、愛が存在しない結婚は幸せにならないと Alcott は信じていたと考えられる。しかしそのほか、恋愛経験の少ない Alcott の人生から、結婚観を見出すのは難しいが、母親の 아빠、そして *Little Women* のジョーから、Alcott の持つ具体的な結婚観を見てみよう。

Alcott の幼少期に、父親のブロンソンは自分の理想を実行するために、学校を開いたり、禁欲的共同体を作ったりしたが、すべて失敗で終わったので、一家を非常に貧困な状況に落とすことになった。そこで、母親の 아빠は働き始め、家計の賄いに苦心した。やがて、アッパはソーシャル・ワーカーとなり、家事や家族の世話をしながら、社会にも自分の力を尽くしていた。母親の行動を見た Alcott は、女性も男性と同じように、家庭から出て職業に就き、自分の力によって家計を支えながら、自己の価値を実現することができるようになるようになった。大人になった Alcott は母親の思想を継承し、文筆の才能を発揮し、原稿料を獲得して、家族を守ることができるようになった。

また、彼女自身がモデルとなった *Little Women* のジョー・マーチを見てみよう。Alcott はジョーを幼馴染のローリーと結婚させるのではなく、年配のベア氏と結婚させることにした。ベア氏は一見魅力的な存在ではないが、見方によれば堂々とした慈愛にあふれる温かい性格を持ち、それなりの魅力があると考えられる。ベア氏の持つ親近感、自分の愛情を表現する優しい包容力が称賛されるべきだと Alcott は考えていた。また、彼は妻が働くことを受け入れることができる男性でもある。ジョーがベア氏と結婚を決めた時に、以下のように語っている。

“I’m to carry my share, Friedrich, and help to earn the home. Make up your mind to that, or I’ll never go,” she added, resolutely, as he tried to reclaim his load. (506)

ジョーは家庭の責任を夫に任せることをせず、妻として自分も責任を分担するつもりで、家のためにお金を稼ごうと決める。彼女は経済的に夫に依存するつもりがない

ことを明らかにした。自分なりに稼ぐということはジョー自身の独立と自由を守るための基本原則であり、ベア氏はジョーにとって働くことが不可欠だということをよく理解していた。その後、ジョーはベア氏と結婚して、マーチ叔母から継承した屋敷を学校に変貌させ、夫と共に仕事をして、家計を支えている様子が描かれている。Alcott は、ジョーとベア氏の関係において、夫が妻を扶養するという主従関係を断ち切ることで、そして夫婦は平等な立場にあることを主張した。

3.1.4 Alcott と *Little Women*

Alcott は文学創作に人生を捧げ、作品における女性問題、男女平等などの社会現象への言及が多く、フェミニスト小説家として世界各地の読者に知られている。また、Alcott は母親のアップと同じように、家庭から出て、自分の文学的才能を活かして金銭を稼ぎ、経済的に自立するだけでなく、家族を支え続けていた。Alcott は一生未婚だったが、互いに愛し合って、男女平等な立場にある結婚に憧れていたことが、ジョーの結婚のあり方を見ると明らかである。Alcott がもしベア氏のような男性と出会ったら、彼女もジョーのように結婚へと進むことができたのだろう。これから Alcott の *Little Women* に着目し、主人公のジョーは多くの研究者によって研究されているので、本論文では、三女のベスと末娘のエイミーに目を向け、二人の *Siblings* の性格と恋愛結婚観を見ていきたい。

3.2 非典型的「家庭の天使」ベス

19世紀後半に「新しい女性」(The New Woman) と論者が以下に定義付けるような概念で特徴付けられる女性像が出現する。新しい女性は家庭の外で世界を体験し、人生の充実感を見出そうとする希望を抱くことが特色である。新しい女性は必ずしも結婚を拒否するのではなく、平等な夫婦関係、既婚女性が外で働く権利を擁護すると Gregory Eselein と Anne K. Philips は考えている。しかし、当時のニューイングランドでは産業革命が始まり、工業主義が農業労働に取って代わり、外なる男性が労働の場と内なる女性が労働の場が明確になってきた。こうした背景から、有賀夏紀の指摘する「賢妻良母」型の女性が多くなり、「家庭の天使」という概念も登場することになった。女性の働く場は家庭で、働く内容は子育てと家事で、女性は真に家庭の光であると Harvey Green によって指摘される。このように、女性の家庭性に注目する理論が社

会で広がり、そして浸透した。

Little Women で、「新しい女性」のジョーとエイミー以外、長女のメグと三女のベスはこのような「家庭の天使」だと考えられる。メグは婚約、結婚、そして母親という順当な道を選んでいるが、ベスはそうではない。ベスは Alcott によって「我が家の家庭の天使」と描写され、また 20 代前半で亡くなってしまう。彼女は婚約者、嫁、母親の身分を経験したことがなく、非典型的「家庭の天使」だと考える。本節では、ベスの性格を分析することによって、彼女の美德、そして彼女はどのように性格上の欠点を克服するかを見ていきたい。また、ベスはメグ、ジョー、エイミーと異なり、結婚していないのではあるが、彼女の恋愛結婚観も見出していきたい。

3.2.1 ベス・マーチの性格

ベスはマーチ家四人姉妹の三女であり、作者の Louisa May Alcott の妹 Elizabeth Sewall Alcott をモデルとしている。ピアノと音楽的素質以外に、ベスにはほかの才能はほとんどないと考える。彼女は家族を重視し、ほかの関心や願望をあまりなく、自分の思うことについては滅多に語らない人物である。では、次の節にて、ベスの性格を見よう。

3.2.1.1 優しい心

クリスマスの朝、四人姉妹はそれぞれ母親から本のプレゼントをもらった。姉妹たちは本を読んで、女中のハンナも朝ご飯を用意していた。ご飯の準備ができ、姉妹たちがテーブルの前に座った時に母親のマーチ夫人が家に戻ってきた。マーチ夫人によると、家からあまり遠くないところに、お気の毒な女の方（フンメル夫人）が、生まれたばかりの赤ちゃんをかかえて寝ている。六人の子供たちは火の気のない部屋で凍えないように一つの寝床の中にかたまり合っている。そこには食べるものも何もない。それでフンメル家の長男が、マーチ夫人のところへみんなが飢えと寒さに苦しんでいると告げにきたのであった。そして、マーチ夫人は姉妹たちに今日の朝御飯を、その人たちにクリスマスの贈物としてあげてくれないかと聞いたのである。では、姉妹たちの反応を見よう。

They were all hungry, having waited nearly an hour, and for a minute no one spoke;

only a minute, for Jo exclaimed impetuously, -

“I’m so glad you came before we began!”

“May I go and help carry the things to the poor little children?” asked Beth, eagerly.

“I shall take the cream and the muffins,” added Amy, heroically giving up the articles she most liked.

Meg was already covering the buckwheats, and piling the bread into one big plate. (22)

叫んでいるジョー、最も好きなものを提供しようとするエイミー、ケーキや食パンを大皿にもりあげるメグと異なり、善行をする前に、ベスは「可哀そうな子供たちのところへ、ものを運ぶお手伝いしてもよろしいでしょうか」と熱心に母親と姉妹たちに提案した。提案への姉妹たちの反応から、強く賛成する気持ちを感じ取るのであった。マーチ夫人の話から、隣人のフンメル家の状況が分かり、ベスは彼らのことを同情するだけでなく、自分の姉妹たちの気持ちも良く考えていた。姉妹たちが母親の提案に同意してから、ベスも行動し始めた。メグ、ジョー、エイミーの心も優しいが、ベスの心がより優しいと感じられる。

ベスは内気で、学校に行かず、家にいて父親の下で勉強をしていた。父親が南北戦争の戦場に行った後、彼女は自力で勉強をし続けたのである。また、ベスは世話好きの温順な少女だと森山千晶が指摘している。

She was a housewifely little creature, and helped Hannah keep home neat and comfortable for the workers, never thinking of any reward but to be loved. (46)

ベスはまるでマーチ家の主婦のように、働いている人々（メグとジョー）のために、ハンナと共に家を片付けたり、掃除したりして、家庭を住み心地の良い場所にしてきた。それに対して、ベスは報酬を得ようとせず、みんなに愛してもらうことで満足していた。また、家族以外に、ベスは姉妹たちに捨てられた人形や猫たちへも優しい心を持っていた。

There were six dolls to be taken up and dressed every morning, for Beth was a child still, and loved her pets as well as ever; not one whole or handsome one among them; all were

outcasts till Beth took them in; for, when her sisters outgrew these idols, they passed to her, because Amy would have nothing old or ugly. (46)

人形が古くても、醜くても、ベスはそれらを大切にしていた。彼女は人形のために病院を設け、食べ物を与え、服を着せ、優しく世話をし、沢山の愛情を注いだのである。ベスは人形と猫たちと長い一日を過ごし、寂しくなったり、怠惰になったりはせず、自分の小さな世界では「想像の友達」「imaginary friends”(46) たちがおり、彼女の世界は大いに賑わっていたのである。ベスは優しい心を持ち、家を綺麗にし、家族を応援し続けた。猫たちや姉妹たちのいない人形と仲良くし、毎日を充実して過ごしていたと考えられる。しかし、この心が優しいベスも悩みを持っていた。

3.2.1.2 内気の克服

優しいベスは家族、猫たち、そして人形の目から見ると、天使のような存在だが、彼女も他の少女と同様に、悩みを抱いていた。時々、彼女は涙をこぼし、それは彼女が好きな音楽を勉強できないことと、ちゃんとしたピアノを持っていない悩みだった。ベスは音楽が好きで、楽譜を工夫して覚え、家にある古いピアノで練習していた。しかし、その調子はずれ、キーが黄色になったピアノを見て、ベスは悲しさを覚えるのであった。

その頃、ジョーは隣の豪邸に住んでいるローレンス氏の孫のローリーと知り合い、彼もベスと同様に、ピアノがうまく弾ける人間であった。主人のローレンス氏も昔から母親のマーチ夫人と友人であるため、両家の仲はより深まり、姉妹たちもローレンス氏から豪邸に入る許可をもらった。

The big house did prove a Palace Beautiful, though it took some time for all to get in, and Beth found it very hard to pass the lions. Old Mr. Laurence was the biggest one; but, after he had called, said something funny or kind to each one of the girls, and talked over old times with their mother, nobody felt much afraid of him, except timid Beth. (66)

姉妹たちは宮殿のように見えるローレンス氏の豪邸にあこがれていた。そこに温室があり、メグは気ままに中を歩き、植物を鑑賞したり花束を作ったりした。ジョーは

ローレンス氏の図書室の蔵書を読んだりした。エイミーも豪邸の美を愉しんで描画したりした。豪邸には、綺麗なピアノも置かれていて、ベスがそれにあこがれるが、彼女はどうしてもそこに入る勇気がなかった。実際に、ベスはジョーに連れられてそこに行ったことがあったが、ローレンス氏の濃い眉や大きな声で、彼女は怯えてしまい、いくら素敵なピアノがあっても、二度と豪邸へは行かないと宣言した。

ここから見られるのはベスの内気な性格だと考えられる。彼女は学校に行かず、家で独学することや、外で遊びなどせず、猫たちや人形と一日過ごすことから、ベスの「人を恐れる」“being afraid of people” (18)という特質が分かるが、ここで、彼女の内気な性格、あるいは欠点がより一層明らかになってきた。

ベスの性格を知らなかったローレンス氏はそのことを聞き、事態を改めることを決めた。彼はマーチ家を訪ねる時に、話題を音楽に持っていき、有名な歌手やオルガン、そして面白い逸話を話していた。ベスはローレンス氏の話に惹かれ、段々老紳士に親近感を持つようになってきた。また老紳士は、ローリーが最近音楽を怠っていて、ピアノを弾かなくなっていることに困っていると言った。また、ローレンス氏自身は遠く離れた書斎に閉じ籠もっているので、娘たちが気の向いた時に自由に弾きに来て良いということをマーチ夫人に伝えた。そこで、ベスは自分の小さな手をローレンス氏の手の中に滑り込ませ、喜んでた。

“I’m Beth; I love it dearly, and I’ll come if you are quite sure nobody will hear me- and be disturbed,” she added, fearing to be rude, and trembling at her own boldness as she spoke.
(68)

ベスは老紳士の顔を仰いで、感動した。彼女はもはやローレンス氏に恐怖感を感じることなく、彼の与えてくれた好意に対して、彼女は感謝の言葉を直接言う代わりに、この老紳士の手を堅く握ったのである。ベスは喜んで、翌日にローレンス氏とローリーが外出すると、彼女はようやく客間に入ることができ、恐れを忘れ、自分を忘れ、ピアノと音楽が与えてくれた愉快さに浸るようになったのである。

内気なベスは良く知らない人と接するのを怖がっていたが、この出来事から見ると、彼女は勇敢に一步を踏み出したと考えられる。ローレンス氏の善意の下で、ベスはだんだんと人との接し方を分かるようになってきた。また、彼女も内気という欠点を克

服しようとし、勇敢に一步を踏み出し、綺麗なピアノを弾き、好きな音楽を楽しみ、あこがれるものを手に入れることができるようになったのである。

3.2.1.3 感謝の心

ベスはほとんど毎日ピアノを弾きに行くようになってから、豪邸の広い客間は音楽にあふれていた。ローレンス氏がよく書斎の窓を開け、彼女の音楽に聞き惚れていた。ローリーも廊下を見張り、使用人たちが近づかないように追い払っていた。また、楽譜台にある楽譜は、ローレンス氏が特にベスのために用意したものだった。さらに、ローレンス氏がマーチ家に行くときに、いつもベスと音楽の話をするので、ベスにとって、この老紳士は親切な存在となったことが分かる。ベスはこのような生活を楽しみ、ローレンス氏に自分の感謝の気持ちを表すことに決めた。

“Mother, I’m going to work Mr. Laurence a pair of slippers. He is so kind to me I must thank him, and I don’t know any other way. Can I do it?” asked Beth, a few weeks after that eventful call of his. (69)

老紳士にお礼として一足のスリッパを作って差し上げようとベスは考えていた。母親のマーチ夫人は彼女の提案に賛成し、感謝を表すために、これが良い方法だと言い、費用も出してあげると約束した。メグとジョーもベスに協力し、彼女たちは慎重に相談してから、スリッパの模様を選定し、材料を買い整え、作りを始めた。ベスは朝から晩まで製造に専念し、難しいところがあったら、メグやジョーに手伝ってもらった。彼女は針仕事に器用な少女で、母親と姉たちの協力もあり、スリッパが綺麗に仕上げられたのである。また、彼女はローレンス氏に簡潔な手紙を書き、ローリーの助けの下で、老紳士がまだ起きていない時に、それを書斎の机の上に置いてもらった。

しかし、ベスがお礼をしたその一日と次の午前中、贈り物を受け取ったという挨拶がこなかったのも、彼女はローレンス氏を怒らせたかもしれないと心配し始めた。そしてその日の午後、ベスは散歩に行き、家に帰ってくると、客間には家族たちの笑顔だけでなく、光沢のあるピアノも置かれ、その上に「エリザベス・マーチ嬢」 “Miss Elizabeth March” (70)宛の手紙が乗っていた。それらを見たベスは興奮しすぎて、ジョーが彼女の代わりに手紙を読み始めた。

“Miss March:

“Dear Madam-”

.....

“I have had many pairs of slippers in my life, but I never had any that suited me so well as yours,” “Heart’s-ease is my favorite flower, and these will always remind me of the gentle giver. I like to pay my debts, so I know you will allow “the old gentleman” to send you something which once belonged to the little granddaughter he lost. With hearty thanks, and best wishes, I remain,

“Your grateful friend and humble servant,

“JAMES LAURENCE.” (71)

ローレンス氏はその亡くなった孫の女の子をととても可愛がっていたようで、老紳士はその孫娘のものを全部大切にしておいたのである。彼はベスに孫娘のピアノをプレゼントとして贈ったのである。ベスはこれを誇るべき光栄と考え、とても感動した。彼女がピアノを弾いてみると、美しいメロディーが流れ、姉妹たちの顔が幸福に満ちた。ここで、ベスはローレンス氏に善意を贈り、老紳士から善意も届いたことが分かる。愛は一方的なものではなく、人は人を愛すると、人にも愛されるということが、このエピソードから読み取ることが分かる。

ジョーがベスにローレンス氏に感謝すべきだと言い、ベスはすぐに立ち上がり、ローレンス家に向けて歩いて行った。彼女は庭を横切って、玄関に入っていた。ハンナや姉妹たちはベスの奇跡のような行動を見て驚いたのである。ベスは自分に考える暇を与えず、ローレンス氏のそばに近づいた。

She did go in, right up to Mr. Laurence, who looked quite taken aback, and held out her hand, saying, with only a small quaver in her voice, “I came to thank you, sir, for-” but she didn’t finish, for he looked so friendly that she forgot her speech; and, only remembering that he had lost the little girl she loved, she put both arms round his neck, and kissed him. (72)

ベスはいつもと違い、躊躇することがなく、勇敢にローレンス家に入り、素直に老紳士に感謝の気持ちを表したのである。老紳士は喜んでいると同時に、亡き孫娘が再び帰ってきたようだと思った。ベスもその瞬間からローレンス氏を恐れなくなって、昔からの友人に対するように、老紳士の膝に座り、話をし始めた。「愛は、おそれもごちごちのプライドも吹き飛ばしてくれた」“love casts out fear, and gratitude can conquer pride.” (72)と作者が言うように、ローレンス氏からの愛と善意はベスの恐怖を退け、ベスの感謝の心もローレンス氏の心を征服したと考えられる。愛、善意、そして感謝の心は人を勇敢にさせ、性格上の欠点を克服するだけでなく、人々の心がより近付けるような環境も作り上げることもできると考える。

3.2.1.4 共感力

ローリーのイギリスの友人たちがアメリカにやってくるので、ローリーは大いに愉快に遠足をしようと考えていた。遠足先でテントを張り、ボートに乗り川下まで行き、クローケーをやり、ジプシー風の料理を作るという、愉快的な遠足会を彼は計画した。同行するのがローリーの家庭教師のジョン・ブルック（後にメグの夫となる人）、ケイト・ボーン、フレッド・ボーン（後のヨーロッパ見学の時にエイミーに求婚する人）、そしてフランク・ボーンなどである。マーチ家の姉妹たちも誘われ、ベスも含まれていた。ベスはローリーの計画を聞き、ジョーと以下のように話し合っていた。

“You’ll come, Betty?” (Jo)

“If you won’t let any of the boys talk to me.” (Beth)

“Not a boy!” (Jo)

“I like to please Laurie; and I’m not afraid of Mr. Brooke, he is so kind; but I don’t want to play, or sing, or say anything. I’ll work hard, and not trouble any one; and you’ll take care of me, Jo, so I’ll go.” (Beth)

“That’s my good girl; you do try to fight off your shyness, and I love you for it; fighting faults isn’t easy, as I know……” (Jo) (132)

ローリーとブルック氏はベスがよく知っている人なのでのため、彼女は彼らを喜ば

せてあげたい気持ちはあった。もし知らない男の子と喋ることが強制されなかったら、ベスは行くと言った。ローレンス氏とのやり取りから、ベスはある程度内気という性格上の欠点を克服でき、ここで彼女はより一層自分の欠点を克服しようと思われると考える。

ローリーはマーチ姉妹を迎え、生き生きと彼女たちをイギリスの友人たちに紹介した。メグはケイトと会うことによって喜び、ジョーはローリーと喋り、エイミーはグレースという女の子と友達になり、ベスは新しく紹介された男の子たちを観察し、その中に足が不自由の子（フランク）がいて、彼は「恐ろしい」「dreadful”(134)人ではないと彼女は考え、大人しく、弱そうに見えたので、ベスは彼に優しい気持ちを感じたのである。

一行に対して、食事の前にゲームをしようとローリーが提案した。フランク、ベス、エイミー、そしてグレースは座って見学することになり、ブルック氏はメグ、ケイト、そしてフレッドを自分のグループに選び、ローリーはサリー、ジョー、そしてネッドを自分のグループに取り組んだ。ジョーはゲーム中フレッドと激論になるところであったが、冷静に戻り、フレッド組に勝ったのである。

食事の時間になり、ブルック氏はサリー、メグと食卓の用意をして、ローリーは火をおこした。ジョーはコーヒーを用意して、ケイトは写生を始め、ベスは藺草を編んでお皿を作りながらフランクと話しをしていた。その後、一行は食事をしながら、雑談や遊びも楽しそうに行っていた。しかし、少女たちの背後に座っていたフランクは、乗馬の話を目にして、体操や運動をしている少年たちを見て、足の不自由な自分ができないことばかりなので、不機嫌になってしまった。彼は杖をそばに投げつけた。その辺りで片付けをしていたベスは顔を上げ、恥ずかしがりながらも、フランクに親切に話しかけたのである。

“I’m afraid you are tired; can I do anything for you?”

“Talk to me, please; it’s dull, sitting by myself,” answered Frank, who had evidently been used to being made much of at home.

If he had asked her to deliver a Latin oration, it would not have seemed a more impossible task to bashful Beth; but there was no place to run to, no Jo to hide behind now, and the poor boy looked so wistfully at her, that she bravely resolved to try. (147)

フランクは足が不自由で、いろんな遊びに参加することができないことが、ベスが分かった。フランクはいつも弱々しい存在だと周りの人々に見られ、彼は人に同情されるというより、健全な人のように平等に扱われるのが望ましいとベスは読み取ったと考える。目の前のフランクがいかにも気の毒に見えたので、ベスは話をして彼を慰めようと決心した。

“What do you like to talk about?” she asked, fumbling over the cards, and dropping half as she tried to tie them up.

“Well, I like to hear about cricket, and boating, and hunting,” said Frank, who had not yet learned to suit his amusements to his strength.

“My heart! Whatever shall I do! I don’t know anything about them,” thought Beth; and, forgetting the boy’s misfortune in her flurry, she said, hoping to make him talk, “I never saw any hunting, but I suppose you know all about it.” (147)

足の不自由のフランクはいまだに、自分の体に相応しない娯楽を希望していた。ベスはクリケットや狩猟について全く知らないで、慌ててついフランクの足が不自由であることを忘れ、彼に狩猟の話をさせようとしていた。フランクは狩猟に行ったことがあったが、それだけでがして、馬や狩猟犬との縁が切られてしまったと言いながら、溜息をついた。ベスは自分の失策に後悔したが、巧妙に話題を鹿と野牛の話に変えた。野牛はフランクの心を慰め満足させることができたように見え、ベスはフランクを楽しませることに熱中していた。普段は、彼女は知らない男の子と喋ることに恐怖を感じたが、今のベスは自分を忘れて話をしていたので、姉妹たちは驚くと同時に喜んでいた。

ベスは一步を踏み出し、知らない男の子と喋れるようになったのは内気を克服しようとする努力だと考える。また、彼女はフランクの心理をよく理解し、巧妙に話題を提示したり、変化したりしたことで、少年に喜んでもらえたのである。ベスはフランクに同情するというより、彼と共感したと考えられる。他人の立場から物事を考える能力を持ったベスは、優れた共感力で、人見知りという欠点を克服したうえで、新しい友達も作れたのである。

3.2.1.5 家庭の天使

ベスは学校に通わず、父親が戦場に行ってから、彼女は家で独学を始めた。食器を洗ったり、家を片付けたり、猫たちと人形の世話をしたり、まるで家庭の主婦のように見えた。姉妹たちが自分の夢について話し合っているのを聞いて、ベスは以下のように語っていた。

“Mine is to stay at home safe with father and mother, and help take care of the family,”
said Beth, contentedly. (154)

贅沢なものが沢山ある美しい家の主婦となりたがるメグ、本を著し、有名になり、お金持ちになりたがるジョー、そして世界一の有名な画家になりたがるエイミーと異なり、ベスは金銭、名誉、そして結婚などを望まず、彼女の夢はただ家において、両親のそばで暮らすことだった。また、ローレンス氏から素敵なピアノも頂き、彼女は十分に満足だった。家族や友達が安全で、健康で、みんながいつも一緒にいられれば、ベスにはそのほかに何も望みはなかった。

ところが、不幸なことがマーチ家に起きてしまう。戦場にいるマーチ氏が重大な病気にかかり、マーチ夫人は夫の世話をするために、ワシントンに駆け付けた。姉妹たちは父親のことを心配するが、家に残ることになり、父親の健康を祈っていた。メグは縫物をしながら、妹たちの世話をしていた。ジョーはローリーと喧嘩したが、その後仲直りをした。エイミーは自分の髪の毛を結び、メグから縫物などを習っていた。ベスは時計のように規則正しく毎日の役目を務めていた。父親のことを心配していて、ピアノを弾いている時に彼女も悲しくなったりした。また、姉妹たちと女中のハンナはワシントンに行ったマーチ夫人に手紙を送り、ベスの手紙は以下のものである。

“..... I read every morning, try to be good all day, and sing myself to sleep with father’s tune..... I didn’t forget to cover the holders, and I wind the clock and air the rooms every day.” (182-183)

彼女は良い娘であるように努力し、寝る前に讚美歌を歌っていた。湯沸かしに覆いをかけたり、時計を巻いたり、窓を開け新鮮な空気を入れたり、市場で買い物をしたり、小遣い帳をつけたりして、ハンナに「儉約家で信頼できる」“forehanded and dependable” (183)と評価された。母親の不在の時にも、ベスは大人しく、規則正しく生活し、母親と父親を安心させるため、ハンナと一緒に家庭を住み心地の良い場所にしてきた。家族全員がベスのことを「優しくて役に立つ」“sweet and helpful” (185)と考え、彼女は Harvey Green の指摘する「家庭の天使」になったと考えられる。

3.2.1.6 責任感

マーチ夫人がワシントンに行ってから、一週間が経った。姉妹たちは母親の不在にもかかわらず、各自が家事や勉強に励むことで自己満足し、まるで自分たちが神様のような気持ちになった。母親が不在の時に、姉妹たちは努力をしたから、少し休暇をもらっても良いはずだと考えた。

メグは毎日家庭教師の仕事に行くが、家に戻ってから、縫物に没頭し、時々彼女は母親へ手紙を書いたり、ワシントンからの手紙を読み返したりしていた。ジョーは風邪を引き、マーチ叔母に本を読む仕事を休み、屋根裏部屋と地下室を行ったり来たりし、療養として本を捜したり読んだりしていた。エイミーは家事と芸術が両立しないことを見出し、粘土細工に夢中になっていた。しかし、ベスは異なり、彼女は働き続けていた。細々なことを忠実にするほかに、姉妹たちが忘れたことまでも引き受けていた。

マーチ夫人が家から離れた十日後、隣近所に住むフンメル家を訪ねることが姉妹たちの話題になった。メグは揺り椅子に座り、疲れていて、行く気がしないまま、縫物を続けていた。ジョーは風邪を引いているので、この寒さに耐えられないのを口実として、訪ねるのを避けた。エイミーはその場にいなかった。実際に、ベスは毎日フンメル家に行っていたが、フンメル家の赤ちゃんが病気になり、彼女は心配していた。

Beth quietly put on her hood, filled her basket with odds and ends for the poor children, and went out into the chilly air with a heavy head, and a grieved look in her patient eyes. (186)

赤ちゃんことを心配しすぎて、ベスはそっと外出の準備をして、子供たちに持って行ってやる食べ物をかごに詰めて、頭痛にもかかわらず、冷たい風の中に歩き出した。ここで見られるのはベスの強い責任感だと考える。ベスは姉妹たちと異なり、努力の後でも、自分にご褒美をする代わりに、規則的、忠実にやるべきことをやっていた。少女期のメグ、ジョー、そしてエイミーはあまり責任感を持っていなかったが、ベスは持っていたと考えられる。

3.2.1.7 無私なベス

ベスは夕方に家に帰り、こそこそと母親の寝室に行き、そこに閉じ籠もった。それから 30 分後に、ジョーは母親のダンスで探しものをするときに、樟脳水を片手に持ち、赤色になった目と沈痛な顔つきで薬箱に座っているベスを発見した。フンメル家の赤ちゃんはベスに抱かれたまま死んでしまい、ベスは自分が赤ちゃんから猩紅熱をもらったのだらうと思った。しかし、この時でも、ベスが自分のことを心配するのではなく、姉妹たちのことを心配していた。

“Don’t let Amy come; she never had it, and I should hate to give it to her. Can’t you and Meg have it over again?” asked Beth, anxiously. (188)

メグとジョーは猩紅熱にかかったことがあったが、ベスは姉の二人に病気を移すことを恐れ、心配そうにジョーに尋ねた。また、妹のエイミーは猩紅熱に一度もかかっていないので、彼女を寄越さないようにと告げた。結局、メグとハンナは家庭の全体を把握することに、ジョーはベスを介護することになった。ローリーの助けの下で、エイミーはマーチ叔母の家に泊まることになった。体調不良や酷い症状にもかかわらず、ベスは自分というより、家族のことを心配し、冷静に物事を考え、最も良い決断を下したと考える。ジョーはベスをフンメル家に行かせたのを後悔しながらも、ベスの美德にも感動した。

Then it was that Jo, living in the darkened room with that suffering little sister always before her eyes, and that pathetic voice sounding in her ears, learned to see the beauty and the sweetness of Beth’s nature, to feel how deep and tender a place she filled in all hearts,

and to acknowledge the worth of Beth's unselfish ambition, to live for others, and make home happy by the exercise of those simple virtues which all may possess, and which all should love and value more than talent, wealth or beauty. (193)

ジョーはいつもベスのそばにいた。ベスは非常に我慢が強く、姉たちに迷惑をかけないように、抑えられる限りは苦痛を訴えず、それをたえ忍んでいた。彼女はボロボロになった人形をそばに置き、熱が下がらなくても、それらの哀れな人形を忘れることはなかった。猫たちとも会いたがっていながらも、病気が移ることを恐れ、持ってきてもらおうとはしなかった。また、彼女はジョーが疲れることも心配し、エイミーのもとへ愛情のあふれる伝言も送り、何度もペンを求めて、父親と母親に手紙を書こうとした。ベスは周りの人々を深く愛し、他人のために生きていた。奉仕的な心を持ち、家庭の幸福のために努力し、彼女の美德は才能や財産、そして美貌よりも尊ばれるものだと考える。しかし間もなく、ベスは意識を失ってしまい、ジョーはワシントンにいる母親に電報し、早く家に戻ってくれるようと頼んだ。

電報を受け取ったマーチ夫人はすぐに家に駆け付け、姉妹たちと一緒にベスの介護をし始めた。結局、マーチ夫人、姉妹たち、ハンナ、ローリー、ローレンス氏、医者のみならず、そして彼女自身の努力で、ベスは猩紅熱との戦いを勝った。長い回復期の眠りから目覚め、最初に見たのは母親の顔で、最初に感じたのは家中にある本当の幸福だった。無私に人を愛するベスは、家族、友達に愛されるだけでなく、神様も彼女の美德に感動され、猩紅熱から回復することができた。

3.2.1.8 死を恐れない

クリスマスがまたやってきて、体調が回復したマーチ氏も戦場から家に戻ってきた。メグは虚栄を忘れ、ローリーの家庭教師であるブルック氏と結婚し、家庭の主婦となった。エイミーはマーチ叔母の助けで、ヨーロッパ見学に出発した。ジョーはより自己を試練するために、ニューヨークで家庭教師をやり始めた。家に残り、両親のそばにいるのはベスだけだった。家事を忠実にこなし、ニコニコしているベスは誰にも愛される「家庭の天使」だった。

Beth has grown slender, pale, and more quiet than ever; the beautiful, kind eyes, are

larger, and in them lies an expression that saddens one, although it is not sad itself. It is the shadow of pain which touches the young face with such pathetic patience; but Beth seldom complains, and always speaks hopefully of “being better soon.” (264)

しかし、病気の後、彼女の体が弱くなり、バラ色の頬をした明るい少女ではなくなってしまう。以前より一層大人しくなり、美しい目はさらに大きくなったが、その目から悲しい気持ちが見える。苦しみの「陰」“shadow” (264)はベスの心に影響を与えていたが、彼女はいつも明るくしていた。

一年後の春、ニューヨークから家に戻ったジョーはベスの酷い変化に気づいた。しかし、毎日ベスを見ている家族は誰も気づいていないようだった。ベスはより痩せたり、顔色が悪くなったりしたわけではなく、彼女の表情には、不思議な透明感と悲愴な美しさが浮かんでいた。ジョーはベスの療養に役が立つと考え、貯めたお金でベスを近くの静かな海辺へ連れていた。ジョーは、ベスとの永遠の別れが間もないかもしれないと感じ、いずれベスが自分から切り出すだろうと考えていた。ジョーは、ベスが自分から離れていってしまうという残酷な事実を知り、悲しかった。一方、ベスはジョーに以下のように言う。

“I’ve known it for a good while, dear, and now I’m used to it, it isn’t hard to think of or to bear. Try to see it so, and don’t be troubled about me, because it’s best; indeed it is.”
(394)

ベスは猩紅熱から完全に回復できないということを知り、自分の先が長くないことが分かった。去年の秋に、彼女は悲しくて、生きることを諦めていたが、それを認めたくなかった。しかし今、彼女はもう慣れてしまい、それが最も良いと言い、「死」というものを恐れなくなった。ベスは命を失う準備ができ、勇敢に死を迎える態度をとっていた。彼女は全てを神様に委ねる気持ちになったが、自分を愛してくれる姉妹たちを一層愛しいと考えた。

She could not say, “I’m glad to go,” for life was very sweet to her; she could only sob out, “I’ll try to be willing,” while she held fast to Jo, as the first bitter wave of this great

sorrow broke over them together. (398)

「天国へ行くのがうれしい」までとは言えないが、「喜んで行くようにする」とベスはジョーに抱きつきながら言った。命は潮のように、来る時は来るが、行ってしまおうと、それを止めることはできないとベスは考えていた。

家に帰ると、家族はベスの余命があとわずかしかないという事実を受け入れ、残りの日々を明るく耐えていこうとしていた。ベスは一家の「お寺の聖人」“saint in its shrine” (440)のように大切にされ、最後の日々を静かに送っていた。彼女の穏やかな、思いやり深い性格に変わりはなく、家族のために、明るく振舞おうとしていた。体の衰えは逆に、ベスの精神を強めていた。現世に別れを告げ、これから天国に上っていくベスの生涯は無駄ではなく、この上もなく美しいものだと考える。ベスは目立ったことをせず、野心もなく、勝手なところはなく、無私無欲の人生を送ってきた。「死」が恐ろしいと思わなくなり、ベスは永遠に彼女を愛してくれる人たちすべてのベスであり、これからもみんなを愛し、見守っていくと言った。

“for love is the only thing that we can carry with us when we go, and it makes the end so easy.” (444)

現世と別れても、愛が消えることはなく、愛は人生の終焉を楽にしてくれるものだとベスは考えていた。春がやってきて、そして去って行った。「死」は眠りのように自然にやってくるものだ。ベスの望んでいたように、命の灯は静かに消え、夜明け前の暗いうちに、彼女は小さな溜息をつき、穏やかに目を閉じたが、命の終焉は愛の終焉ではない。ベスは人を深く愛し続けていたので、これからも人に深く愛され続けていく。愛されていることで、彼女は「死」というものを恐れなくなったと考える。愛されているからこそ、体が死んでも、ベスの精神は依然として存在すると Alcott は主張するのではないだろうか。

3.2.2 ベスの恋愛結婚観

作者の Alcott は *Little Women* の第二作を *Good Wives* という副題を付け、途中病気で

亡くなったベス以外の姉妹はみんな結婚し、良き妻となった。では、唯一結婚していないベスについて、どのような恋愛結婚観を持っていたかを本節で見たい。まず、ベスが猩紅熱になる前の描写を見たい。

姉妹たちが将来の夢について語っていた。メグは自分の家を持って、そこに贅沢なものを揃え、食べ物、綺麗な服、素敵な家具、良い雰囲気を持つ人、使い切れないお金が欲しく、自分は何もしなくて良いという生活に憧れていた。一方、ジョーはメグと異なり、馬、インク、そして小説が欲しく、作家になりたいと言った。また、エイミーはローマに行きたがり、そこで勉強をして、世界の画家になりたがっていた。彼女たちは将来の家庭、あるいは仕事の展望について語っていて、現状への不満を持っていると考える。しかし、ベスは将来の展望について以下のように言う。

“Mine is to stay at home safe with father and mother, and help take care of the family,”
said Beth, contentedly.

“Don’t you wish for anything else?” asked Laurie.

“Since I had my little piano, I am perfectly satisfied. I only wish we may all keep well,
and be together; nothing else.” (154)

ジョーやエイミーと異なり、ベスは何者にもなろうとはせず、ローレンス氏から頂いたピアノさえあれば、彼女は満足し、他の欲求は一切ないと言っていた。また、ベスはメグと異なり、豪邸やお金などを望まず、父親と母親と一緒に暮らし、家族の世話をすることが夢だった。以上の点から見ると、ベスは健康な時から家にいるのを好んでいたことが明らかに分かる。では、猩紅熱を経験したベスの様子を見てみよう。海辺の療養地で、彼女はジョーに以下のように言う。

“I don’t know how to express myself, and shouldn’t try to any one but you, because I
can’t speak out, except to my old Jo. I only mean to say, that I have a feeling that it never
was intended I should live long. I’m not like the rest of you; I never made any plans about
what I’d do when I grew up; I never thought of being married, as you all did. I couldn’t
seem to imagine myself anything but stupid little Beth, trotting about at home, of no use
anywhere but there. I never wanted to go away, and the hard part now is the leaving you all.

I'm not afraid, but it seems as if I should be homesick for you even in heaven.” (398-399)

ベスは長く生きるようにはできないと考え、将来の計画について考えたこともなかった。姉妹たちのように結婚の夢を持ったことがなく、ただ家において、父親と母親のもとで生活するのを希望していた。健康な時であっても、病気になっても、ベスは結婚しないまま死ぬことを悔やんだり、恋愛に憧れたりをしなかった。

当時、メグのように、女性が結婚して、「家庭の天使」になるのは普通だった。一方、ジョーやエイミーのように、結婚後も、個人として夢を追ったり、社会に貢献したりするのは「新しい女性」の結婚観だと考える。しかし、ベスは異なり、家に居て、家事をしたり、家族の世話をしたりするが、結婚を望まなかったのは、当時の社会通念と合わないことが分かる。ベスは家庭性を持っていたが、結婚して、母親になり、育児をしようとする母性が見られなかったことによって、彼女は非典型的「家庭の天使」になったと考える。

3.2.3 非典型的「家庭の天使」

物語の中で、マーチ夫人は以下のことを言う。

“I want my daughters to be beautiful, accomplished, and good; to be admired, loved, and respected, to have a happy youth, to be well and wisely married, and to lead useful, pleasant lives, with as little care and sorrow to try them as God sees fit to send. To be loved and chosen by a good man is the best and sweetest thing which can happen to a woman; and I sincerely hope my girls may know this beautiful experience.” (109-110)

娘たちが美しく、満足な、善良な婦人になるように、マーチ夫人は願っていた。聡明な結婚をして、善良な男性に愛され、有為な一生を送ることが、女性にとっては最も良いことだとマーチ夫人は念じていた。

ベスは優しく、人に感謝の心、共感力、責任感を持ち、無私に家族や周りの人々を愛し、長生きができないと感じてから、彼女は死を恐れなくなった。ベスは様々な美德を有し、みんなに愛され、自己に忠実で、生きようと努力していた。その姿は、Abraham H. Maslow の指摘する「自己実現者」になったと考える。

また、結婚の面からみると、メグ、ジョー、そしてエイミーは良い男性を選び、結婚をして、幸せな人生を送れたが、ベスにとって、このような男性はいなく、自らこのような男性を探そうとしなかった。自分が愛せない人と結婚するより、結婚しなかったほうが良いとベスは考えていた。愛の絆で結ばれた家庭こそが Alcott の理想であり、ベスは新しい家庭を作ろうとはしなかったが、父親、母親、そして姉妹たちに愛され、幸せな一生を送ることができたと考える。

3.3 模範的「新しい女性」エイミー

Little Women で描かれるニューイングランドでは、産業革命が始まり、社会は農業中心から、産業中心の時代に移っていたことを考慮する必要がある。男性は主要な生産力とされ、金銭を稼ぐ役割を持つ一方で、女性は家庭で働く、いわゆる「家庭の天使」というイメージがあったと長島万里世は指摘する。男性と女性の役割がはっきり区別され、有賀夏紀の研究によると、当時のニューイングランドでは、家庭の主導権を握った男性が外で働き、家庭のことは女性が取り仕切るようになっていた。

家庭内の仕事の中、特に子供の教育は女性の行うこととされていた。子供の教育を任された女性たちは、教育者になるため、ふさわしい教育を受ける必要がある。教育を受けることで、女性は逆に、妻として、母としての役割を越えた個の意識に目覚めることになり、知識を持つ女性は、自分のおかれた状況、つまり「家庭の天使」という立場に疑問を持ち始めたのである。

Little Women という作品の中、「家庭の天使」という伝統的な女性観を打ち破ったのはヒロインのジョーだけではなく、偉大な芸術家になりたいという野望を抱いている末娘のエイミーもそうであったと考えられる。本博士論文では、エイミーの性格を分析することによって、彼女の特徴、そして彼女はどのように欠点を克服してきたのかを見ていきたい。また、エイミーとローリーの結婚を、ジェンダー平等の視点から見していきたい。

3.3.1 エイミー・マーチの性格

エイミーはマーチ家の末娘として登場する。Louisa May Alcott の末の妹 Abby May Alcott をモデルとしている。背が高く、金髪、優雅な容姿、活発な性格に恵まれたエイミーは姉妹たちの中で最も社交的な存在だと考えられている。小さい頃から、彼女

は偉大な芸術家になりたいという野望を抱き、自分の才能に酔いしれる様子は、少し滑稽にも見えてしまう。では、本節で、エイミーの性格や特徴を見てみよう。

3.3.1.1 自己中心

ある日の夕方、時計は6時を報じた。ベスは暖炉の火をかきたて、母親のスリッパを暖めるためにその前に並べた。姉妹たちが母親のボロボロのスリッパを見て、各々が語り始めた。ジョーは母親に新しいのが必要だと呟き、姉妹たちも各自のもらった1ドルのお小遣いを使って、新しいスリッパを買ってあげようと叫んでいた。誰が買うということの結論が出なかったのだが、この時に、ベスはみんなが自分の物を買うのをやめにして、母親にクリスマスプレゼントをしてあげようと提案した。姉妹たちはベスの提案に同意し、何を買うのかについて考え始めた。

Every one thought soberly for a minute; then Meg announced, as if the idea was suggested by the sight of her own pretty hands, "I shall give her a nice pair of gloves."

"Army shoes, best to be had," cried Jo.

"Some handkerchiefs, all hemmed," said Beth.

"I'll get a little bottle of Cologne; she likes it, and it won't cost much, so I'll have some left to buy something for me," added Amy. (11)

姉妹たちはそれぞれ自分の欲しい物をプレゼントとして母親に贈ろうとした。メグ、ジョー、そしてベスは自分のお小遣いを使って、手袋、軍隊靴、あるいはハンカチを買うつもりだった。しかし、エイミーは姉妹たちと異なり、母親にプレゼントを贈る以外、残りのお金で、自分にもプレゼントをしたいと考えていた。ここには、エイミーの自己中心な性格が見られる。姉妹たちは母親のことしか考えていなかったが、エイミーは母親にプレゼントを買う他に、残ったお金で自分に何かを買おうという打算的な考えを持っていた。

その時、母親のマーチ夫人が家に帰ってきた。マーチ夫人はオーバーと靴を抜き、暖かいスリッパをはいて揺り椅子に腰をおろし、多忙な一日の中で最も幸せな一時を楽しもうとした。晩御飯の後、マーチ夫人は戦場にいるマーチ氏からの手紙を出し、読み始めた。非常時だったが、父親は困難にもかかわらず、家族に宛てて手紙を送つ

たことで、みんなは感動していた。手紙の中には、苦難や危険、そして望郷の念などは書かれておらず、野営、進軍などの戦況、実に愉快的希望に満ちた内容があり、最後に至って、家にいる娘たちに対する父親らしい愛情も表した。手紙の内容を聞きながら、娘たちみんなは鼻をかんだ。その中、エイミーは普段大切にしていた巻き毛がつぶれるのも構わず、マーチ夫人の肩に顔を伏せてすすり泣きだした。

“I am a selfish pig! but I’ll truly try to be better, so he mayn’t be disappointed in me by and by.” (17)

重荷は手近にあり、進むべき道は前にあり、「善良と幸福」“goodness and happiness” (18)への憧れは、困難や過失を通り抜けて平和へ導き、姉妹たちの「巡礼」“Pilgrim’s Progress” (17)がここから始まった。ここで、エイミーは「自己中心」“selfish” (17)という欠点に気づき、父親を失望させないため、彼女はこれから自己中心という性格を直す努力をすることを決心した。

クリスマスの日がやってきて、姉妹たちも各自で母親へプレゼントを用意できた。エイミーは以下のように言う。

“I only meant to change the little bottle for a big one, and I gave all my money to get it, and I’m truly trying not to be selfish any more.” (22)

彼女は美しい香水の瓶を見せて、前の安物の代わりに、お金を全部払ってしまい、大瓶と取り換えたのである。エイミーも自己中心主義をやめようと努力する様子は良い態度だと考えられる。

その後、母親が家に戻り、近隣のフンメル家の悲惨な生活について姉妹たちに語り、クリスマスの朝ご飯をフンメル家のためのクリスマスプレゼントにしようと提案した。姉妹たちは母親の提案に賛成し、朝ご飯をかごに入れ、それをフンメル家に持っていく準備をし始めた。この時のエイミーの行動を見てみよう。

“I shall take the cream and the muffins,” added Amy, heroically giving up the articles she most liked. (22)

彼女は最も好きなクリームとマフィンを食べず、フンメル家の人々を助けることにした。エイミーは自己中心主義という欠点を克服し、家族の人々のことを考えられるようになっただけでなく、周囲の人々にも関心を持ち始めた。わがままをやめ、自己犠牲の行動を行ったエイミーはフンメル家に感謝され、母親にも喜んでもらった。笑いあったり、キスが交わされたり、愛情を表したり、この最高のクリスマスは、エイミーの一生忘れられないような幸福な思い出となった。

3.3.1.2 虚栄と自惚れ

学校で塩漬けライムが流行っていて、多くの女子生徒がライムを買うので、エイミーもライムを買いたくなった。好きな友達ができるとライムをあげ、嫌いな人ができれば、その人の前でライムを食べて当てつけをする。エイミーはクラスの子たちから沢山ご馳走になっているのに、まだ一度もお返しをしていなかった。名誉にかかわるので、エイミーはクラスの子たちにご馳走しようと思った。彼女はメグからお小遣いをもらい、ライムを沢山買い、翌日にライムを学校に持って行ったのである。

Next day Amy was rather late at school; but could not resist the temptation of displaying, with pardonable pride, a moist brown paper parcel, before she consigned it to the inmost recesses of her desk. During the next few minutes the rumor that Amy March had got twenty-four delicious limes (she ate one on the way), and was going to treat, circulated through her "set," and the attentions of her friends became quite overwhelming. (74)

その湿った茶色の包みを机の奥へしまう前に、エイミーは得意になり、みんなに見せびらかさずにはいられなかった。それから、エイミー・マーチは二十四個のライムを買ってきたという情報が仲間の中に広まり、クラスの子たちが彼女に気を遣うようになってきた。ここで、エイミーの虚栄心が見られると考える。その後、エイミーもその虚栄心のせいで、悲惨な代価を払うことになってしまったのである。

ジェニー・スノウという意地悪の子がいて、エイミーを卑劣に野次っていたこともあった。今、エイミーが沢山のライムを持っていると知ったジェニーは矛を収め、苦

手の算数の答えを教えてやるとエイミーに申し出たが、エイミーに断られた。

その日、ある名士が学校を参観にきて、エイミーの描いた地図は名士に褒められた。エイミーはさらに得意になり、それを見たジェニーはさらに憎しみを感じて、復讐しようとし、担任のデヴィス先生に、エイミー・マーチが塩漬けライムを机の中に隠していることを告げた。

一週間前から、デヴィス先生はライムを禁制品であると宣言し、その禁を破った人はみんなの前で鞭打つと言っていた。その日、エイミーが告発されたのは不運なことであった。デヴィス先生はライム全部を窓の外に捨てるようにと命令し、エイミーは絶望的な気分になったが、それに服従しなければならなかった。

エイミーが最後のライムを捨てて戻ってくると、デヴィス先生が「手を出しなさい！」と重々しい態度で言い出した。エイミーは怯えてしまい、許しを請うように先生の顔を見上げたが、短気な先生は彼女の嘆願を無視し、再び「手を出しなさい！」と怒鳴っていた。それを聞いて、エイミーは手を出した。自尊心の強い彼女は歯を食いしばって、頭を上げて、少しも怯むことなく、手に幾度も打ち下される鞭を無言で耐えていた。また、デヴィス先生が休み時間がくるまで、教壇の上に立つようにエイミーに命令した。その日に受けた屈辱は、彼女にとって、人生の中で最も深刻だった。

That was dreadful; it would have been bad enough to go to her seat and see the pitying faces of her friends, or the satisfied ones of her few enemies; but to face the whole school, with that shame fresh upon her, seemed impossible, and for a second she felt as if she could only drop down where she stood, and break her heart with crying. A bitter sense of wrong, and the thought of Jenny Snow, helped her to bear it; (77)

自尊心の強い少女であるエイミーは、その日に一生忘れることのできない屈辱と苦悩を味わった。生まれてから、彼女はこのような体罰を受けたことは一度もなかった。休み時間がくると、彼女は悄然として家に帰り、それから家族と抗議集会を開いた。

マーチ夫人はエイミーを現在の学校から退学させ、他の学校に転校させようと思った。また、マーチ夫人は体罰を振るう教育方針にも反対な立場を表明した。そ

れを聞いたエイミーは嬉しく、学校の生徒みんなが退学して、その学校が潰れてしまえば良いと言い出し、ライムのことを考えると、彼女はまた気がおかしくなりそうだった。しかし、母親は以下のようにエイミーの観点を反論した。

“I am not sorry you lost them, for you break the rules, and deserved some punishment for disobedience,” was the severe reply, which rather disappointed the young lady, who expected nothing but sympathy.

“Do you mean you are glad I was disgraced before the whole school?” cried Amy.

“I should not have chosen that way of mending a fault,” replied her mother; (78)

マーチ夫人は、エイミーの過ちを改めさせるのに、デヴィス先生のような体罰は良くないと語った。また、エイミーが余りの虚栄心と自惚れを持っていると指摘した。エイミーは沢山の特技や天分を持っているが、それを全部人にひけらかす必要はないとマーチ夫人が言い、虚栄心と自惚れはすべての才能を台無しにしまうので、自分が才能を持っていて、それを善用しているという自覚で満足するべきだとエイミーに助言した。そして、すべての才能の中で、謙遜は最も魅力的だと母親は説いた。

エイミーは母親の話聞き、自分の過ちと欠点に気づくようになってきた。教養は態度や言葉に自然と現れ、感じられるものだから、人々に見せびらかしたり、得意になったりする必要がないということを、エイミーは理解できるようになり、それらの欠点を改めようと彼女は決心した。

3.3.1.3 報復心

メグとジョーはローリーに誘われ、劇場へ『七つの城』を見に行くつもりだった。エイミーも行きたいと思い、哀れっぽく嘆願したが、ジョーに固く断られた。エイミーはジョーの語調と態度に憤慨してしまい、泣き出した。ローリーの声が聞こえたメグとジョーは階段を駆け下り、泣いているエイミーを見たのだが、何もせず放置してしまった。二人が玄関を出る時に、エイミーは手すりから身を乗り出して、脅迫するように、こう言った。

“You’ll be sorry for this, Jo March! See if you ain’t.” (81)

メグとジョーは劇場で楽しい時間を過ごし、家に戻ってきた。エイミーは読書していたが、姉たちが部屋に入ってくると、彼女はできるだけ怒っているように見せ、本から目を上げず、一言の質問もしなかった。しかし、ジョーはエイミーが自分を許し、恨みを忘れてくれたと思い込んだ。

翌日になり、ジョーは自分が努力して作成した小説の原稿を探そうとして、それが消えたのを発見し、メグ、ベス、そしてエイミーに「誰が私の原稿を持ち出した？」と尋ねた。メグとベスは驚き、直ぐに「いいえ！」と答えたが、エイミーは暖炉の火をつついて黙っていた。何度も聞いたが、ジョーは怒鳴りながら、エイミーを少し小突き回した。

“Scold as much as you like, you’ll never get your silly old story again,” cried Amy, getting excited in her turn.

“Why not?” (Jo)

“I burnt it up.” (Amy)

.....

“Yes, I did! I told you I’d make you pay for being so cross yesterday, and I have, so-”
(Amy) (83)

エイミーはローリーに誘われることがなかったが、姉たちに一緒に劇場に行きたいと要求した。その要求がジョーに断られ、エイミーは報復として、ジョーの原稿を焼いたのであった。ジョーの原稿は母親の誇りであり、家族の人々に将来有望な文学才能の芽生えと見なされていた。また、この原稿はジョーが全身を打ち込んで、根気よく書き続けてきたものであった。エイミーはジョーの数年間の努力を灰にしてしまい、それは他人にはわずかの損失に見えるかもしれないが、ジョーにとっては取り返しのつかない辛いことであった。この出来事から見ると、エイミーは自身の誤りを反省せず、報復心を持つ少女だと言える。後に、彼女は自分の報復心に悲惨な代価を払うようになったのである。

この時に、エイミーは自分のやったことを後悔し、自分のやったことに対して許しを得るまで、誰にも可愛がってもらえないと痛感していた。お茶のベルが鳴り、彼女

は勇気を奮って、ジョーに謝りに行ったが、ジョーに無視された。自分のほうから和解を申し込んで拒絶されたエイミーは自尊心が傷つけられたと感じ、一層気分を害した。

ジョーは気分転換をしようと思い、ローリーとスケートに出かけていた。メグはエイミーに、二人に着いていき、ジョーの機嫌が良くなってきたら、キスをしたらどうかとアドバイスした。エイミーはそのアドバイスを受け入れることにした。

急激な寒気がくる前に、温暖な日が続いたので、凍った川はいつ割れてもおかしくない状態だった。ローリーはジョーに川の真中は危険だと注意したが、後ろにいたエイミーは聞こえず、川の中央のほうに向かって滑って行った。しかし、川の真中の氷がもろくなっており、直ぐ割れてしまった。エイミーが両手を差し上げると同時に水の飛沫が上がり、叫びながら身が沈んでいった。ローリーとジョーは異常を察し、すぐにエイミーを助けに行った。

震えながら、ローリーとジョーはびしょびしょになって泣いているエイミーを家まで連れて帰った。騒ぎの後、エイミーは毛布にくるまれ、暖炉の横で眠ってしまった。ジョーはこの出来事で、自分の態度を反省した。彼女はエイミーの上に身を屈めて、枕に乱れ散っている濡れた髪の毛を撫でながら、後悔の気持ちを呟いていた。寝ていたエイミーはまるでジョーの言葉を聞いたように、目を開いて、微笑みながら、姉に手を差し伸べた。二人とも一言も言わなかったが、互いに堅く相抱いて、心を込めたキスをし、すべてを許し、すべての不快を忘れることにした。

エイミーは報復のため、ジョーの原稿を焼いてしまい、後に後悔した。ジョーと仲直りをしようとし、彼女はジョーの後を追って、凍った川でスケートをする時に悲惨な事故に遭った。エイミーは命を落とすところだったが、ローリーとジョーの努力によって救われた。ジョーと仲直りをして、彼女は報復心が良くないものだとして強く認識したと考えられる。

3.3.1.4 エイミーの成長

ベスはフンメル家の赤ちゃんから猩紅熱をもらったので、エイミーはマーチ叔母の家に泊まることとなった。マーチ叔母は人を甘やかさない人で、エイミーは茶碗を洗わせられ、匙、土瓶、そして鏡をピカピカに磨かされ、部屋の掃除も任された。次にポリー（マーチ叔母の飼う鳥）に餌をやり、犬の毛を櫛で整えさせられた。マーチ叔母

は足が不自由で、椅子から離れることができなかつたので、エイミーは何度も物を取りに行ったりして階段を上がったたり下ったりしなければならなかつた。肉体労働が終わっても、勉強や宿題をやらなければならなかつた。ローリーは毎日訪ねてきて、エイミーは彼と一時間ほど遊んだ。昼食の後、彼女はマーチ叔母に本を読んだり、縫物をしたりしていた。

She (Amy) felt her exile deeply, and, for the first time in her life, realized how much she was beloved and petted at home. (200)

一日が終わって、彼女は一人になると、悲しい身の上を思い、泣こうと思ったが、涙をこぼさないうちに疲れて眠ってしまった。このような辛い日々は、エイミーの持ち合わせている美德の試練となった。

マーチ叔母の豪邸に、エスターというフランス人の女中がいた。マーチ叔母と長年一緒に暮らしているのだが、マーチ叔母はエスターの介護がなかったら生きていけない。エスターの本名はエステルであるが、マーチ叔母が名を変えろと命じたので、その代わりに、信仰を変えることは要求しないという条件の下にエスターと改名した。

エスターはエイミーを気に入って、エイミーを誘って家の中を案内し、マーチ叔母の大箆箆やその中にしまい込んでおいた珍しい物や美しい物を見せてくれた。マーチ叔母がなくなったら、これらのジュエリーは遺言状によって、マーチ姉妹の方に行くのである。エイミーはその中の一つのトルコ玉の指輪を早くもらえるように希望した。そして姉のベスの回復を期待しながら、良い娘になろうと決心した。エスターはエイミーにベスのためにお祈りを勧め、エイミーは祈り始めたのである。

The little girl was very sincere in all this, for, being left alone outside the safe home-nest, she felt the need of some kind hand to hold by so sorely, that she instinctively turned to the strong and tender Friend, whose fatherly love most closely surrounds His little children. (204)

彼女は自分を理解し、指導してくれる母親の助けがないことを寂しく思ったが、神様から教えられているため、彼女は熱心に神への道を捜し、疑うことなく進んでいっ

た。また、エイミーは「若い巡礼者」“young pilgrim” (204)なので、背負っている荷物を非常に重く感じていた。彼女は自己を忘れ、快活にして正しい行いをして満足していこうと試みた。その最初の努力は、もし自分がマーチ叔母のように自分も病気になり、死んだ場合は、自分の所有品を公平に分配するように遺言状を作ることを決めた。彼女は遊びの時間に、エステルから法律上のある文句を教えてもらい、重要書類をできるだけ上手く書いたのである。エステルは第一証人として、エイミーの遺言状に署名した。また、ローリーが遊びに来るときに、エイミーは彼を第二証人にし、署名をしてもらった。

しかし、ローリーはバスが重態になったということをエイミーに言ってしまった。ローリーが帰ると、エイミーは自分の祈りの場所に行き、優しいバスを失ったら、幾ら価値のあるトルコ玉の指輪があっても慰められないと考えながら、黄昏の光の中に座り、涙を流し、痛む心でバスのために祈った。

家族の愛と自身の努力で、バスは猩紅熱から回復した。落ち着いた母親はエイミーと会うためにマーチ叔母の豪邸に行った。その前、マーチ叔母はエイミーの優れた言動に感動して、ご褒美として、そのトルコ玉の指輪を彼女に贈与した。彼女はこの指輪をこれから嵌めて良いかを母親に尋ねた。しかし、母親は、エイミーが子供だから、このような豪華な飾りを身に着けるのは早すぎると思った。そして、エイミーは自分の理由を母親に述べ始めた。

“I’ve thought a great deal lately about ‘my bundle of naughties,’ and being selfish is the largest one in it; so I’m going to try hard to cure it, if I can. Beth isn’t selfish, and that’s the reason every one loves her, and feels so bad at the thoughts of losing her. People wouldn’t feel half so bad about me if I was sick, and I don’t deserve to have them; but I’d like to be loved and missed by a great many friends, so I’m going to try and be like Beth all I can. I’m apt to forget my resolutions; but, if I had something always about me to remind me, I guess I should do better. May I try this way?” (210)

彼女は自分の悪徳について反省し、自己中心主義が最も大きな欠点であることに気づいた。彼女は自己中心主義でないバスのように、みんなに愛され、惜しまれたいと考えていた。トルコ玉の指輪を嵌めることによって、エイミーは虚栄心を持たないよ

う、そして自己中心的にならないように自戒した。

ベスの猩紅熱のおかげで、エイミーは自己反省の能力を身につけたと考える。姉を失うことや死への認識によって、エイミーは過去に自分が行った行為について深刻に反省した。虚栄心、自惚れ、そして報復心など、すべては自己中心的な自分の気質に由来したと彼女は気づいた。エイミーはこれから自分の欠点を改めようとし、良い娘になろうと決心した。この点から見ると、エイミーは自分の根本的な欠点を認識したので、著しい成長を遂げたと考えても良いと考えられる。

3.3.1.5 芸術性

クリスマス日に父親のマーチ氏が戦場から帰ってきた。長女のメグはローリーの家庭教師であるジョン・ブルックと恋に陥り、後に結婚した。末娘のエイミーも子供から綺麗な少女になってきた。

野心に燃えた若者たちには、「才能」と「天才」を分別することは難しい。エイミーもその例にもれず、情熱の趣くままに次から次へと様々な芸術に取り組んでいた。最初は「泥饅頭」“mud-pie” (270)を作り、その後彼女は「ペン画」“pen-and-ink drawing” (270)に打ち込んだ。しかし、目を使いすぎていたため、彼女はそれをやめ、「焼き絵」“poker-sketching” (270)に挑戦したが、「火」でやけどをした後は、「油」を使う「油絵」“painting” (270)を描き出した。その後、エイミーは「木炭画」“charcoal portraits” (271)や「クレヨン画」“crayon sketches” (271)を試したが、結局彼女の興味は「粘土と石膏」“clay and plaster” (271)に戻ったのである。ある時、モデルが誰も居なくなり、エイミーは仕方なく自分の足を型にして、石膏に入れた。しかし、石膏が早く固まってしまったので、足が抜けなくなった。ジョーはエイミーを救出しようとし、ナイフを深く石膏に突き刺し、エイミーの足を傷つけてしまった。その事件がきっかけで、彼女は粘土と石膏を使う芸術の試みをやめてしまった。それから、エイミーの情熱は少し冷めてきたが、自然の「スケッチ」“sketching”に夢中になった。川や野原や森に出かけ、草原に座り、彼女は自然をスケッチすることで何度も風邪を引いた。川で真夏の光を浴び、綺麗な肌を日焼けしても、エイミーはスケッチをし続けた。

If “genius is eternal patience,” as Michael Angelo affirms, Amy certainly had some

claim to the divine attribute, for she persevered in spite of all obstacles, failures, and discouragements, firmly believing that in time she should do something worthy to be called “high art” (272)

伝統的な「家庭の天使」的女性と異なり、エイミーは芸術家になりたいという夢を抱いていた。さらに、その夢を実現するために、彼女は絶え間ない努力をしてきた。「家庭の天使」や「良妻賢母」(Good Wife Wise Mother)が主流の時代であっても、彼女は様々な新しいものを見る目を持ち、それらにチャレンジした。様々なチャレンジをして、エイミーは芸術の才能を示した。沢山の失敗をしても、挫折しても、姉妹たちに嘲笑されても、エイミーは自分の才能を疑うことがなく、困難にもかかわらず、芸術家になりたいという夢を追い続けた。また、偉大な芸術家になれなくとも、魅力的で立派な女性といわれるようになりたいとエイミーは考えていた。

エイミーは当時の主流の思想に影響されず、自分の夢を堅く守ろうとした。また、彼女は芸術性を持ち、様々なものを試み、精神的に独立している少女となり、「家庭の天使」とかなり異なる性格を持つに至ったと考える。

3.3.1.6 上流社会への渴望

虚栄、自惚れの他に、エイミーはもう一つの弱点を持っていた、それは「上流社会」に入りたいということである。彼女は「上流社会」をよく知らなかったが、漠然と憧れていた。お金、地位、流行、そして優雅なマナーを素敵なものだと思い、そのようなものを持っている人々と付き合うのを好んだ。

“My lady,” as her friends called her, sincerely desired to be a genuine lady, and was so, at heart, but had yet to learn that money cannot buy refinement of nature, that rank does not always confer nobility, and that true breeding makes itself felt in spite of external drawbacks. (272)

たとえ今は貧しくとも、自分はいつかレディーにふさわしい地位に就くと彼女は考えていた。

エイミーが通っている絵のクラスは来週で終わりになる。クラスの人々がみんなお

金持ちなのに、貧しいエイミーにとっても良くしてくれたので、夏休みになる前に、彼女は上流社会の人の物真似をしたく、クラスの人々を家へ招待したいと母親に言っていた。川へ行き、景色を見たり、絵の話をしたりして、みんなと楽しく過ごしたいとエイミーは思っていた。クラスは12人がいるが、全員がくるとは思わないから、ケーキやサンドイッチなどを準備すれば、大きめの馬車を一台借りれば良いとエイミーは考えていた。母親のマーチ夫人は娘の計画に反対するが、経験こそが最大の教師だと分かっていたので、この際、何も言わずに、エイミーの言う通りやらせようと心を決めた。

次の月曜日をその日と決めた。エイミーは招待状を書き、クラスの人々に出した。月曜日の天気が悪かったら、火曜日に変更する予定だった。ところが、月曜日は朝から雨が降ったり日が出たりして、みんなはイライラしていた。食事、馬車などの用意もでき、家族全員はお客様を迎える準備も整えたが、午前11時に雨が降り出し、約束の12時になっても、お客様の誰も現れなかった。午後2時まで待っても、お客様は来なかった。家族のみんなは明日までももたないものを食べることにした。

次の日の朝は晴れだったので、エイミーは元気づいた。苦勞をして、食事の準備ができた。きたのは一人のお客様しかいなかった。エイミーは平然として、この約束を守ってくれたお嬢さんを、家に招き入れた。家族のみんなも、この劇的な成り行きに顔色を変えず、心からのもてなしをしたので、そのお客様は、マーチ家の人々はとても親切な人々だと感心した。夕方、エイミーはお客様を馬車で送って帰ってきた。彼女は疲れていたため、家族のみんなは気の毒なエイミーをこれ以上刺激しないように、黙って、残りのものを夕食にした。

イベントが失敗して、エイミーは涙をこぼし、家族のみんなに感謝を表しながら、あとの一カ月は、このイベントのことに触れないように願った。エイミーはこの出来事によって、優雅さや教養は金銭で買うことができないことと、地位と高貴さは同じではないことを勉強したと考える。

3.3.1.7 礼儀正しいエイミー

エイミーはジョーのためにベスのクレヨン画を描いてあげたので、ジョーはお返しとして、エイミーと一緒に六軒の御宅を訪問すると約束した。しかし、ジョーは暑い七月の昼間に外を歩きまわり、御洒落して、近所を訪問するのが大嫌いだったが、エ

エイミーとの約束があるので、ジョーはしぶしぶ帽子をかぶり、手袋を嵌め、適当な服装を着、エイミーに支度ができたと告げた。

エイミーはジョーの衣装を見て、溜息をついた。彼女もこのような訪問に行きたくないが、社会的な義理を果たしておかなくてはならないとジョーに説いた。その後、エイミーは自分とジョーを綺麗にして、一緒に近所訪問に出かけた。

一軒目はお上品なチェスター家である。その家に着く前に、エイミーはジョーに「穏やかに、冷静に、行儀よくしていてね」“‘Calm, cool and quiet!’” (308) と注意した。しかし、チェスター家についてから、ジョーはエイミーの話を文字通りにやっつてしまい、体を強張らせ、雪のように冷ややかで、面白味のない人間になってしまった。それを見たエイミーは自分の指導が失敗したと思い、ジョーを責めた。

二軒目は社交界の名士が溢れるラム家で、エイミーはジョーに「ラム家で皆さんと楽しくおしゃべりしてね」“Try to be sociable at the Lambs;” (309) と言った。しかし、ジョーは代わって陰気にふるまい、さらに数人に囲まれ、エイミーが恥をかいた話をいろいろ聞かせて、彼らのいたずら心を満足させた。

ラム家から出て、エイミーはジョーを激しく非難した。三軒目の家に入り、エイミーは「ご勝手にどうぞ」“Just as you plead; I wash my hands of you,” (312) とジョーに言った。三軒目の家では、男の子や若者が何人もいたので、ジョーは喜んでいて、エイミーの方も、ローリーの友達であるチューダーと出会い、愉快的会話を楽しんでいたが、ジョーはチューダーのことが好きではないため、彼を避けていた。帰る時間になり、エイミーはジョーをさがした。ジョーは芝生に座り、男の子たちに囲まれていた。犬が汚い足でジョーのスカートを踏んでいて、一人の小さな男の子は、エイミーの好きな日傘（ジョーに貸した）で水槽の中にいる亀を突いていた。そのようなジョーを見たエイミーはがっかりした。

四軒目と五軒目は留守だった。姉妹二人は話をしながら、最後に訪問する予定のあるマーチ叔母の家へやってきた。そこにキャロル叔母もいた。

Jo was not in a good humor and the perverse fit returned; but Amy, who had virtuously done her duty, kept her temper, and pleased everybody, was in a most angelic frame of mind. (316)

ジョーは訪問そのものが嫌いなので、二人の叔母の前で押し黙っていた。一方、エイミーは最高の笑顔で、二人の叔母に挨拶をし、忽ち叔母たちの心をとらえてしまった。

また、話はチェスター夫人のチャリティーパーティーに移り、姉妹二人はキャロル叔母に、そのイベントの手伝いをするかどうかと聞かれた。エイミーは手伝いに行くと答えたが、ジョーは行かないと答えた。

“I’m not,” put in Jo, decidedly; “I hate to be patronized, and the Chesters think it’s a great favor to allow us to help with their highly connected fair. I wonder you consented, Amy- they only want you to work.”

“I am willing to work, -it’s for the Freedmen as well as the Chesters, and I think it very kind of them to let me share the labor and the fun. Patronage don’t trouble me when it is well meant.” (316)

チェスター家のチャリティーパーティーを手伝うのは恩着せがましい顔をされることだとジョーが思い、人から恩恵を施されるのが嫌いだと彼女は言っていた。しかし、エイミーはそう思わず、チャリティーパーティーはチェスター家のため、そして解放された奴隷たちのために行われるイベントなので、手伝いすることに、彼女はありがたいと思っていた。マーチ叔母はエイミーの話聞き、エイミーの言葉は素晴らしいと思い、心の中で、エイミーをヨーロッパ旅行に連れていくのを決めた。

この時、ジョーが、運命の振り子がエイミーのほうへふれようとしているのを知らなかった。もしそれを知っていたら、彼女も態度を変えて、天使のように優しく振舞っただろう。しかし、叔母たちの胸の内を知る能力は、ジョーには備わっていなかった。彼女は自分の発言によって、これから数年間の楽しみを失ってしまった。一方、エイミーの礼儀が正しく、彼女は優れた言葉や行動で、ヨーロッパ旅行に行く機会を捕まえることができた。

蒙曼の理論によると、人間は「凡人」、「強人」、そして「超人」に分けることができる。「凡人」とは、機会が目の前にあっても、それを捕まえることのできない人間である。それより上にある「強人」とは、機会が目の前にあって、それを捕まえることのできる人間を指す。さらに、「超人」というのは、機会がなくても、自分で機会

をつくり、目標を達成していく人間である。ジョーは不適切な言葉や行動で、良いチャンスを手放してしまった。一方、エイミーはマーチ叔母とキャロル叔母から与えてくれたヨーロッパ見学の機会を、自分の優れた教養で捕まえることができ、蒙曼の指摘する「強人」であると言える。

3.3.1.8 自己主張

エイミーは絵の才能が有り、趣味も良かったので、チェスター家のチャリティーパーティーで、美術品の売り場の担当を任された。チェスター家の娘メイは、エイミーが自分より人気があるので、やきもちをやいた。娘の気持ちを優先するチェスター夫人は、エイミーを美術品売り場から隅っこにある花の売り場に移動した。メイはまたエイミーに「あなたの作品はここではなく、隅っこにある自分の売り場に持って行っていいのよ」*“You can put your own things on your own table, if you prefer,”* (320) と言い、エイミーは感情を傷つけられたが、「ええ、喜んでそうさせていただきます」*“Oh, certainly, if they are in your way;”* (320) と愛想良く答え、直ぐに自分の作品をかき集め、エプロンに入れ、立ち去った。

エイミーは家に帰って、家族にその話をすると、みんなは憤慨した。母親はエイミーに同情し、ベスはイベントに行かないと宣言し、ジョーは作品を引き上げてくればよかったのと言った。しかし、エイミーは落ち着き、

“Because they are mean is no reason why I should be. I hate such things; and though I think I’ve a right to be hurt, I don’t intend to show it.” (321)

チェスター夫人とメイは嫌な人だからと言って、彼女自身まで同じようにすることはないとエイミーは考えていた。ここで、彼女は他人の意見をすべて取り入れることなく、自分の力で物事の対処を考え、エイミーの自己を強く保つ力、あるいは自分の主張を貫く態度が見られる。

翌日、エイミーは自分の言った言葉を実行しようと決心した。売り場を整えていた時、彼女は一冊の本に目を止めた。本には聖書の文句が書かれてある。

“Thou shalt love thy neighbor as thyself.” (322)

「自らのごとく、隣人を愛せよ」とエイミーはつぶやいた。その時、売り場にいるメイが、エイミーが作品を引き上げたので、並べるものが足りなくなったことに気づき、がっかりした。そこで、エイミーは大抵の人ができないのだが、聖書の教えにあることを実行に移した。がっかりしたメイを見て、エイミーは自分の大切な作品を、微笑みながら機嫌良く、メイの売り場に戻してやった。犠牲を払った時には、少なくとも感謝されたいと思うのが人情だが、誰かがエイミーの行動を「どうせ自分の売り場では売れないからじゃない」*“she knew she wouldn’t sell them at her own table.”* (323) と酷く評判した。エイミーは、それをしなければよかったと後悔したが、そのせいでかえってやる気になり、彼女の芸術的センスのおかげで、花の売り場は綺麗な場所に生まれ変わった。

夕方、エイミーは家に戻ってきた。顔色が悪かったので、家族のみんなは彼女に同情した。その時、ジョーが仕返しに何かしようとしているのがわかり、エイミーは慌てて、ジョーに大人しくするよう願った。

“Don’t do anything rude, pray, Jo; I won’t have any fuss made, so let it all pass, and behave yourself,” begged Amy, (324)

前回のジョーの原稿を焼いたのと異なり、この時、エイミーはチェスター夫人とメイに報復心は全く持たず、イベントに自分の最善を尽くそうとしか考えていなかった。エイミーは「善」*“kindness”* (322) の意味が分かり、聖書に書かれることに従い、自分を愛するだけでなく、他人も愛するように努力していた。

ジョーはエイミーの話聞き、微笑んだ。彼女は揉め事をするつもりはなく、ローリーや彼の友だちがチャリティーパーティーに行くので、彼女もいっしょに楽しもうと考えていた。ローリーも自家の庭から最も綺麗な花をエイミーに届けさせ、エイミーの売り場は華やかになった。

マーチ一家は揃ってパーティー現場にやってきて、ローリーと友だちは花束を買ひしめ、売り場の周りに集まり、雰囲気盛り上げてくれた。エイミーは嬉しく、にこやかに振舞っていた。そこで、彼女はローリーと彼の友だちに以下の言葉を言った。

“Now, gentlemen, I want you to go and do your duty by the other tables as generously as you have by mine- especially the Art-table,” she said, ordering out “Teddy (Laurie)’s Own,” as the girls called the college friends. (326)

彼女の売り場と同じように、メイの芸術品売り場も、にぎやかで楽しいところにしてあげようとエイミーが言った。ここに、エイミーの自立の精神と自己主張が反映されたと考える。彼女は「善」“kindness” (322) で、敵に優しくすることで、逆に彼女たちに勝ることとなり、結局チェスター夫人とメイのほうが自己を恥じるようになった。エイミーは他人の力に頼らず、自分の力で困難を乗り越えた。また、「善」“kindness” (322) という美德はエイミーの精神を浄化し、彼女は憤慨や報復をせず、チェスター夫人とメイを許し、優しくしてあげたのである。エイミーは精神面で進歩を遂げたと言える。

キャロル叔母もやってきて、エイミーのことを聞いた。キャロル叔母はそばにいたマーチ叔母に何かを囁くと、マーチ叔母の顔が満足そうに輝き、エイミーを頼もしそうに眺めた。こうして、チャリティーパーティーは大成功に終わった。

一週間後、キャロル叔母から手紙が来た。キャロル叔母は来月、ヨーロッパ旅行に行くつもりで、ジョーの代わりに、エイミーを連れていくと手紙に書いてあった。ジョーはがっかりしたが、家族と一緒にエイミーにお祝いをした。エイミーは自分の美德が報われたと感じ、この嬉しい知らせを落ち着いて受け止め、さっそく絵具やペン、パスポートなどを用意し始めた。

“It isn’t a mere pleasure trip to me, girls,” she said impressively, as she scraped her best palette. “It will decide my career; for if I have any genius, I shall find it out in Rome, and will do something to prove it.” (328)

このヨーロッパ旅行はエイミーにとっては、ただの観光旅行ではなく、将来の進路を決めるきっかけだと信じ、もし絵の才能があれば、ローマでそれが分かるだろうと彼女は考えた。もし芸術家になれなくても、彼女は芸術家になりたい人を援助しようと決心した。これで、エイミーは虚栄かつ自惚れで、報復心を持った女の子から、自立かつ自己主張の精神を持つ少女と変貌したことが分かる。

出発の日がやってきて、家族や親友と離れることでエイミーは涙が枯れるまで泣いた。しかし、大西洋が前にあり、夢や理想への憧れを持つエイミーは船に乗り、ヨーロッパに向かった。

3.3.1.9 自己認識

アイルランドの岸を眺め、昔の遺跡などが見え、後にエイミー一行はイギリスに着いた。リバプールで数時間を過ごし、ロンドンに行った。ロンドン郊外の景色は牧歌的で、エイミーは夢見心地だった。リージェント通りで買い物をし、ハイド・パークやウェストミンスター寺院などを見学した。そこで、エイミーはローリーのイギリス人の友だちのフレッド・ボーンとフランク・ボーン兄弟と出会った。彼女はボーン兄弟と博物館や美術館を参観し、ボーン兄弟もエイミーにとっても親切だった。その後、エイミー一行はパリに行き、そこでルーブル美術館やパレ・ロワイヤルで芸術品を鑑賞した。途中、エイミーはフレッドと仲良くなり、お互いの良い旅行パートナーとなった。フランスの旅が終わり、エイミーはドイツ、スイス、イタリアなどの国に向かった。

一方、家にいるジョーは自己鍛錬のために、ニューヨークに出発し、そこで家庭教師の仕事をやりを始めた。次の年の六月になって、ジョーは実家に帰った。ローリーもその年に大学を卒業して、家に帰ってきたジョーに求婚したが、ジョーにかたく断られた。失恋したローリーを見たローレンス氏は、孫の鬱状態を心配して、孫の心を癒すために、孫を連れてヨーロッパに旅立った。

ヨーロッパを回り続けたエイミーはフランスのニースで、失恋でがっかりしたローリーと出会った。ローリーはエイミーの優雅さに好ましさを感じるが、エイミーはこの鬱状態のローリーに失望を感じていた。それでも、ローリーの親切をありがたいと思っていたので、ローリーを喜ばせようとしていた。二人は様々な場所を見てきて、楽しい時間を過ごしていた。ある日、二人は美しい景色を楽しみながら、以下の会話をしていた。

“She’s (Jo) very busy; I’m roving about so, it’s impossible to be regular, you know.

When do you begin your great work of art, Raphaella?” he asked, changing the subject abruptly after another pause, in which he had been wondering if Amy knew his secret, and

wanted to talk about it.

“Rome took all the vanity out of me, for after seeing the wonders there, I felt too insignificant to live, and gave up all my foolish hopes in despair.”

“Why should you, with so much energy and talent?”

“That’s just why, because talent isn’t genius, and no amount of energy can make it so. I want to be great, or nothing. I won’t be a common-place dauber, so I don’t intend to try any more.”

“And what are you going to do with yourself now, if I may ask?”

“Polish up my other talents, and be an ornament to society, if I get the chance.” (431)

ローリーは、エイミーが自分の秘密（ジョーに振られて失恋したこと）を知っていて、それについてもっと話したがっているのではないかと思い、ほかの話題に変えた。彼はエイミーの描画や芸術性について話し始めた。しかし、エイミーは芸術家になりたいという夢を諦めたと言った。ローマを見て、彼女の虚栄心は完全に消えた。才能と天才の違いを知り、エイミーが「芸術の天才」ではないと自己を認識したと言うのだ。偉大な芸術家にはなれないが、ほかの才能を磨いて、機会があれば、社会に貢献したいと彼女はローリーに表明した。

エイミーは芸術家になりたいけれども、自分がどれだけの能力を持っているかを認識することができた。夢を実現するために、自分の社交性と優雅さを示すことでマーチ叔母とキャロル叔母の納得を得て、ヨーロッパ旅行の機会を授かったが、ローマを訪問した時に、エイミーは自分に芸術の才能はあるものの、天才とは言えないと自覚した。このように、エイミーは盲目に夢や野望を持つのではなく、自分の能力をはっきり認識したのである。「芸術の天才」ではないと認める勇気があることは、希にしかない特長だと考えられる。さらに、エイミーは芸術のみに没頭するのではなく、ほかの才能を磨く決心を示し、機会があれば、社会に貢献したい気持ちも表明した。彼女は自分の将来へ責任感を持っているだけでなく、当時は主に男性の持つ社会的責任感も持っていたことが分かる。この点から見ると、エイミーは自己を知り、自己を認識し、将来についても計画を持っていたことで、「家庭の天使」からかなり離れた人物になったと考える。

3.3.2 エイミーの恋愛結婚観

前節で、物語の描写に基づいて、Alcottはエイミー・マーチを「家庭の天使」から離れた「新しい女性」として創造したのを見てきた。では、エイミーの恋愛結婚観についてはどのようなものだったのかについて、この節で見ていきたい。フレッド・ボーンはエイミーがヨーロッパ旅行の時のパートナーであり、エイミーに求婚したが、断られてしまった。一方、ローリーは後にエイミーと結婚し、幸せな家庭を組むことができた。二人の男性人物を見ながら、エイミーの結婚観を見ていきたい。

3.3.2.1 フレッド

フレッドの初登場は物語の第一作第12章においてであり、彼はローリーのイギリスからの友だちで、マーチ姉妹、そしてローリーと一緒にキャンプに行った。

Fred Vaughn, the riotous twin, did his best to upset both, by paddling about in a wherry, like a disturbed waterbug.” (134)

テントやランチの支度はすべてキャンプ地に送られていたので、一行はそこへ向かおうとした。キャンプの参加者たちは二艘のボートに分乗し、川に漕ぎ出した。しかし、フレッドはいたずらが好きな少年で、彼は小舟を一人で漕ぎまわり、慌てて騒ぐ水虫のように騒いで、二艘のボートをひっくり返そうとした。

キャンプ地に着いて、一行はクロッカーをやり始めた。フレッドはジョーと別のチームとなり、数回の小競り合いを起こす。フレッドは球を打つのではなく、押して球が門を通過したことで、危うく喧嘩になるところであった。

このように、フレッドは騒々しく、いたずら好きで、そしてインチキをやる少年だったということが分かる。少年のフレッドは人々にあまり良いイメージを与えることができなかった。しかし、青年になると、彼は紳士に変貌する。物語の第二作に、フレッドは再び登場し、エイミーの旅行の仲間となり、彼女に好意も表明した。では、エイミーのフレッドへの評価を見てみよう。

“Fred is very entertaining, and is altogether the most agreeable young man I ever knew, -except Laurie, -whose manners are more charming.” (336)

フレッドはエイミーの仲間で、二人は一緒に沢山の楽しい時間を過ごした。エイミーの知っている若い人の中では、フレッドはローリー以外の最も素敵な人だと彼女は考えていた。また、「彼は裕福で、礼儀の正しいジェントルマンだ」*“He is rich, a gentleman, and has delightful manners,”* (432)というエイミーの言葉から見ると、フレッドは愉快的な性格を持つようになり、マナーの良い青年で、彼のことを肯定的にエイミーは考えていた。

“but I’ve made up my mind, and, if Fred asks me, I shall accept him, though I’m not madly in love. I like him, and we get on comfortably together. He is handsome, young, clever enough, and very rich, -ever so much richer than the Laurences.” (338)

最初、エイミーは心を以上の引用のように決めた。もしフレッドに求婚されたら、彼女は同意するつもりだった。燃えるように愛しているわけではないが、フレッドはハンサムで若くて、知性もあり、お金持ちなので、彼と結婚すれば、エイミーが望んでいるものがすべて手に入ると彼女は述べていた。マーチ家は貧困だったので、エイミーは貧困が嫌いで、四人姉妹のうち、誰かひとりはお金持ちと結婚しなくてはならないと彼女は思っていた。彼女はそうして、家族のみんなを楽にしたいという気持ちがあった。しかし、フレッドに求婚された時、エイミーは彼を断ったのである。

Fred Vaughn had returned, and put the question to which she had once decided to answer “Yes, thank you”; but now she said, “No, thank you,” kindly but steadily; for she found that something more than money and position was needed to satisfy the new longing that filled her heart so full of tender hopes and fears. (451)

フレッドのような教養が高く、ハンサムで、お金持ちの若い男性は当時の女性にとって、理想的な結婚相手かもしれない。エイミーも彼と結婚しようと思ったが、求婚されたら、口から出たのは「いいえ」という答えだった。お金と地位より、エイミーはもっと大切な何かを自分が求めている気がした。それはエイミー自身の「心」と

「愛」だと考えられる。心の意志に反して、愛していない相手と結婚することはできないのは、女性としての主体性のある行動だと考えられる。社会伝統に妥協せず、ふさわしい結婚相手を見つける際にも、お金や地位のために結婚しないと思うエイミーは、伝統的な女性像と大変異なっていると考える。愛の絆でしっかりと結ばれた家庭こそはエイミー、そして作者の Alcott の理想ではないだろうか。

3.3.2.2 ローリー

フレッドの求婚を断ったエイミーは、後にローリーと結婚することになった。では、ローリーはどのような人だったかを見てみよう。まず、彼の容貌について、以下の描写がある。

Along this walk, on Christmas day, a tall young man walked slowly, with his hands behind him, and a somewhat absent expression of countenance. He looked like an Italian, was dressed like an Englishman, and had the independent air of an American—a combination which caused sundry pairs of feminine eyes to look approvingly after him, and sundry dandies in black velvet suits, with rose-colored neckties, buff gloves, and orange flowers in their button-holes, to shrug their shoulders, and then envy him his inches. (401)

以上の引用は第二作第 14 章からのものである。青年になったローリーは背が高く、両手を後ろで組み、ぼんやりとした表情をしていた。一見イタリア人のようだが、服装はイギリス人風で、自由な雰囲気はアメリカ人的だった。彼には少女たちが憧れる男性の多くの特徴があり、良い教育を受け、優れた教養を持つ青年だと考えられる。また、物語の最初で述べられたように、ローリーの祖父であるローレンス氏は財産家であるので、彼は豊かな物的条件を持っていたことも分かる。このようなローリーは、フランスのニースで、エイミーと出会ったのである。さらに、優れる容貌以外に、ローリーは音楽家になる夢も持っていた。

“Laurie comes naturally by his love of music, for he is like his mother, and I dare say his grandfather fears that he may want to be a musician;” (Mrs. March) (64)

マーチ夫人の言葉によると、ローレンス氏の息子（つまりローリーの父親）が、音楽家のイタリア女性と結婚した。素敵な女性だったが、ローレンス氏は気にいらなかった。ローリーが幼い時に親の二人とも亡くなってしまったので、ローレンス氏がローリーを引き取った。ローリーは母親の血をうけ、音楽に情熱的で、音楽家になりたいという夢を抱いていた。夢だけを抱くのではなく、彼は音楽の才能も持っていた。以下は第一作第5章での、ローリーとジョーの会話の場面である。

“Do you play?” she (Jo) asked, turning to Laurie with a respectful expression.

“Sometimes,” he answered, modestly.

“Please do now; I want to hear it, so I can tell Beth.”

“Won’t you first?”

“Don’t know how; too stupid to learn, but I love music dearly.”

So Laurie played, and Jo listened, with her nose luxuriously buried in heliotrope and tea roses. Her respect and regard for the “Laurance boy” increased very much, for he played remarkably well, and didn’t put on any airs. (63)

ローリーは見事にピアノを演奏したことで、彼は音楽の才能を持っていたことが分かる。また、彼は自分の才能を人々に見せびらかさなかった。ピアノがうまく弾けたが、彼は驕ることがなく、謙虚な態度を取った。当時のエイミーは幼かったが、彼女はローリーと同じように、芸術に情熱的で、これは二人の共通点だと考えられる。後に大人になったエイミーは、ローリーの才能と、「謙虚さ」という美德に惹かれていくだろうと考える。「謙虚さ」以外に、ローリーは他の美德も有した。第二作の最後の章に、マーチ家全員がパーティーをする場面で（エイミーもその場にいた）、ジョーはローリーを以下のように評価した。

“And I’ve succeeded beyond my hopes; for here you are, a steady, sensible, business man, doing lots of good with your money, and laying up the blessings of the poor, instead of dollars. But you aren’t merely a business man, -you love good and beautiful things, enjoy them yourself, and let others go halves, as you always did in the old time.” (509-

510)

大人になったローリーは音楽家になれなかったが、祖父の事業を継承し、実業家になった。しかし、彼はただの実業家でなく、良いもの、美しいものを愛し、楽しみ、それらをほかの人にも分けてくれる人になり、つまり慈善家となったのである。中国語には「贈人玫瑰，手留余香」という諺があり、バラを人に送った後も、自分の手に香りが残るように、人の力になったことによって、自分の心も温かくなるという意味で、ローリーは人を助け、本当の慈善家と言える。

エイミーは容貌や金銭より、人の内面性に目を向け、ローリーを愛し、彼と結婚することになった。容貌や金銭は重要であるけれども、それよりも重要なものがあり、それは男性の持つ人間性だと考える。

3.3.2.3 エイミーの結婚

ヨーロッパ旅行の途中、エイミーはアメリカの故郷から、ベスの体調が非常に悪いという手紙を受け取らず、次の手紙を受け取った時には、ベスがもう亡くなってしまったことを知る。エイミーはこの悲しい知らせを、スイスのヴェヴェイで受け取った。彼女の心は重く、毎日レマン湖を眺めていた。その時、ローリーがやってきた。エイミーはローリー以外に自分を慰めてくれる人はいないと思い、ローリーは、エイミーこそは、ジョーがいた場所を埋めて自分を幸せにしてくれる人だと確信した。

He consoled himself for the seeming disloyalty by the thought that Jo's sister was almost the same as Jo's self, and the conviction that it would have been impossible to love any other woman but Amy so soon and so well. (456)

ローリーは失恋の痛手乗り越え、エイミーとの新しい恋で、自分が幸せになれると信じていた。ジョーの妹であるエイミーは、ジョーと同じような者だとローリーは考えた。結婚の申し込みは、シンプルなものにしようとしてローリーは思い、エイミーに愛していると言葉に出す必要はないと彼は考えていた。二人は湖でボートを漕ぎながら、婚約することになった。

ここで、ローリーはエイミーをジョーの代替物として扱い、まるでエイミーは独立

した人格を持たず、ただのジョーの代わりに、自分を幸せにしてくれる人のように考えた。ローリーはエイミーを「物質化」してしまったと考えられる。しかし、エイミーはベスの死で、心が悲しみに満たされ、ローリーの慰めが必要だったので、「物質化」されたことに気づかなかったと考えられる。

3.3.2.4 結婚後

エイミーはローリーと結婚し、故郷に戻り、娘のベス（亡くなった姉のベスを記念するために、娘にベスと名付けた）を出産した。*Little Women* の第二作の終わりに、エイミーは以下のように語っていた。

“My castle is very different from what I planned, but I would not alter it, though, like Jo, I don't relinquish all my artistic hopes, or confine myself to helping others fulfill their dreams of beauty. I've begun to model a figure of baby, and Laurie says it is the best thing I've ever done. I think so myself, and mean to do it in marble, so that whatever happens, I may at least keep the image of my little angel.” (515)

ここで、エイミーは「芸術の夢は捨てないわ」と言った。結婚後も、エイミーは個人として、夢を追い続けると決心した。ローリーは芸術の夢を持つ人々を助けるが、エイミーも同じことをしていた点から見ると、この二人の男女は、平等な関係にあると言える。また、娘のベスも体が弱く、それはエイミーの最大の悲しみだった。しかし、彼女は大理石を使って塑像を作ることで、娘のベスの健康を祈っていた。エイミーは芸術家になれなかったが、芸術を諦めず、それを趣味にして、結婚生活を彩っていた。

3.3.3 模範的「新しい女性」

エイミーは虚栄、利己的、自惚れになりやすい少女から、善意を持ち、人々に愛される女性に成長した。夢を抱き、それを実現するためにいろんな努力をしてきた。ヨーロッパ旅行で、彼女は自分が芸術の天才ではないと気づき、自己認識をしたうえで、ほかの才能を磨き、社会に貢献したいという気持ちになった。このように成長していったエイミーの中に、本博士論文は「新しい女性」像を読み取りたい。

ローリーと結婚後も、エイミーは個として、本当の自己に執着していた。芸術を趣味としてやり続けるだけでなく、夫のローリーと同じように、社会的責任感を持ち、芸術の夢を抱く若者を助けていた。この夫婦二人は、男女平等の関係にあると言える。

本博士論文では、エイミー・マーチを通して、作者の Alcott が考える模範的「新しい女性」を見てきた。Alcott はエイミーを通して、伝統的なステレオタイプ、すなわち「家庭の天使」を破り、模範的「新しい女性」像を示した。家庭、仕事、そして夢などをよく調整し、男女におけるステレオタイプに陥らず、生活や将来について熟考し、共に自由に生きることのできる社会は、Alcott の理想的な社会なのだ、と結論付けることができる。

第四章 張愛玲と『半生縁』

4.1 人間性の弱み ——張愛玲の人生——

4.1.1 張愛玲略伝

張愛玲は張志沂と黄素瓊の長女として、1920年に上海で生まれた。彼女の祖父は清朝末期の大臣張佩綸で、祖母は清朝末期の洋務運動の指導者の一人の李鴻章の娘李菊耦だった。生まれた時に、彼女は張煥という名が付けられた。1922年、2歳の張煥は親と一緒に天津に移住した。3歳の時に、彼女は私塾に通い始めた。1924年から、父親はしばしば売春婦を家に連れて帰り、アヘンにもひどく依存するようになったので、母親がそれに不満を抱き、夫婦はよく争うようになり、やがて母親はフランスに旅に出た。1927年、父親がアヘンや売春婦との不倫をやめると約束した後、母親は家に戻り、その後再び上海に定住することになった。しかし、彼女の両親は結局1930年に離婚してしまい、張煥と弟の張子静は父親に扶養されるようになった。同年、彼女の名前が張煥から張愛玲と変えられた。

1931年に、張愛玲は上海にあった米国聖公会の聖マリア女学校に進学、1932年に処女作となる短編小説『不幸的她』が校内の刊行物に発表され、それが彼女の文学的才能の芽生えだと考えられる。1938年、18歳の張愛玲は赤痢にかかったが、治療を受けることがなく、父親に殴られ、半年間寝室に監禁させられた。やがて彼女は家から逃走し、母親と同居するようになった。1939年、19歳の張愛玲は香港大学文学部に進学し、その後ロンドン大学への留学の機会があったが、戦争のため学業を中断せざるを得ず、1941年に彼女は上海に戻り、文学創作に没頭した。

1943年、「沈香屑 第一炉香」、「傾城之恋」、などの代表作が発表された。同年に汪精衛の傀儡政権のメンバー胡蘭成と知り合い、1944年に結婚。しかし、結婚の3年後、二人は離婚した。1952年、張愛玲は再び香港に移住し、そこのアメリカ新聞局で翻訳の仕事をしてしながら、『秧歌』『赤地之恋』などの小説を創作し始めた。これらの作品は、当時の中国の思想と相容しないものだと考えられ、激しく批判を受けたと言われる。1955年、アメリカに移り住み、翌年に劇作家のフェルディナント・ライヤーと知り合い結婚し、1960年にアメリカ市民権を獲得した。その後、彼女は中国に帰国すること

はなかった。1967年、夫のライヤーが死去した。1973年に、張愛玲はロサンゼルスに移住し、1995年9月8日、ロサンゼルスで亡くなった。享年74歳だった。

4.1.2 張愛玲作品紹介

中国の文学界において、張愛玲の小説は、1952年以来禁書と扱われていた。張愛玲自身も悪言や攻撃を受け、「文化漢奸」（文化売国奴）と見なされた。しかし、彼女と彼女の小説は、改革開放後によりやく見直されるようになった。本節では、張愛玲の物語を見ながら、作品の特色を見出し、彼女は何故「文化漢奸」と見なされ、その後また見直されたかを見てみることにしたい。

4.1.2.1 《传奇》 『伝奇』

太平洋戦争が勃発したため、張愛玲は香港での学業が中止となってしまい、上海に戻った。経済的な必要もあって、映画や劇の批評、中国人の風俗文化紹介などを書き、雑誌に投稿したりしていた。その一連の作品を単行本としてまとめたのが『伝奇』である。この作品集には、非現実的な不思議な出来事の記録もあり、男女関係を中心にした物語も多数含まれている。張愛玲はこの作品集を《传奇》『伝奇』と命名し、見事に固有の作品世界を確立させた。この作品集は、1940年代前半の日本占領下の上海に、奇跡のように艶やかに開花し、多くの読者を魅了した。では、この作品集に収録されている主な物語を簡単に紹介していきたい。

まず《传奇》『伝奇』の中に《沉香屑—第一炉香》「沈香屑——第一炉香」(1943)という短編があり、舞台は香港となっている。上海の戦火を避けるために、葛薇龍は両親と共に香港へ避難した。戦争が終わり、両親が上海に戻ったが、葛薇龍は学業を続けるために、父親の妹である伯母の梁夫人のところに身を寄せる。梁夫人は昔、富豪の妾になろうとし、それは儒教的家父長制が娘に課した「孝」という掟を破ることになるので、家庭不和を起こした。当時の梁夫人は、薇龍の父親をはじめ、それに猛烈に反対した実家の親戚と決裂した。今の梁夫人は香港に大きな屋敷をかまえ、様々な男たちと浮名を流し、淫らな生活を送っている。年下の美男子の気を惹くために、若くて美しい姪は梁夫人の餌食になった。薇龍は梁夫人の下心に気づき、最終的に梁夫人の思う通りに振舞わせられてしまう。やがて、薇龍は自分のことを愛していない喬琪喬というプレイボーイに恋をしてしまう。梁夫人の計らいで、薇龍は喬琪喬と結婚

することができたが、喬琪喬の望む生活を維持するために、薇龍は売春婦になっていく。

この物語では、梁夫人という「強い存在」と葛薇龍という「弱い存在」が描かれている。裕福な物質条件を有するが、梁夫人は精神的に淋しいということが明らかになった。彼女は様々な男たちと遊び、淫らな生活を送るだけでなく、姪の薇龍を利用して、年下の美男子をさがすことにした。昔の梁夫人は金銭のために家族と決裂し、現在の梁夫人は心を満たすために血縁関係を持つ姪を操り、彼女の道徳性が欠落したと考えられる。一方、世間事の経験の浅い薇龍は心身ともに梁夫人の権威を認めながら、自分の愛する男のために、梁夫人と喬琪喬が作った罠に落ち、傀儡のように生きていくしかないのである。

次の短編は《沉香屑—第二炉香》「沈香屑——第二炉香」(1943)である。香港が舞台となるこの物語は、外枠と内枠があり、二重構造となっている。外枠の語り手の「私」が、図書館でアイルランド人のクレメンティという女の子から入れ子構造（内枠）の物語を聞いている。その物語は、40歳になるイギリス人の大学教授ロジャー・アンバーソンが、21歳の若い女子スージーに恋をし、婚約するというものである。スージーの姉は一度結婚していたが、暴虐な性格を持つ夫の仕打ちに耐えられなくなってしまい、結局離婚した。離婚した姉は母親と妹のスージーと一緒に暮らしている。ロジャーとスージーが結婚式を行い、その日の夜、花嫁を抱こうとしたロジャーにスージーは驚き、家から逃げ出す。この事件はロジャーの職場と香港のイギリス人社会まで知れ渡り、彼は変質者として見られてしまい、結局彼は自宅でガス自殺を計る。

一見この物語は謎のように見えるが、実はスージーと姉は母親から性教育を全く受けなかった。ようやく結婚式をすませたロジャーとスージーは、初夜を迎えることになるが、性教育を受けたことのないスージーは、ロジャーの行為に恐れ、その晩にロジャーの働く大学の学生宿舎へと逃げ込むことになる。ここで初めて、スージーの姉の結婚が失敗したのが、相手の男性の異常な性欲にあるのではなく、女のほうの性教育の欠如にあったのだと理解する。しかし時はすでに遅く、周囲の環境に圧迫され始めたロジャーは、自殺という道を歩むしかない。

《传奇》『伝奇』に収められている短編の《傾城之恋》「傾城の恋」(1943)は、張愛玲が果敢に小説創作に取り組んだ時期の代表作だと考えられる。伝統的な中国が没落していく時代の旧家の出戻りの娘とイギリスから帰ってきた華僑のプレイボーイが、

上海と香港を舞台にして、恋の駆け引きをし、1941年の香港の戦いで、香港が陥落したことをきっかけに、夫婦となる話である。

主人公の白流蘇は離婚して、上海の実家に戻ってきたが、兄弟やその妻たちにいびられ、身の置き所がない思いをしている。ある日、妹のお見合いに付きそうことになる流蘇は、見合い相手の範柳原という裕福なプレイボーイのお気に入りになってしまう。流蘇は嫌な思いをしながら実家で暮らすことに耐えられないのなら、残された道は再婚しかないと思っている。そして彼女は安定した生活のために範柳原の愛人となり、香港に行く。しかし範柳原が出張のため、香港から出航した。船が港から離れたあとすぐに太平洋戦争が始まる。この戦いによって香港は崩壊する。二人はとりあえず互いにとって必要な人間として認め合い、結婚を決める。

世界を震撼させる突然の戦争で、香港が陥落する。香港の陥落、つまり「傾城」が、主人公たちを目の前の苦境から救い出すが、流蘇と柳原は互いに利用しつつ利用される関係だと考えられる。流蘇が離婚して、実家に居場所がないと感じると同じように、西方教育の下で育てられた柳原が中国で、東西文化の衝突を感じ、身の置き所がないと思っている。二人の結婚は一見幸せな結末になったが、張愛玲は傍観者としての語り手により、白流蘇と範柳原は愛情より、自分の利益をより重視することを明らかにした。

《传奇》『伝奇』に収められている《心経》「心経」(1943)という短編は、娘の許小寒の行動軌跡に沿って、彼女の父親への欲望、求める男性像への幻滅などを語る作品である。許小寒は十二、三歳の時から、父親の許峰儀の愛情を独占しようとし、母親を遠ざけようとする。申し分のない家庭環境にあり、天真爛漫に見えた主人公の小寒は父親に対して、道ならぬ感情を抱いている。父親も小寒に惹きつけられるが、小寒が二十歳となる時点で娘の肉体に対して自分の欲望を感じ、近親相姦に落ちる危機感を抱くようになる。それで、彼は小寒と顔の似ている娘の学友を愛人とする。小寒は父親の心を失い、母親の意志で彼女は家から追放されてしまう。

小寒の家は完璧だと周囲の人々に賛美されるが、母親の許夫人は年をとるにつれ、娘に夫の愛を奪われ、人生の暗黒を味わうこととなる。夫を絶対的な支配者だと認識している許夫人は、夫と自分の上下関係を承認し、初めから抵抗することを諦め、家の所属品に過ぎないことを自覚している。許氏と娘の小寒の関係は近親相姦というタブーを破っていないので、父親は父権制が許容する限界を超えない限り、その支配力

を失うことはない。もし許峰儀が近親相姦というタブーを破っても、許夫人はやはり許氏に反抗することができないであろう。家庭が崩壊してしまうと、母親としての許夫人も逃れる道がなく、彼女は夫に頼って生存するために、娘を犠牲にするしかないと考える。

《金鎖記》「金鎖記」(1943) は張愛玲が 23 歳の時に書かれた物語で、『伝奇』に収められている。貧しい兄夫婦と一緒に暮らしている町娘の曹七巧は、売られるような形で、名門の姜家の次男に嫁ぐ。夫の体は病弱で、ほぼ廃人状態である。七巧は姜家で看護婦と血統を継ぐ役割を果たすことになる。彼女は悪意のある噂や中傷に満ちた大家族の蔑みの中で孤独に闘い、その間、彼女は恋愛を味わうために、義弟（夫の弟）と不倫をする。夫の死後に、彼女は二人の子供と暮らせるだけの財産を取得する。そこで七巧はアヘンを吸い、自分の息子の結婚を妨害し、娘を圧迫し、自らも踏み間違えた人生を憎みながら死んでいく。

この物語では、夫の姜氏は最初から最後まで顔を出さない。彼は生まれつき骨結核症にかかり、終年寝たきり生活を送っている。不自由な体は、夫と父親という身分の存在感を薄めることの象徴だと考えられる。姜氏が亡くなった後、苦難を十分に体験してきた七巧は夫への怨恨を自分の息子と娘に転嫁する。彼女自身はアヘンを吸うが、子供たちへの支配を絶対的なものにするため、彼らにもアヘンを吸うことを勧める。張愛玲は母親を悪魔のように描いてきた。母親は父権社会の残酷な思想を継承し、子供たちを支配する権利を利用し、様々な方法で、子供たちの肉体と精神を虐待する。これは女性である母親による父権社会への復讐を別の形で行ったと考えられる。

《紅玫瑰与白玫瑰》「赤いバラと白いバラ」(1944) は張愛玲の中編小説で、『伝奇』に収められている。イギリス留学から、「玫瑰」(バラ) という名の中国とイギリスの混血娘との初恋を振り切って帰国した振保は、寄宿先の友人の海外出張中に、その妻の嬌蕊と深い仲になる。南洋生まれで、嬌蕊は紅バラのように情熱的で、夫と離婚までするが、振保は彼女を捨てる。そして彼は母親に勧められ、白バラのような清純な娘煙鵬と結婚するが、やがて、振保は煙鵬との生活に飽きて放蕩の限りを尽くす。忍耐の限界を超えた妻の煙鵬は周囲からの同情を盾に居直る。ある夜、振保はヒステリーを起こしたが、意外にも翌日から善人に戻るという話である。

主人公の振保は、勝手かつ平凡な男に過ぎない。情熱的な女性に惹かれても、愛のために将来を捨てられず、清楚な女性と結婚しても、愛し続けることができない。こ

の物語では、二人の性格の異なる女性が振保の生活に巻き込まれる。二人の女性の性格の変化を通して、張愛玲は家父長制の悪影響やそれに支配される女性たちの運命を描き出した。小説では、嬌蕊と煙鸞の悲劇が、家父長制の社会によって引き起こされると考えられる。嬌蕊は新しい女性の思想を持ち、愛していない夫と勇敢に離婚し、愛する人と結婚しようとするが、彼女の行動は伝統的な価値観と反するので、当時の社会に認められない。一方、煙鸞は伝統的な女性であり、男性の付属品としても構わない姿をとっているが、結局夫の振保に嫌われることになってしまう。伝統的な中国文化では、家父長制が主要な位置を占めていた。男性は常に自分の価値観に従う、理想的な女性を求めようとする。女性もこの一連の束縛の下で、無意識的に男性の付属品になってしまう。新しい思想を持つ女性がいても、社会に認められず、孤独な存在になってしまうのである。

4.1.2.2 《色戒》 「色、戒」

この作品は1943年に創作され、後に小説集『惘然記』に収められている。物語背景は日本占領下の上海である。汪精衛の南京政府（日本の傀儡政権）の特務を務める易氏の家では、易夫人の仲間の夫人たちが寄り集まり、彼女たちはいつも通り暇つぶしの麻雀を打っている。その中に、香港から来た担ぎ屋の王佳芝という女性は易夫人のお気に入りになる。やがて、王佳芝は易氏の愛人となる。

ある日、帰宅した易氏が、他の人が分からないように王佳芝に合図を送り、今から外で会おうと誘いかける。しかし、佳芝の本当の姿は愛国の学生で、広州の大学に通っていたが、戦火を避けるために、彼女は演劇部の仲間と共に香港に来た。佳芝は演劇部の仲間たちと謀って売国奴たちを倒そうとし、その売国奴の代表人物は易氏である。一人の男子大学生はブローカーに成り済まし、佳芝はその妻という触込みで、易夫人と易氏に接近する。やがて易氏は汪精衛と話し合いが付き、上海に行く。佳芝は易夫人のお気に入りになっているので、易夫人に誘われ、易家に身を寄せる。

易氏を暗殺する計画が実現する日となり、佳芝は興奮し、易氏をインド人が経営する宝飾店に誘い込む。口実にしたピアスの修理を頼んだ後、易氏は佳芝に高価なダイヤモンドの指輪を買ったりする。佳芝は外で待ち構えている仲間の動きと時間を考えながら、緊張し続けている。しかし突然、佳芝の心の中に、易氏が本当に自分を愛していることへの認識が突如沸き起こり、「早く逃げて」と易氏に囁いてしまう。その言葉を聞いて

た易氏は、自分の身に迫った危険と佳芝の正体を悟り、商店から飛び出していく。

危険から脱した易氏はすぐに電話して、その付近を封鎖させ、容疑者を逮捕して、その日の夜に全員を銃殺させる。一方、易氏の後から出た王佳芝もまもなく逮捕され、彼女もこの銃殺された中に入っていることが暗示される。

「色、戒」は、汪政府の特務が愛国青年に手引きされて暗殺されかかるところだが、危険から脱し、かえって彼女を死に至らしめる話である。張愛玲の作品では、主人公の女性が男性を逃したことにしているが、売国奴の易氏に対して哀れや愛情を感じさせる展開となっている。女主人公の愛国の動機が不明で、性や愛に微妙に揺れ動く佳芝の心理に対し、愛国青年らしくないという不満が批評家から表明されている。そして多くの文学者たちは張愛玲が売国奴を批判しているのか、賛美しているのか判断に苦しみ、彼女の作品は反道徳的だと批判する。また、張愛玲は胡蘭成（汪政府の要員、やがて張愛玲と結婚する人物で、次の節で詳しく説明する）との関係で、「文化漢奸」と見なされ、1950年代後、彼女の作品も禁書として扱われるようになった。

しかし、批判されても、そうしたステレオタイプに馴染まないのが張愛玲の文学の本質だと考えられる。彼女は自分の作品を通して、自身の生き方を示し、それが人間である限り、どのような身分や立場を持とうと、様々な心理を持ち行動するものだということを表現している。悪人だから悪いことしか考えないというわけではないと彼女は考える。彼女自身は胡蘭成との関係について、自分が悪人で悪いことをしているという意識はなかったと考えられる。人間と人生は「悪」と「善」を越え、より複雑なもので、張愛玲は文学を通して自らの生き方を提示しながら、このことを主張していると考えられる。

4.1.2.3 《小团圆》 『小团圆』

この物語は張愛玲がアメリカに行ってから21年後の1976年に完成させた作品である。元の夫の胡蘭成と張愛玲自身が男女主人公のモデルとなり、この小説は彼女の自伝小説だと考えられる。張愛玲はこの作品を通して、モデルとなった胡蘭成に対する憎みを表したと考える。

主人公の盛九莉は1930年代から1940年代初めにかけて、香港のある大学に留学した。上海や中国の都市など様々な土地から来た学生たちは、出身や性格や生活スタイルが異なり、それぞれの人間関係、人間像が描かれる。やがて日本軍による香港の襲

撃があったため、九莉は上海に帰り、文筆でお金を稼ぐ生活を送る。その後、あることをきっかけに、彼女は汪精衛の南京政府にいた邵之雍という13歳年上で、妻がいる男性と知り合い、仲を深めていく。邵之雍は日本敗戦後、売国奴として追われ、浙江省に潜伏するが、以前と変わらず、彼はいろんな女性と関わりを持つ。九莉は様々な挫折を経験し、邵之雍と別れようと決意する。

この物語はまさに張愛玲の人生であり、九莉は張愛玲、邵之雍は胡蘭成という風に、現実世界で、小説に登場する人物のモデルは特定できる。この自伝小説では、張愛玲の人生、そして彼女の結婚観が見られると考える。

4.1.2.4 《半生缘》 『半生縁』

抗日戦争後の主な作品としては、1948年頃、張愛玲が梁京というペンネームで『亦報』に連載した「十八春」がある。「十八春」は1960年代後半に、「半生縁」として台湾の雑誌に連載され、単行本化もされたが、結末の部分がかなり書き直されている。中国の再版も、《十八春》『十八春』と《半生缘》『半生縁』のように二通りがある。

まず《十八春》『十八春』から見ていきたい。主人公の顧曼楨は普通の家庭の生まれで、父親が亡くなった後、家族を養う重荷は姉の顧曼璐が背負うことになる。曼璐は中学校をやめ、タクシーダンサーとして何年間も働いたが、年齢や容貌の変化と共に、彼女はやがて売春婦となってしまう。一方、次女の曼楨はこのような複雑な環境で育てられたが、彼女は優しく、自立的な女性に成長する。彼女は正当な職業を得て、職場で中流家庭出身の青年沈世鈞と出会い、恋に落ちる。

姉の曼璐は生計のために、商人の祝鴻才と結婚する（正式な結婚ではない事実婚）。しかし、曼璐は売春婦としての生涯で、何回も流産したことがあるから、子供が産めなくなる。子供が欲しい曼璐は夫と一緒に、妹の曼楨を騙して、自宅まで呼び出した。その後、純粋な曼楨は祝鴻才に暴行され、約一年間監禁される。曼楨は後に自分の妊娠に気づく。生産の時、彼女は難産のために入院するも、看護の間隙を縫って逃げ出す。自由になった曼楨は沈世鈞の結婚を知ってショックを受け、身を隠し、働きながら生きている。その後、姉の曼璐が病死し、祝鴻才との息子も猩紅熱で倒れたことを知った曼楨は、母親としての責任を取り、祝鴻才と結婚したが、後に離婚する。中華人民共和国成立後、18年ぶりに世鈞と再会した曼楨は柔弱な女性から強い女性に変わり、世鈞と一緒に東北の建設を支援するために向う。

中国現代文学史上、1949年から1966年までの17年間は「十七年文学」と呼ばれ、この時期は文学作品に、中国共産党を賛美するもの、戦争や昔の苦難を思い出すもの、そして資本主義と戦うものなどの政治意識が求められていた。張愛玲は新中国の共産主義に相応しい結末を書くために、主人公たちが中華人民共和国の建設に行くことにしたのであろう。

しかし、張愛玲はこのような「革命的な」結末に満足せず、1966年、アメリカに亡命した彼女はこの結末を書き直した。主人公の曼楨と世鈞が再会するまでの時間を18年から14年に短縮した。「赤い色の中国」は二人の悲恋に似合わないと思った張愛玲は、以前愛し合ったが、過去を取り戻すことが不可能だと思う二人は、結局別れるように書き改め、小説のタイトルも《十八春》『十八春』から《半生緣》『半生緣』に変えた。張愛玲の作品では、利己的な無情な女性が多いが、『半生緣』において、張愛玲は従来の複雑な人間性の設定をやめ、顧曼楨のような「新しい女性」かつ「理想的な女性」を創造したと考えられる。

4.1.2.5 《小艾》 「小艾」

1951年11月、張愛玲は《亦報》『亦報』に《小艾》「小艾」を連載し始めた。小艾は自分の姓さえも覚えぬうちに田舎から都会に売られ、租界に住む金持ちの家の下女として働く。未成年の小艾は主人の五夫人に虐待されるだけでなく、15歳の時、偶々家に帰ってきた五夫人の夫席氏に暴行され、妊娠した。後に、彼女は席氏の妾に殴られ、流産した。その後、小艾の体調はなかなか回復せず、大人になった小艾は愛する人と結婚したが、昔流産したため、子供ができなくなってしまう。そこで、彼女は夫と血縁関係のない女の子を養子にし、愛情をこめて育てる。戦争のため夫婦は離れ離れになったが、中華人民共和国が成立した後、小艾は夫と再会する。しかし、流産後、良い治療を受けることができず、小艾は重い病気にかかり、体が日々衰弱していく。物語の結末では、小艾は夫によって病院に運ばれる場面が描かれている。

他の作品に登場する女性人物と異なり、張愛玲は小艾を「理想的な女性」に創造した。子供時代の小艾は単純で素朴な女の子であり、少女になってから、彼女は勤勉かつ善良な人間になる。虐待されても、悲惨なことを経験しても、小艾は自分の人生を諦めることがなく、強靱な意志を持ちながら生きている。大人になった小艾は自ら好きな人を選び、今後の不確定な生活を歩む勇気と力を備えている。小艾のほかに、張

愛玲も封建制度に圧迫される五夫人を描いた。家父長制の社会背景の下で、妻としての五夫人は家であっても、社会であっても権利を握っていない。自分のストレスを発散するために、小艾を虐待する。この腰抜けの五夫人は周囲の人々の機嫌を取ることしかできない人物だと考えられる。この物語では、小艾と五夫人に関する描写はほぼ同じぐらいの紙面を占め、張愛玲は生き生きとした描写で、不屈な小艾と偽善者の五夫人を創造してきた。

4.1.2.6 張愛玲の作品の特質

張愛玲の小説はハッピーエンドが少なく、登場人物は恋や金銭、自己存在を確立するために自らの力を鍛錬する姿が描かれる。彼女の作品で、比喩などの文学技法が多く使われ、人間の利己的で複雑な本性が緻密に描写されている。張愛玲は女性を語りながら、人間性の弱みに着目した。人間愛を渴望すると同時に、人間への不信も作品を通して表したと考えられる。中国共産党政権の下で、左翼文学が主流を占めた時代ではあったが、張愛玲の物語はその年代の異色文学だと考えられる。また、彼女はその異色の文学者、そして汪政府の要員の胡蘭成との関係で、「文化漢奸」（文化売国奴）と見なされていた。次の節で、張愛玲と胡蘭成の関係、そして彼女の恋愛結婚観を見ていきたい。

4.1.3 張愛玲の恋愛結婚観

張愛玲は1920年生まれで、その年代に生まれた中国人の結婚は、親の取り決めによるものが多く、自由恋愛結婚が少なかった。張愛玲は名家出身で、大都市の上海に住んでいたが、封建的な思想の影響から逃れることができなかった。1930年代、国民党は新民法を制定し、当事者の意志による結婚が認められるようになったが、伝統思想が根強く、法律があっても、完全なる自由恋愛結婚が難しく、社会もそれを認めない態度を取っていた。

旧社会の中国において、女性は、結婚しているかどうかにかかわらず、貞操が求められていた。一方、女性と比べると、男性は比較的自由的な恋愛をすることが許されていた。「結婚」は男性にとって、家族としての結びつきを重視するもので、愛していない女性と結婚する可能性はあった。一方、「恋愛」は「結婚」とは別物だと考えられ、家庭外で自由にできるものだったと考えられる。張愛玲の恋愛と結婚はこのような社

会背景の下で芽生えてきた。

一方、胡蘭成という男性は 1906 年浙江省で生まれ、国民党による北伐が始まった頃に、彼は国民党に入党した。1937 年、彼は《中华日报》『中華日報』の主筆となり、上海に赴任した。1938 年、胡蘭成は香港に行き、《南华日报》『南華日報』に「第二次大戦勃発以前に日中平和を実現させるべき」という論文を発表した。その後、胡蘭成は汪精衛とその夫人と接触し、1940 年 3 月、汪精衛が南京政権を樹立し、胡蘭成はその宣伝部政務次長を務めるようになった。しかし、やがて胡蘭成は汪精衛と疎遠になってしまい、汪の部下に逮捕され、48 日の監禁生活を送っていた。釈放後、彼は南京政府関係の人との付き合いも断った。その頃、日本の敗戦の雰囲気は濃くなったが、胡蘭成は日本人との付き合いを増やしてきた。

監禁中、胡蘭成は友人の女性作家から送られてきた雑誌《天地》『天地』を読んだ。その雑誌に、張愛玲の短編「封鎖」が掲載され、それを読んだ胡蘭成は感動して、張愛玲に注目するようになった。釈放後、胡蘭成は友人から張愛玲の住所を聞き出し、会いに行った。二人の関係は急速に親密になり、そして胡蘭成の三人目の妻が病死した後、23 歳の張愛玲はこの 38 歳の男と結婚した。

胡蘭成との関係から見ると、張愛玲は当時の思想、つまり男性の「恋愛」と「結婚」は別物であるという思想に、反抗的な姿をとっていなかった。二人が恋人になる時に、胡蘭成は既婚者だったが、張愛玲は愛人や妾になることには抵抗しなかった。また、彼女は自分の愛情を重視し、自己中心で、悲しんだり、他人を同情したり、家族や子供のころを懐かしんだりすることがない。権威を認めず、他人の意見に左右されず、タブーも持たない彼女は、善悪観、美醜観に測られないと胡蘭成は言った。このように、胡蘭成が善人か悪人かについては、張愛玲は判断ができなかった。

1945 年 11 月、胡蘭成は《大楚報》『大楚報』という新聞の責任者になったため、漢口に行った。そこで、彼は同じ建物に住む 17 歳の看護婦と親しくなった。それだけでなく、日本の敗戦に伴い、彼は「漢奸」と見なされ、漢奸狩りを避けるために、彼は故郷の村々に潜伏していた。その間に、逃亡生活を支えてくれた技師の女性も彼の愛人となった。このように、胡蘭成は居場所や環境が変わるたびに、いろんな女性と関係を持つようになっていった。

張愛玲は胡蘭成と手紙のやり取りが続き、1946 年には彼女が彼の潜伏先の温州を訪ねてきて、いつも冷静な彼女には珍しく、漢口の看護婦とのことで二者択一を迫った

が、当時温州で彼と同棲していた技師の女性については、張愛玲はそれまで知らなかったようだ。約半年後、胡蘭成は上海を訪れ、張愛玲のところに一泊するが、二人は口論になってしまった。それから何度も手紙のやり取りがあったが、1947年6月、胡蘭成には遂に張愛玲から絶交状と30万元のお金が届き、やがてこの30万は彼の逃亡資金となった。

張愛玲は夫の胡蘭成に複数の愛人が出現しても、逆上せず、表面は冷静を装い、愛の喪失を自覚し、深く傷つけられて自ら去って行ったのである。結局、張愛玲は心の中で「一夫一婦制」を求めるが、妻、愛人、そして自分の三者が円満に仲良く共存することを望む胡蘭成は彼女の愛の欲求を満たすことができなかった。

「漢奸」胡蘭成との関係、そして彼女の作品が反共産党の意味合いもあることで、張愛玲が「文化漢奸」と見なされるようになった。後に、彼女は「自的的文章」を通して、自分の私生活や文学の非政治性を強調し、文学を私生活と切り離すべきだと主張していた。こうした張愛玲は、「文化漢奸」という罪から免れ、中華民族の一員として尊厳を守った。しかし、社会主義国家の中華人民共和国が成立し、彼女は政治や精神の新しい流れを見定めた後、香港、そしてアメリカに逃亡していった。それから、彼女は胡蘭成と再び会うことはなかった。

4.1.4 張愛玲と『半生縁』

張愛玲は独特な文字や言葉を使い、物語を自分の経験や情緒に基づいて描き、自分の考えた通りに創作していた。彼女自身も物語に登場する女主人公たちのように、純粹な愛を求めながらも、人間性への不信も表していた。次の節では、張愛玲の作品には珍しいが、「理想的な女性」が登場する『半生縁』を研究対象として、姉の顧曼璐と主人公の顧曼楨の人生を見ていきたい。登場人物が複雑な関係を持つため、主要人物関係は以下の図のように示している。

4.2 曼璐の悲劇人生

『半生縁』には、様々な女性人物が登場する。新生活を積極的に求める女性もいるし、悲劇的な人生を送った女性も少なくない。「新しい女性」かつ「理想的な女性」(The Ideal Woman)の顧曼楨に加えて、その姉の顧曼璐も人々に強烈な印象を読者に与えるキャラクターである。

4.2.1 顧曼璐の性格

本節では、第二の主人公と言って良い、姉の顧曼璐の人生を見ていきたい。家族を養うために、彼女は初恋の人張豫瑾と別れ、タクシーダンサーになった。様々な男性に遊ばれ、加齢と共に、曼璐の美貌はどんどん失われていく。家族や自分が生きていくため、曼璐は水商売を始め、後で商人である祝鴻才と結婚する（事実婚）こととなった。曼璐は長年売春婦をして、何回も流産したことがあるので、子供が産めなくなった。これで彼女は夫に不満を持たれたため、妹の顧曼楨のお腹を借りて、夫の子供を産んでもらうことにし、後に曼璐は自分の人生を悲しみながら亡くなってしまった。本来、曼璐は善良な少女だったが、何故後に邪悪な人物となり、悲劇的な人生を送ってしまったのかを、時代背景と念頭に置いて、家庭、仕事、恋、そして結婚の視点から分析していきたい。

4.2.1.1 父親の死

物語の第二章に、主人公の顧曼楨と沈世鈞が昼食をとる時の会話のシーンが描かれている。二人は自分の故郷や家族について話をしていった。

“Oh, your father has already passed away?” (Shijun)

“He died the year I turn fourteen.” (Manzhen) (14)

以上の会話で、顧家の父親は顧曼楨が14歳の時に亡くなったことが分かる。家族の支えである父親の死に伴い、一家の収入もなくなってしまった。曼楨はそれに続けて次のように言う。

“My father worked in a bookstore. That little salary of his had to support our whole

family, including my grandmother. When my father died, we had nowhere to turn. We children were too young to understand-except for my old sister, who was already grown up by then. She's been supporting us ever since.” (14-15)

父親が亡くなる前に、家族はある程度安定した生活をしていた。裕福ではなかったが、長女の顧曼璐もストレスがなく、中学校に通っていた。若い曼璐は初恋の人と婚約して、青春や幸せな生活を楽しんでいた。しかし、父親の死と共に、すべてが変わってしまった。

“My sister hadn't finished secondary school,” Manzhen continued. “What kind of job could she get? Even if she did get a job, it wouldn't pay much. Not enough to support a family. Her only choice was to become a taxi- dancer.” (15)

タクシーダンサーというのは、David Freelandによると、踊り場で、ダンスごとに顧客と一緒に踊るために雇われる人を指す。家庭の重荷が長女である曼璐の肩にかかり、中学校さえまだ卒業していなかった彼女は他に選ぶ職業もなく、タクシーダンサーという道を歩んでしまった。学校に行く権利が奪われただけでなく、初恋の人とも別れることになった。曼璐の人生が一変し、すべての不公平を受け入れるしかなかった。

“In any case, once you go down that path, it's a downhill slope, unless you're good at the game. My sister- she's not that type. She's a person with a loyal heart, really.” (15)

「その道を歩んでしまうと、器用に立ち振る舞う人は別として、そうでない人はあまり稼げることはできない」と曼楨が言う。姉の曼璐は不公平や不幸にもかかわらず、家族に不満などを抱かず、「忠実な心」でコツコツと働いていたという意味で、善良な人間だったと考える。

4.2.1.2 長女意識

家庭の困難を直面しなければならない時に、曼璐の長女意識が働き始めた。祖母は年齢の関係で、外で働くことは不可能だった。幼い姉妹兄弟の世話をする母親の顧夫

人も家を出て、お金を稼ぐことができなかった。そこで、曼璐は不満を感じたが、自分には長女であるため、外に出て、家計を担うことにした。家計を支えると同時に、妹の曼楨や兄弟たちの学費も払い続けたのである。

“I’ve been good to her,” Manlu thought to herself. “And this is how she repays my kindness. Never a thought for what I’ve done for her. For whom did I sell my youth, if not her? If it hadn’t been for them, I’d have married Yujin long ago. I am a fool. Such a fool.”
(145)

中学校を卒業しなかった彼女は、仕事を選べる権利も失ってしまった。水商売をすることになり、初恋の人張豫瑾とも別れることになった。曼璐は家計と兄弟姉妹のため、このような環境で徐々に墜落していき、普通の人に戻りたかったが、結局それはできなかった。

4.2.1.3 仕事の悲劇

少女期の曼璐は善良で、純粋な人間だったが、タクシーダンサーに従事してから、彼女は一変した。男たちに媚びを売るために、曼璐はお酒やたばここと離れられなくなった。彼女もこのような生活が嫌いだと考えるが、家族のため、曼璐は仕方がなく、それを続けなければならなかった。歳を重ねるにつれ、彼女の美貌も失われていく。

Her family lived in a set of rooms that had been rented for them by a man who kept her sister Manlu as a mistress. When that relationship had ended, Manlu recast herself as a second- tier escort, a more respectable occupation, closer to decency, but with a reduced income. She was always pleased if people mistook her for a simple taxi-dancer. (16)

タクシーダンサー時期の曼璐は、ある商人の愛人となった。商人が上海を離れ、曼璐と商人が住んでいた家は顧家の住む場所となった。その後、曼璐はタクシーダンサーをやめ、売春婦になると決めた。しかし、曼楨以外の家族は曼璐の犠牲を当たり前だと考えていた。昔、曼璐はかなりの劣等感を感じたが、今、その劣等感がさらに心の中に蔓延してしまった。

She (Manlu) was in the stairwell, talking on the phone. Her voice was just as rough on the ears as that radio song: saccharine screeches that made the room and the crockery shiver..... Her hips twisted back and forth, pushing against the phone book that dangled beneath the wall- mounted phone. Her apple- green silk cheongsam was fairly new, but there was a darken area at the waistline, a sweat stain left by a dance partner's hand. It was a bit unnerving, that hand- shaped mark jumping out from the cloth. Her hair was ruffled, still undone, but she'd put on that stage make- up of hers: blocks of bright red and solid black, with blue eyeshadow. It looked pretty from a distance- up close it was rather scary. (16-17)

曼璐の着るチャイナドレスは新しいものだったが、腰の辺に暗い部分が見え、それは遊び客の手の汗がこびりついた跡であった。皺くちな髪、派手な化粧などの描写を読むと、彼女の働く環境が極めて悪いことが分かる。曼璐は家族のために自己を犠牲にし、心が辛くても、仕事環境がいかに悪くても、彼女はそれに慣れるしかなかった。しかも、その内心の辛さを家族の誰にも分ってもらえることはなかった。以下の引用で、家族の態度が分かる。まず、妹の曼楨の行動から見てみよう。

春の季節、気温が不順だったため、曼楨は風邪を引き、同僚の叔恵に電話して、仕事を一日休むことにした。叔恵と世鈞（世鈞は上海に単身赴任のため、叔恵の家に住んでいた）は彼女のことを心配し、曼楨の家に見舞いに行くかどうかを議論した。

“Do you think we should go and see her?” Shijun asked, after he and Shuhui had returned home that evening.

“Err... She probably is quite sick. She wasn't feeling well yesterday.”

“Do you have her home address?”

“Yes,” Shuhui said, with a puzzled look, “but I've never been there. You've known her a long time now, and you've never heard anything about her family- right? She hasn't got an ounce of mystery about her, and yet there is something mysterious about this.” (10-11)

曼楨は自分の家族のことをあまり口にしないので、親友の叔恵や世鈞であっても、彼女の家まで誘われたことはなかった。曼楨自身は神秘的な存在ではないが、彼女の

家族はかなり「神秘性」を持っていると叔恵や世鈞が考えている。このことから考えると、曼楨は姉の仕事を恥ずかしく思っており、姉がそのような仕事をする事で、曼楨も友人たちに対して劣等感を感じていたもので、親友にさえ、自分の家族、特に姉の曼璐のことを一切言わないことにした。

世鈞は曼楨の家に行くかどうかを迷っているのだが、叔恵は彼女の家に行かなければならないと言った。曼楨の机の引き出しに重要な資料があり、彼女はその鍵を持っているという理由からだ。しかしその時、ある幼い男の子が叔恵家の玄関までやってきた。

Shuhui ran down stairs. It was a little boy he'd never seen before. Shuhui was surprised, but the boy dangled a set of keys in front of him. "My sister asked me to bring you these. They're the keys to her desk."

"Ah!" said Shuhui, smiling. "Are you Manzhen's little brother? How's she doing? Is she feeling better?"

"She says she's getting better and she'll be back at work soon."

He couldn't have been more than eight years old, but apparently he was used to running errands. He turned away, undeterred even by the sweet snacks that Shuhui's mother was offering him. (11)

姉の顔や生活環境を親友に見せたくないから、曼楨は弟を使って、鍵を叔恵の家まで持っていくことにした。また、弟もこのような「使い」に慣れているように見えた。曼楨の話を伝えてからすぐ、彼は家に帰った。弟の行動から見ると、彼は叔恵に自分の家族のことを聞かれるのを回避したと考える。もし聞かれたら、曼璐が水商売をしていることが暴露されるかもしれないので、弟も曼璐の仕事を恥ずかしく思っていたことが分かる。また、母親である顧夫人の態度を見てみよう。

Anyway, Manzhen's marriage was not her (Mrs. Gu) main concern right now. "She's still young, another few years won't matter for her. It's you I'm worried about."

Manlu's face stiffened. "Don't you go managing things for me."

"How could I do that? I'm just saying it's a problem, that's all. You're not a young girl

any more- this kind of work won't last. It's not something you can do your whole life! You have to think ahead.”

……

Manlu, fired up with impatience, cut her off. “They're growing up, don't need me any more, so now you're ashamed of having me around- that's why you want me to get married! Ok, fine- but who do you think will marry me now?” (22)

顧夫人は娘の結婚を心配するようには見えなかった。曼楨はすでに働いているので、他の兄弟姉妹の学費や家の諸費用を負担できるようにはなっていたので、曼璐の存在はただの邪魔な存在だと母に思われていると曼璐自身は考えた。実際に、母親の顧夫人も同じように考えていた。長女の曼璐は確かに家族のために、自分の青春や恋を犠牲にしたが、顧夫人はそれをあたり前だと考えた。また、加齢に伴い、曼璐の売春婦の仕事もこの先長く続けられないだろうと考えた。顧夫人は、曼璐に結婚を勧めた。結婚したら、ある程度安定した生活が送れるだけではなく、もし結婚相手がお金持ちであれば、顧家の経済的援助ともなれると顧夫人は考えた。さらに、曼楨やほかの子供達はどんどん成長していったので、売春婦である曼璐が顧家にいれば、兄弟姉妹たちの面子や交友に悪い影響を与えるかもしれないので、早く曼璐が顧家から出て行ってほしいという顧夫人の気持ちも理解できる。

家族を養うために、曼璐は学業と恋を放棄し、水商売をすることにした。様々な男に遊ばれても、文句を言わなかった。しかし、このような自己犠牲は家族からの慰めや理解が得られないばかりか、顧家の恥辱となってしまった。曼璐は自分の運命に憤慨するが、愛する家族のためにそれを我慢して、結婚相手を見つけようと努力し始めた。

4.2.1.4 恋の悲劇

父親が亡くなる前に、曼璐には張豫瑾という初恋の人がいた。しかし、父親が亡くなってから、曼璐はタクシーダンサーとなり、この特別な職業や彼女の家族が豫瑾の妨げになるのを恐れ、曼璐は自ら豫瑾との初恋を断念した。

Manlu had once been engaged. The year she turned seventeen, two relatives came to

Shanghai, fleeing the turmoil that plagued their rural home town. This Mrs. Zhang and her son were Granny's kin, so they stayed with her. Mrs. Zhang took such a liking to Manlu that she wanted her as her daughter-in-law. Her son's name was Yujin. Neither he nor Manlu had any objections. They both seemed happy with the plan, and the engagement was quickly arranged. Later, when Mrs. Zhang returned to the countryside, Yujin stayed behind in Shanghai, and moved into his college dormitory. He and Manlu kept up a regular correspondence, and often saw each other. But when Manlu's father died and she became a taxi-dancer, the engagement was broken off; it was the bride's side that suggested it. (23)

当時、曼璐は豫瑾と婚約しており、もし事情がうまく進めば、二人は結婚することになったであろう。少女期の曼璐は将来の結婚生活に憧れ、幸せな人生を期待していたが、父親の死で、彼女の夢が消えた。もし曼璐は豫瑾と結婚することにしたなら、彼女自身は安定した生活が送れるかもしれない。しかし、そうすれば、彼女は家族がどのような悲惨な状況に陥るかと考え、また、長女としての責任感から、曼璐は結婚を諦めた。曼璐は長女として、家族を養うことを自分の義務にした。タクシーダンサーとなった曼璐は、愛情や恋に憧れを持たなくなった。豫瑾と互いに愛するが、タクシーダンサーという身分で彼と付き合うと、彼の名誉が損なわれるかもしれないので、曼璐は豫瑾と別れることに決めた。愛する人と別れるのは、辛かったと考える。

初恋の人と別れてから、曼璐はタクシーダンサーとして働いた。加齢が原因で、彼女はタクシーダンサーをやめて、売春婦となった。売春婦の生活をしている最中に、彼女は祝鴻才という商人と出会った。

4.2.1.5 愛しない人と結婚する

祝鴻才は豊かでない上に醜い人である。祝鴻才の初登場のシーンに、彼の容貌や表情が以下のように描写されている。

It was Mr. Zhu- his name, in full, was Zhu Hongtsai. He was tall and lean, with thin shoulders and a thin neck, all clothed in a traditional long gown... It wasn't the first time Manlu had seen him, either, but now she had Jiemin's (Manlu's brother) quip in mind: the man who looked like a rat, then a cat. His expression at that moment was serious, his

eyes small, mouth tight and sharp, altogether rat- like. (19)

曼楨の目を通して、祝鴻才の容貌は明らかになった。全体的に見ると、彼は背が高く、痩せていて、ネズミか猫のような顔をしている。このような人間は曼璐の好む男性像には合わなかったが、結局曼璐は彼と付き合うことを決めた。さらに、祝鴻才はすでに田舎の実家に妻がいるので、曼璐は彼と付き合うと、妾となってしまうのである。しかし、事情を知った顧夫人は、曼璐の結婚に反対する態度をとらず、以下のような話をしている。

“Well,” Mrs. Gu replied, with excruciating slowness, “she says he has a wife in the countryside, whom he never sees. He’s always lived on his own in Shanghai, and his friends think he should set up a household here. If he and Manlu do get married, he won’t treat her like a secondary wife. She thinks she can trust him on this point- or, at least, that she can manage him. He isn’t rich, but he has enough money to support us-” (25)

祝鴻才は良い身分を持たず、曼璐に豊かな生活を保証してくれるわけでもないが、顧家の家計などを支える力は持つと、曼璐は考えていた。また、前節で述べたように、曼璐はタクシーダンサーや売春婦として働いたことがあるので、それで彼女の心かなりの劣等感が生じた。その劣等感を感じる彼女は、自分が幸せを求める権利を失ったと信じた。一方、祝鴻才は醜く、金銭もあまり持っていない、理想的な相手ではないが、曼璐は彼と結婚する（事実婚）ことによって、ある程度、その劣等感が緩和されたのではないだろうか。

最初から、曼璐は祝鴻才を愛していなかったが、顧家の恥辱、そして兄弟姉妹の邪魔にならないように、祝鴻才と結婚する（事実婚）ことを決めた。また、彼と結婚したら、顧家の家計も助けてもらえるし、自分の感じる劣等感も緩和されるだろうと曼璐は考えた。しかし、結婚と言っても、二人は正式に結婚できない。当時の中国では、重婚（祝鴻才の実家に妻がいる）は違法なので、二人は結婚せず、名義上の夫婦として新しい家に引っ越し、「新婚」生活を始めた。「結婚」してから、曼璐は売春婦をやめて、祝鴻才も商業界での活動が徐々に順調になってきた。以下は顧家の祖母の話である。

“Your brother-in-law is rolling in money. Back when they first got married, they were lodgers in a single, upstairs room, but then- just like that, right before our very eyes- he got his own property and his own house, all custom-built. Your sister is lucky indeed. What a man she married! It’s just as people say: no need to be a pious vegetarian if the gods already like you.” (103)

Frank G. Gobleによると、Abraham H. Maslow という心理学者の説に、欲求階層論という議論があり、基本的欲求（欠乏欲求）がある程度満足されると、人間は成長欲求（存在価値）を求めようになる。「真」、「善」、「美」の他に、人間は「楽しみ」も求めると考えられる。祝鴻才も同じように、「楽しみ」を求めするために、あまり家に帰らなくなった。他の女と遊ぶだけでなく、彼は曼璐の妹の曼楨を狙い始めた。それで、曼璐と祝鴻才はよく喧嘩するようになった。

Hongtsai took a small swallow and smiled again. “Manlu, how did Second Sister (Manzhen) get to be so pretty?”

Manlu’s face went pale. “What are you saying? When did you get to be so crazy? She put the cup on the table, and left it there.

Hongtsai stared into space. “Actually, there are girls who are prettier, but for some reason I keep thinking about her.”

.....

But Manlu, thoroughly incensed, wouldn’t let the matter drop. She went on grumbling and muttering. “I should have known you were up to no good! Eating from the bowl but staring at the pot! You get two dollars to your name, and think that makes you an emperor- they’ll fall into your arms, they’re all money-mad like you. Even I was not so low as that! When I married you, it wasn’t for your money- surely that much is clear!”

Hongtsai sat up abruptly. “Can’t you ever let that go? Everyone knows I used to be a penniless devil, but what were you? A filthy tramp! You shameless bitch!” (112)

祝鴻才の事業が成功し始めてからは、曼璐は人々が羨ましいと思う生活を送ること

ができるようになったが、心は寂しくなった。祝鴻才は外でいろんな女と遊び、酔っ払って家に帰ると、曼璐に曼楨の話をし始めた。彼が曼楨を狙っていることを知った曼璐は驚いた。自分が愛されていないだけでなく、夫は妹のことをいつも思っていることで、曼璐の尊厳がひどく傷つけられた。また、祝鴻才は、曼璐が過去売春婦であったことを思い出させたので、曼璐は落ち込んでいた。新婚の幸せを感じることもなく、曼璐は寂しさと祝鴻才の罵倒を我慢し続けた。その時から、彼女の心の中に存在する劣等感は少しずつ怒りに変わり、曼璐も善良な人間から腹黒な婦人に変身していく。

4.2.1.6 出産できない

曼璐は物質的に豊かな生活を送り、理想的な生活をしているように見えるが、彼女が内面に抱える苦しさは彼女にしか分からない。最初、曼璐は祝鴻才を「支配」「manage」(25)できると考えたが、物質条件が豊かになるとともに、祝鴻才も放蕩するようになってきた。外で様々な女と遊んだり、曼楨のことを狙ったりして、曼璐との夫婦関係も徐々に崩れてしまった。このことで、曼璐は不安になった。過去、彼女はタクシーダンサーや売春婦として働いていたことで、劣等感を抱えていた。また、現在の祝鴻才が商人として成功したため、曼璐は自分がいつか彼に嫌われ、そして捨てられることを怖がっている。祝鴻才に捨てられると、曼璐自身の生活だけでなく、顧家全員の経済的な生存にも莫大な影響があると彼女は考える。

また、春秋戦国時代から、中国では「男尊女卑」という思想が存在する。それは女性差別を象徴する言葉であり、源淳子によって、「男尊女卑」は女性を「正当」に差別していると考えられている。中国の儒教的な女性観は、二千年以上にわたって女性を圧迫してきた思想とみなされることが多く、女性は男性の奴隷、玩物として見られると陳東原によって指摘されている。あまり教育を受けたことのない曼璐もこの「男尊女卑」思想を受け入れているため、自分の価値を祝鴻才に分かってもらわないと、彼女はいつか彼に捨てられると信じていた。その所謂「価値」とは女性が子どもを産むということである。祝家の繁栄のため、そして祝鴻才との繋がりを深めるために、曼璐は子供を産もうとするが、彼女はもはや子供を産める体ではなくなっていた。

“She says her stomach is bothering her again, and her joints ache.” Mrs. Gu leaned in

close to her daughter (Manzhen), in the dark of the kitchen, and whispered in her ear, “It’s those abortions she had- that’s what’s wrong!”

Manlu had other symptoms as well, but Mrs. Gu, preferring to deceive herself, would rather not think about it. (104)

以上は顧夫人が曼楨と話し合う場面である。顧夫人の話から、曼璐は長年売春婦として働くことによって、何回も流産したことが分かる。また、曼璐は他の性病も患い、このような病弱な体では、子供を産めるとは考えられない。顧夫人も曼璐の悩みをよく分かり、彼女に以下のアドバイスをしたのである。

“No matter which way you look at it, it all comes down to this: you need a son! Easy to manage, back in the old days. The wife picked out a concubine for her husband, then raised the child as her own. But you won’t like that way of solving the problem.” Even she felt it to be an old-fashioned, backward idea; a moment later, she was laughing at her own suggestion. (118)

最初、曼璐は母親の意見を聞いたが、それを認めることができなかった。しかし、事情がある日から変わった。曼璐は病気で家から出られなく、妹の曼楨は姉のことを心配するため、曼璐の豪邸を訪ねた。祝鴻才は酔っ払い、家に帰って、曼璐の妹である曼楨を見たのである。その後、彼は曼楨を狙っていることを曼璐に告げた。もし曼璐が祝鴻才にその「夢」を実現させるなら、多分彼は落ち着いて、外で遊んだりするのをやめるのだろうと考える。

That “mother’s wisdom” she’d heard that day suddenly seemed not so unreasonable after all. It would be good to get a child. All she needed was someone to bear the child for her. Why not her own younger sister? She was the one Hongtsai wanted. And, as her own younger sister, she’d be easier to keep under her thumb. (121)

曼璐はその恐怖を覚える考えと戦って、それを忘れようとする。しかし、その怖い思いは結局払拭できないと張愛玲は書いている。曼璐はまたどのようなことに遭遇し、

結局どのような決断を下したのかを、次の節で見よう。

4.2.1.7 夢の幻滅

曼璐は祝鴻才から安心感をもらうことなく、理想的な生活と全く異なる世界に生きていた。初恋の人の張豫瑾との思い出だけが、彼女の心の慰めとなった。ここで、張豫瑾が物語に再び登場する。

曼璐と別れてから、豫瑾は実家に帰った。学校を卒業してから、彼は医者となり、後に出てくる病院の院長となった。今回、彼は医療設備を購入するために、上海にやってきた。彼はこの機会に、顧家に立ち寄った。実家に帰るまで、まだ何日間が残っているため、ホテルに泊まるのであれば、様々な不便があるため、豫瑾は顧家の空き部屋に泊まることになった。

“Last year, when Manlu got married, we started renting those rooms out,” Mrs. Gu explained. There’d been no mention of Manlu up to that point.

“Did you know Manlu got married?” Granny followed up.

“Yes, I heard about it,” Yujin said pleasantly. “How is she doing?”

“She’s a lucky girl,” Granny said. “This husband of hers is very good. He’s a successful businessman, and they’ve built their own house on Hongqiao Road.”

.....

Yujin took it all in, responding just enough to show he was listening. “Oh... uh-huh... well, that’s wonderful.”

Mrs. Gu thought he seemed a little uncomfortable; apparently he still had feelings for Manlu. If news of her marriage hadn’t reached him already, he might not have come to their house, for fear of stirring up jealousy or suspicion. (124-125)

以上の会話や豫瑾の反応から見ると、彼はやはり曼璐のことを気にしていることが分かる。彼は曼璐との思い出を心に閉じ込めようとした。長年会っていない、彼は曼璐の生活をできるだけ邪魔したくなかった。曼璐が男と生活をしていることを知っていたら、豫瑾も顧家を訪問しなかっただろう。豫瑾は荷物などをホテルから顧家に運んでいたため、晩御飯が遅くなった。しかし、曼璐の妹である曼楨は家庭教師のアル

バイトに行くため、一人で先に晩御飯を食べていた。その時、豫瑾は曼楨を見た。

When Yujin came in, she (Manzhen) was sitting at the table with her rice bowl. He froze. For a moment, he thought he was seeing Manlu- the Manlu of seven years ago. (126)

.....

And, at the same time, her voice, her smile, her every gesture was utterly familiar to him: these traces of her presence had danced in his dreams for years, and now he beheld them with waking eyes. Fate is cruel, but it's a cruelty that suffuses sweetness into the suffering. (126-127)

豫瑾は曼璐のことを忘れられなく、曼楨を見た瞬間に、彼は目の前の曼楨を七年前の曼璐と間違えたのである。彼は運命の残酷さに憤慨したが、曼楨を見て、曼璐との過去がすべて戻ってきたように、彼は感じていた。顧夫人は豫瑾を「恋の道化者」“a fool for love” (127)と呼び、曼璐への恋慕に自分ながらあきれていたが、豫瑾は結局曼璐を好きなのか、それとも曼楨を好きなのかが分からなくなってきた。

豫瑾は寝る前に本を読む習慣があり、曼楨は自分の本を彼に貸してあげた。また、豫瑾の住む部屋の電球が壊れてしまって、曼楨が電球を取り換えてあげた。さらに、曼楨は顧家の支えとなり、仕事だけでなく、アルバイトもしていて、生活がどのように辛くても、彼女が文句を言わないことに、豫瑾は感動した。

Over the past few days, she'd (Mrs. Gu) told him how things were, and he knew she (Manzhen) was supporting all seven people in her family. Her constant cheerfulness, the absence of any complaint despite the great burden she carried, impressed him deeply. He'd found that her approach to life was different from other people's: she faced it head on, with a smile. His feelings had shifted; Manlu's loveliness paled by comparison. (131)

豫瑾は曼璐を曼楨と比較してみた。曼璐と同じように、曼楨は一家の支えとなったが、曼楨は様々な仕事に我慢強く耐えて、全く文句を言わない。また、曼楨は他の辛い生活をする人と異なり、彼女は何事へも積極的な態度を取る。豫瑾は曼璐を思い出して、曼楨と比べたら、曼璐はそこまで優秀ではないと考えた。この時点から、豫瑾

は曼璐を愛するのをやめ、愛情を曼楨に移したのである。

たまたま実家に帰ってきた曼璐は、豫瑾がここに泊まっていることを知り、興奮した。しかし、豫瑾は用事があるため、外に出かけたため、曼璐は彼と会えなかった。その後、顧夫人はこの何日間の出来事を曼璐に全て教えた。

She told her daughter every last detail of the story about Manzhen and Yujin, holding nothing back, because Manlu had her own husband and she'd married well, rising high above the treetops, whereas Yujin had stayed unmarried, all on her account. Dispatching her younger sister to comfort him was a splendid solution, wasn't it? Mrs. Gu was certain her eldest daughter would approve. (141)

母親は曼璐が良い夫を見つけ、幸せな生活を送っていると考えた。事實は、曼璐は全く幸せではなく、彼女は母親の断言に少し怒っていた。また、豫瑾は院長となれたので、もし当時彼と結婚したら、どのような幸せな人生になるだろうと考えると曼璐は悲しくなってきた。さらに、母親と祖母が曼楨と豫瑾の結婚を計画していて、曼璐はそれを聞き、嫉妬するのであった。

She knew that if Yujin had fallen for Manzhen, she herself was the prime object of his affection, given the sisterly resemblance. That poor man- still chasing an illusion!

Her heart was touched to the core. She had to see him and warn him, tell him not to be fool for love. (141)

しかし、この時に、曼璐はやはり豫瑾が彼女のことを愛していると信じていた。豫瑾が彼女を愛し、今でも結婚していないことを知った曼璐は感動した。もし豫瑾が曼楨を愛するようになったら、それは曼楨が自分とよく似ているからだと考えた。彼女は豫瑾に会いたく、自分のことを忘れたほうが良いと彼に告げようとした。そうこうするうちに、豫瑾が実家に戻る日が来た。曼璐はわざわざ豫瑾が好きな紫色のチャイナドレスを着て、豫瑾に会いに来て、彼女はこのように言う。

“I hope you will forget all about me.”

The tack she had taken made it hard for Yujin to come up with a good reply. She thought he was still in love with her. He couldn't refute that, directly. (143)

.....

Manlu smiled as she looked him over. "You haven't changed. Have I?"

"People are always changing," he said pleasantly. "And I've changed too, especially my temperament. Maybe it'd because I'm older, but when I think of the past, I laugh at myself for being so childish." (144)

豫瑾の話から見ると、彼はもはや曼璐を愛していないことが分かる。曼璐の大切にしていた僅かしかない思い出を、豫瑾は覚えていないふりをした。曼璐も彼が自分ではなく、本当に曼楨を愛していることが分かった。豫瑾が実家に帰る準備ができて、顧家から出た瞬間に、曼璐は泣き出した。昔の恋は既に消えてしまい、彼女の美しい夢も潰えてしまった。妹の曼楨が豫瑾に本を貸してあげたり、電球を変えてあげたり、ランプを持ってあげたりした優しさには別の目的があると曼璐は考えた。母親や祖母も曼楨と豫瑾の結婚を計画しようとするから、曼楨の行為はただ豫瑾に媚びを売っているのだと曼璐は考えた。

その瞬間、曼璐は曼楨を心から憎むようになった。曼楨は若くて、明るい将来は彼女の前に広がっている。しかし、曼璐は曼楨と異なり、将来が見えなくなっている。曼璐の孤独な心の慰めになるのは、豫瑾との思い出だけだった。しかし、妹の曼楨は曼璐の思い出を踏みにじり、粉々に砕いた。曼璐は豫瑾との思い出に触れることができなくなり、触れようとしても、心が痛むしかない。曼璐は曼楨や家族のために自分の青春と幸せを犠牲したが、何も報いられなかった。妹の曼楨はそれらの思い出や夢さえも自分に残してくれなく、曼璐は妹を憎み始め、心理状態もこれから変化していく。

4.2.1.8 妹への迫害

豫瑾との思い出が幻滅と変わり、また、夫の祝鴻才も妹の曼楨を覬覦していることを思うと、曼璐は不安となった。豊かな物質条件、自分の地位、そして夫を自分の元から引き離さないため、曼璐はある計略を考えた。

体調を崩した振りをして、曼璐は母親と曼楨を自分の豪邸まで呼び込んだ。年を取

った母親は後に家に帰ったが、曼楨は姉のことを心配するために、豪邸に一晩残ることにした。しかし、曼璐の恐ろしい計略は、義兄にあたる祝鴻才に自分の妹の曼楨を強姦させるというものであった。その後、曼璐は曼楨に、祝鴻才の愛人になるよう持ち掛けたが、曼楨に断られた。曼璐は曼楨に酷い平手打ちをされたとき、次のように言う。

She (Manlu) gave a cold, hard laugh. "I never realized we had such a brave martyr in our family! If I'd taken that approach, our whole family would have starved! When you're a dance-hall girl, when you're a prostitute, people treat you like dirt and you just have to take it- you can't put on airs and graces. I'm no different from you. We're sisters, the same flesh and blood. So why am I beneath contempt, while you get to ride high in everyone's eyes?" Her voice kept rising in pitch till by the end she'd broken down, and tears coursed down her cheeks. (233)

曼璐は妹に、長年の不満をすべて吐き出した。タクシーダンサーや売春婦となって、家族全員を養ったが、感謝の言葉を言われたことはなかった。同じ血縁を持つ姉妹であるけれども、曼楨の将来は明るいが、曼璐の将来は見えない。その後、曼璐と祝鴻才は曼楨を監禁することにして、曼楨もそのうちに自分が祝鴻才の子供を宿っていることが分かった。子供の産めない曼璐は、夫との関係を修復するためだけでなく、妹や家族に復讐するために、曼楨を「借り腹」として利用したと考える。

やがて、曼楨は難産のため、病院まで運ばれた。子供を産んだ後、曼楨は他人の力を借り、曼璐と祝鴻才の監視から逃げ出せた。曼璐は曼楨の子供を自分の子供として育て、幸せな生活にあこがれていたが、祝鴻才は相変わらず、外で女と遊んだりしていた。結局曼璐の性病や他の症状は重症となり、憂いの中に、悲惨な一生が終点に着いた。死ぬ前に、彼女は曼楨の住む場所を知り、子供を連れて曼楨の住まいを訪ねた。彼女は、曼楨に子供のために、祝鴻才のもとに戻り、彼と結婚すべきだと説いた。

曼璐は妹の人生や幸せを考えることがなく、やはり子供の立場、そして祝鴻才の立場から物事を見ていた。曼璐は自分の先が長くないと自覚し、自分の代わりに子供の面倒を見ること、そして祝家を管理することを、妹の曼楨に願っていた。さらに、曼璐は昔に妹に行った残酷な行為に後悔の気持ちが全くなく、曼楨が自分の代わりとな

るといのが当たり前だと考えていたようだ。曼璐は自分の不幸を妹の曼楨にも体験させたことが、最後の報復だったと考えられる。その訪問の一月も経たないうちに、曼璐の悲劇人生も終幕を迎えた。

4.2.2 曼璐の恋愛結婚観

初恋の張豫瑾と知り合ったのは、親戚の紹介であるが、封建主義の社会の下ではあったが、二人の関係は自由恋愛のように見える。曼璐は豫瑾を愛し、豫瑾も曼璐のことを愛していた。曼璐の初恋には「愛」が存在することが分かる。しかし、父親が亡くなってから、曼璐は家族を養う重荷を背負うようになってしまった。中学校さえ卒業できない彼女は水商売をするしかなかった。「恋」をする暇がなく、家族や自分自身の生存が最も重要な課題となった。長年水商売をして、曼璐はかなりの劣等感を感じていた。また、彼女は安定した生活（経済的）が望ましいと考え、愛していない商人の祝鴻才と結婚することにした。「愛」という前提も「生存」に切り変わったのである。

時代背景から見ると、当時の中国では、女性の「三従四徳」^[1]という思想が流行り、女性が従うべき三つの道と、守るべき四つの徳目を指す。三従とは、「在家从父,出嫁从夫,夫死从子」であり、幼い時は父親に従い、嫁いだ後には夫に従い、年老いたら子どもに従うべきだという意味である。四徳とは、「妇徳、妇言、妇容、妇功」であり、女性としての節操を守るとは婦徳、言葉遣いを言うのは婦言、身だしなみは婦容、家事をすることは婦功である。曼璐はこのような封建思想に洗脳され、父権社会で、男性の付属品となってしまったと考えられる。女性は一旦結婚したら、男性の指示に従わなければならない。また、既婚の女性の任務は生育であり、男性や子供のために一生を捧げることだと考えられる。これは曼璐が子供を欲しくて、曼楨を迫害することまでやった原因でもある。

最後に、曼璐の体調が崩れ、亡くなる前にも、彼女はやはり子供と夫のことしか考えていなかったのである。彼女は曼楨に以下のように言う。

“I’ve had a rough time of it, these past two years. Hongtsai goes out constantly, up to no good. He’d have sent me packing, long ago, if it weren’t for this child. What kind of woman do you think will come in and rule this boy’s life, after I’m dead? That’s why I’m begging you to come back.” (Manlu)

“Don’t keep bombarding me with that nonsense.” (Manzhen)

“You don’t believe me, but I am telling the truth. Hongtsai respects you- he thinks you’re different from every other woman. If you tried, you could manage him.” (Manlu)

“what is that man to me, that I would want to manage him?” (Manzhen)

“Then let’s not think about him- think of this child, and what he’ll go through after I die. You’ve got to take care of him.” (Manlu) (287)

曼璐が亡くなったら、子供の面倒を見る人もいなくなる。この子供の本当の母親である曼楨に面倒を見るように曼璐は要求した。また、祝鴻才は最初から曼楨のことを狙っていたから、曼璐は夫の幸せのために、妹の曼楨に祝鴻才と結婚するように説いた。曼璐は伝統的な「三従四徳」^[1]思想に執着し、自分の幸せと妹の幸せを犠牲にしても、家庭の男性を優位に置こうとしたのである。

曼璐は自己意識がなく、家族の生存を維持するために、自分の幸せを犠牲して、愛していない人と結婚した。また、結婚後も、夫の欲求を満足するために、そして自分の地位を確保するために、妹の幸せを犠牲したのである。このような物質が乏しい社会で生きていた曼璐は「愛」と比べて、「生存」を結婚の前提としていたと考えられる。Abraham H. Maslow の欲求階層論によれば、生理的欲求が満足されないと、自己実現もできない。曼璐の悲劇的な結婚、そして悲劇的な人生は、生理的欲求の欠乏に由来すると考えられる。

4.2.3 悲劇人生

曼璐は良い人生を楽しめたかもしれないが、残酷な社会は彼女を残酷な人間に変貌させた。腐敗した社会と女性を束縛する封建思想は曼璐の人生を悲劇にさせたと考えられる。曼璐は生存することに苦勞し、タクシーダンサーや売春婦に従事するのもやむを得なかった。苦しい環境の中でも、彼女は運命に流されることなく、幸せを見つけることに努力し続けた。しかし、水商売の生涯は彼女の心を腐敗させ、妹を迫害することまで行い、妹の幸せや将来も犠牲にしてしまった。

曼璐の人生は矛盾に満ちている。伝統と世俗の角度から見ると、彼女は不敬虔で、恥知らずなタクシーダンサーと売春婦であるが、他の角度から見ると、彼女は自己を犠牲する勇気を持つ、家族へ青春や人生を捧げる偉大な人間でもある。ある意味で、

彼女は伝統的な女性の枠組みを打ち破ったと考えられる。著者の張愛玲は、封建思想の呪縛を論難するためにそのような悲劇的な人物を創造したと考える。

中国の現代社会では、女性の地位は大幅に改善されてきたが、やはり一部の封建思想がまだ残っている。女性は教育を重視すべきで、伝統的な考え方に固執するのではなく、勇気を持って思想を革新する必要があるのではないだろうか。また、女性は自分を尊重し、愛し、自己意識や独立した人格を持つべきであり、貧困などの理由で男性の付属品になるべきではないと考えられる。最終的に、「善」というのが重要で、他人と善意を持って接すると同時に、自分自身にも善意を持たないといけないと考えられる。常に変化を繰り返していく流れの中で、変わる事のない純粋な心、善意、そして革新する勇気は張愛玲が望ましいと考えるものではないだろうか。

4.3 曼楨の孤独

アヘン戦争後、上海は港として開かれ、中国と西洋世界のつながりの地となった。西洋文明の繁栄と植民勢力によって、上海は伝統的な町から、商業に満ちた国際都市になった。汽車、電車、大光明シネマ（オールドグランドシアター）、百楽門ボールホール（パラマウントボールホール）、洋風ガーデンハウス、証券取引所などが現れ、上海で前例のない新しい社会雰囲気が生じた。新たな文明の影響および新中国の成立によって、若い男女は自由に恋愛して、結婚することが多くなってきた。しかし、伝統的な文化や思想が完全に消えたのではなく、このように新しい文明と伝統思想が衝突し、上海が文化的矛盾に満ちた場所になってしまったのである。当時、上海に住む人々は西洋の科学技術、洋式の住宅などを楽しんでいたが、彼らの考え方はまだ伝統的な中国文化に束縛されていた。特に、中国の女性たちは「三従四徳」^[4]という思想に囚われていた。

女性の悲劇は張愛玲の作品の主題であり、彼女の創造した女性人物、そして彼女自身は自立しようとしても自立のできない矛盾体だと考えられる。このような矛盾の心理は当時の女性たちを統御し、幸せになるのを阻害していた。『半生縁』の主人公である顧曼楨の悲劇は張愛玲のような知識を持つ女性が伝統思想から抜け道が見つからないことの反映とも考えられる。

4.3.1 顧曼楨の性格

『半生縁』に登場する人物の多くは女性であり、例えば、顧老夫人（祖母）、顧夫人（母親）、顧曼璐（姉）、などが挙げられる。彼女たちは伝統思想の化身だと考えられるが、女主人公の顧曼楨はそうではなかった。顧曼楨は自立し、経済的かつ精神的独立を追求する「新しい女性」かつ苦難を受け入れる「理想的な女性」だった。しかし、新しい文化と古い思想が交替する時代に、曼楨のような女性は幸せを見つけるのが困難であり、彼女たちは結局孤独な存在となってしまう。本節では、曼楨の性格や特徴を分析し、彼女はどのような新しい思想を持ったのか、そして彼女の人生はどのように孤独になり、悲しい人生を歩んでいたのかを見ていきたい。

4.3.1.1 曼楨の負担

曼楨の父親は、昔本屋で働いていた。高収入ではなかったが、一家の安定した生活を保証してくれた。しかし、曼楨 14 歳の時、父親が亡くなってしまい、それと共に、一家の収入もなくなった。祖母は老齢のため、外で働くことができなかった。家に子供が多く、母親は子供たちの面倒を見なければならなかった。そこで、前節で述べたように、また 4.2.1.1 節で述べたように、顧家の長女である顧曼璐は学校をやめ、水商売をしながら、一家を経済的に支えていた。

顧家の次女の曼楨は姉の犠牲に感謝の気持ちを持っていた一方で、姉が特別な仕事をすることに対して、彼女は消極的な態度をとった。当時、タクシーダンサーや売春婦などは正当な職業だと考えられず、社会地位も低く、人々に見下されるものだった。

姉が従事する職業に反発を抱き、曼楨は曼璐の妹として、家庭や自己を恥じるようになった。もし自分が売春婦の妹であることが周囲の人々に知られたら、曼楨も姉と同じように、みんなに見下されるのであろうと彼女は考えていた。これは曼楨の一つ目の負担だった。

また、4.2.1.5 節で述べたように、姉の曼璐は祝鴻才という商人と同棲してから、家庭の負担は姉から曼楨に移ってきた。

“Ma, from now on I’ll support the family. What was the point of Manlu’s paying my school fees for all those years, if I can’t take her place now?” (25)

いつも姉のお金を使っていたので、曼楨は恥ずかしくて気まずかった。曼璐の結婚（事実婚）をきっかけに、曼楨は姉を経済的負担から解放しようとした。大人になった曼楨はある工場で職員となり、収入はあまり高くなかったが、彼女は仕事以外にアルバイトも探すつもりだった。また、姉が結婚し（事実婚）、新居に引っ越しするので、使用人も要らなくなり、昔姉が住んでいた部屋を賃貸して、家計を賄おうと曼楨は計画していた。このように、顧家の経済問題は曼楨の二つ目の負担だと考える。

二つの重荷を背負う曼楨は孤独な存在となった。姉の仕事で、彼女はかなりの劣等感を感じ、心も敏感になってきた。このような劣等感が彼女を支配し、家庭や姉のことが人々に言えない秘密のようなものとなった。自分の悩みや心配事を他人に訴えられない曼楨は孤独だった。また、曼楨は姉を経済的負担から解放しようとし、アルバイトを探したりして、家計を賄おうとした。当時の若い女性たちは自分の将来について考えながら、青春を楽しむはずなのに、曼楨は様々なことで苦勞しなければならなかった。この点から見ても、曼楨は孤独な存在だった。しかし、家族を支える莫大な圧力と心の孤独さは曼楨を打ち壊すことがなく、自立した「新しい女性」になろうとするモチベーションとなったのである。

4.3.1.2 孤独な「新しい女性」

顧家の長女である曼璐は中学校をやめ、タクシーダンサーとして働き、家族を養っていた。しかし、曼楨は姉の道を歩みたいと思わず、彼女は大学を卒業して、ある工場に就職した。正当な仕事に従事し、彼女は本当の社会人となったのである。

It was Shuhui, his (Shijun) best friend from engineering college, who met her (Manzhen) first. Shuhui, who'd graduated before him and found work in a factory office, had then found him a position, as a trainee, in the same factory. Manzhen worked in that office, at a desk next to Shuhui's, so he must have passed her several times on his way to see Shuhui, but nothing stuck in his mind. Probably because he was fresh out of college, shy around girls, too awkward to take a good look. (1)

以上の描写を読むと、三人の関係が明らかになる。世鈞と叔恵は同じ大学の友だちだった。叔恵は先に卒業し、ある工場のエンジニアとなった。その後、叔恵の紹介で、

世鈞は彼と同じ工場で働くことになった。曼楨は叔恵と同じオフィスにいたので、世鈞はそのオフィスに行った時に、曼楨と出会ったのである。

物語での職場の描写を見てみると、女性は少なく、主に男性が働いていることが分かる。高等教育を受け、工場で働く機会を得たのがほとんど男性の時代に、曼楨は自己の努力によって、男性と同じように正当な職業を得て、自立した「新しい女性」となった。しかし、曼楨は「新しい女性」であると同時に、女性の同僚や友人がいなくて、仲の良い人が叔恵と世鈞しかいない、孤独な存在だと考えられる。

4.3.1.3 平等意識

曼楨は高等教育を受け、自身の努力で工場への就職の機会が得られたことで、ある程度当時の男性的特質を持っていたと考えられる。しかし、能力が男性と匹敵する彼女は、女性の優しさも同時に有していた。

年明けの際、世鈞らが働く工場は三日間の休みしかなく、四日からは出勤日だった。工場周辺のほとんどのレストランが営業せず、一軒しか開いていなかった。世鈞と叔恵はここで昼食をとろうと思って、レストランに入った瞬間、座っていた曼楨を見かけた。

She had a round face that seemed squarish inside the roundness- not four-cornered, but distinct, well defined. Her hair was ruffled and loose, falling over her shoulders in a casual style. Shijun wasn't in the habit of assessing a girl on some sort of beauty scale; he simply liked the way she looked. She thrust her hands into her coat pockets and smiled. (3)

丸い顔に、輪郭がはっきりと見えることによって、曼楨の堅忍質直な性格が分かる。ふわふわとした髪の毛は自然に彼女の肩に落ち、両手はコートのポケットに入り、微笑んでいた。上記の引用箇所ではないが、彼女はわざと裕福な家庭から出たお嬢様のように振舞わず、簡単かつ妥当な身だしなみで、世鈞の好感を得たと書かれている。

三人は一緒にあるテーブルに座り、それぞれ定食を注文した。叔恵は箸が汚れているのを見て、給仕にティッシュを持ってきてくれるように頼んだが、給仕は聞こえていなかった。そこで、曼楨は以下のことを言った。

“Wash them in the tea,” Manzhen suggested. “I don’t think you’ll want this tea anyway.” She swished his chopsticks around in the tea, dried them with a single firm shake, and balanced them across his teacup. Then she reached over to do the same for Shijun. (3)

曼楨は叔恵の箸をお茶に浸し洗い、世鈞の箸も洗ってあげた。世鈞は彼女に感謝しながら、好感度が一層増した。当時、ほとんどの女性は異性と一緒にいると、緊張感や違和感を覚えることが多く、特に未婚の女性はそうだった。未婚の女性は男性と話したり、顔を合わせたりするのは良くないと思われたが、曼楨はそう思わなかった。男性であっても、女性であっても、みんなは同じ人間なので、人間は平等だと彼女は意識していた。曼楨はこの平等意識を抱きながら、他人に善意を示した。それから、三人はより仲良くなり、いつも一緒に昼食をとるようになってきた。

4.3.1.4 偽りのない曼楨

春は三寒四温で、曼楨は風邪を引いた。彼女は叔恵に電話して、仕事を一日休むことを知らせた。叔恵と世鈞（世鈞は上海に単身赴任のため、叔恵の家に住んでいた）は曼楨の体調を心配し、彼女の家に見舞いに行くことにした。

曼楨は自分の家族のことをあまり口にしないので、親友の叔恵と世鈞でも、彼女は彼らを家まで誘うことはなかった。曼楨自身は神秘的な存在ではないが、彼女の家族はかなりの「神秘性」「mystery」(11)を持っていたと叔恵や世鈞が考えていた。4.2.1.3節で述べたように、叔恵と世鈞が顧家に来る前に、曼楨は弟を使って、鍵を叔恵の家まで持っていってもらった。また、弟もこのような「使い」「errands」(11)に慣れているように見えた。曼楨の話を伝えてから、弟はすぐに家へ帰った。

その時、曼楨の姉曼璐も家にいた。もし世鈞と叔恵が家まで来たら、水商売をする曼璐の身分が暴露されるかもしれないと曼楨は考えた。この行動によって、曼楨が姉の仕事を恥じていたことが分かる。

風邪が治り、曼楨は仕事場に戻った。その日、叔恵は用事があるので、昼食を一緒にとるのは曼楨と世鈞だけになった。その時、世鈞は曼楨の家族について、彼女に聞き始めた。曼楨が6人の兄弟、母親、そして祖母と一緒に暮らして、父親は彼女が14歳の時に亡くなったことを世鈞は知り、それ以上を聞くと失礼になると彼は思った。しかし、曼楨は少し躊躇した後、家のことを世鈞に話した。本来、曼楨の父親が本屋

で働き、収入は多くなかったが、一家を経済的に支えていた。しかし、父親が亡くなり、一家の支えはその代わりに姉の曼璐一人となったことを世鈞に告げた。

“My sister hadn’t finished secondary school,” Manzhen continued. “What kind of job could she get? Even if she did get a job, it wouldn’t pay much. Not enough to support a family. Her only choice was to become a taxi-dancer.” (15)

自分の姉は家族を養うために、中学校を退学した。正当な職業が見つからず、タクシーダンサーとなってしまったと曼楨は世鈞に言った。

When Manzhen returned home that day, she felt sad and empty. She’s always avoided discussing her family with others; now she’d broken her taboo, by telling Shijun so much of their story. (15-16)

曼楨は家族のことを他人に嘘をついても、あるいは言わなくても良かったのに、世鈞にすべてを言ってしまった。姉の仕事に、曼楨は劣等感を感じていたが、嘘をつく代わりに、曼楨は率直に世鈞に事実を自ら告げた。このことから見ると、曼楨は偽りのない人間だと考える。家族のために青春を犠牲して、水商売をする姉の身分を妹として恥じていたのだが、曼楨は姉の犠牲に感謝の気持ちを持っていたことが分かる。その感謝の気持ちを持っていたため、曼楨は世鈞に事実を言うことに決めた。彼女の誠実さは美德と言えるだろう。

4.3.1.5 自立と自尊心

曼璐は祝鴻才と同棲し（事実婚）、新居に移住した。昔に曼璐が住んでいた部屋が空いたので、曼楨はその部屋を賃貸しようとした。ある日、彼女は職場で同僚に尋ねてみた。

A week or so later, Manzhen suddenly told him (Shijun) and Suhui that her family had a room to rent, because her sister was getting married. She asked them to let her know if they heard of anyone looking for a place. (34)

もし世鈞か叔恵が部屋を探している人を知っていたら、自分に教えてくださいと曼楨は頼んだ。部屋の家賃だけで家族を養うのは足りなく、他のアルバイトを見つけなければならぬと曼楨は決心した。そこで、彼女は世鈞に聞いた。

“I’d like to ask you a favour,” she said, “but since you’re still new here, you probably don’t know many people in Shanghai.”

“What’s the favour?”

“If you hear of anyone who’s looking for a part-time typist, let me know. I’d like to work another couple of hours after closing time at the factory. Or maybe a tutoring job- that would be good.” (38-39)

工場の仕事以外、曼楨はタイピストか家庭教師などのアルバイトを探したいと述べた。仕事の給料、アルバイトの給料、そして賃貸しのお金で、家計を賄おうと考えた。工場の仕事だけをやってもかなり疲れるが、曼楨は疲労を考える暇もなく、1 時間あるいは 2 時間のアルバイトをすることで、できるだけ多く稼ごうとした。その後、彼女は 2 つのアルバイトを見つけた。体重が落ちてしまったが、彼女はいつも張り切っている状態だった。このように曼楨は家族を養いながら、精神も強くなり、自立のできる「新しい女性」となったと考える。

お金を稼ぐことには、様々な方法があった。曼璐のようにタクシーダンサー、裕福人の愛人、あるいは売春婦になったら、多くのお金はすぐに手に入るが、曼楨はその道を選ばなかった。姉の曼璐はそれらの職業に従事することで、大量のお金を稼げたが、人々に見下され、自尊心を失ってしまった。曼楨は曼璐と異なり、正当な仕事やアルバイトをすることによって、お金を稼ぐこともできたし、尊厳を守ることもできた。世鈞はこの自立、そして自尊心という美德を有する曼楨に惹かれ、二人は後に恋人となった。

4.3.1.6 自己主張

忙しい日々が続き、一日の仕事が終わって、夜の 6 時から 7 時まで、曼楨は家庭教師のアルバイトを務めた。家に帰って晩御飯を食べ、それから二つ目の家庭教師の

アルバイトをした。世鈞は曼楨のスケジュールをよく知っており、彼女と一緒に過ごせる時間は顧家で晩御飯のときしかなかった。

There was no chance to speak to her, because she was so busy. He'd have to wait till Saturday, and today was only Monday- the week stretched out, interminably. (88)

曼楨は毎週の月曜日から金曜日まで、勤勉に働いていた。彼女は電車代を節約するために、いつもバイト先まで歩いていくので、世鈞は彼女と一緒に歩けることで、「無限の希望」“a surge of boundless hope” (88)を感じていた。

その間、曼璐の初恋の人の張豫瑾が上海にやってきた。4.2.1.7 節で述べたように、今回、豫瑾は病院で使う医療設備を購入するために上海に来て、顧家に立ち寄った。顧夫人は彼に顧家の空き部屋に泊まるように勧めた。豫瑾もそれに同意した。晩御飯の時間に、豫瑾は大人になった曼楨を見た。現在の曼楨は七年前の曼璐と極めて似ているため、彼は驚いた。その瞬間から、豫瑾には曼楨への好感が芽生え始めた。

豫瑾は新しい環境に容易に慣れることができず、夜になってもなかなか寝られなかったので、本を読みたいと顧家の人々に言った。それを聞いた曼楨は自分の本を豫瑾にあげた。また、豫瑾の泊まる部屋の照明が暗く、曼楨は机を引っ張って来て、その上に立ち、電球を変えてあげようとした。

In the moment before it grew dark, Yujin saw the heel of Manzhen's foot; he was standing next to the table, so there was no way of avoiding seeing it. That heel was slender and strong, like Manzhen herself. (131)

過去数日間、顧夫人は豫瑾に家庭の状況を話し、曼楨が家に居る七人の日常家計を支えていることを豫瑾は知った。曼楨の元気さに感動し、それほど大きな負担にもかかわらず、曼楨は苦情を全く言わないことに、豫瑾は深く感銘した。この瞬間、曼楨の美德と比べて、豫瑾の心の中では、曼楨は姉の曼璐よりも優れる人間となった。

世鈞も曼楨の家に行ったので、彼は豫瑾の反応や表情を見てから、やきもちが止まらなくなり、次の日から顧家に来なくなってしまった。曼楨は世鈞の態度の変化を不思議に思いながら、家で彼を待ち続けていた。しかし、ある日、豫瑾は曼楨に愛を告白

しようとし、顧家の人々を彼の実家へ遊びに来るようにと誘ったが、曼楨に断られた。

Mazhen suddenly realized that if he went on, he'd ask her to marry him. Overwhelmed by surprise, all she could think was that she had to stop him somehow. She couldn't let him propose: it would only cause needless pain. (134)

豫瑾は自分の失礼な行為を後悔しながら、曼楨に自分が断られた原因を聞いた。曼楨はすでに世鈞と恋に落ちたので、豫瑾の誘いを断らなければならないと言い、豫瑾に辛い思い出を与えないように努力した。しかし実際に、最初に豫瑾と出会い、その後世鈞と出会ったとしても、曼楨はそれでも世鈞の方をより愛しただろうと確信した。そこで、曼楨は世鈞の気持ちを理解することができ、後に世鈞と仲直りをした。ここには曼楨の自分の意志を貫く性質、強い自己主張の気持ちを見て取ることができる。豫瑾はお金や社会地位があるものの、彼と結婚すれば、顧家の経済状況も良くなるが、曼楨はそうしなかった。豫瑾を愛していなかったため、彼と結婚するのができないと曼楨は思った。また、彼女は世鈞を愛しているため、もし豫瑾と結婚すると、自己の感情を騙すことにもなるので、曼楨は豫瑾の求婚を断ることによって、自己の本心を守れたと考える。

それから、世鈞はいつも通りに曼楨の家に行くようになった。彼は豫瑾の話をする時、言葉にはまだ嫉妬の色合いが見られていた。曼楨は、豫瑾が彼女に求婚しようとしたことを世鈞に伝えることによって、世鈞が持つ疑いをすべて消そうとしたが、豫瑾が笑われるかもしれないと思い、曼楨はそれを言うのをやめた。黙っていた曼楨を見た世鈞は、このような誤解が二度と起こらないように、早く結婚したいという気持ちを曼楨に伝えた。

Shijun caught her by the hand. "let's be serious then."

"Haven't we already decided to wait a few years?"

"Why, really? You can still work after we're married, can't you?"

"But what if- we have a baby? Once we have children, I can't go out and work, and you'll be stuck supporting two households. I've seen plenty of cases like that, a man supporting his family, and his in-laws too. He's so desperate for money, he'll take any job

he can find. What happens to his career then?" She paused. (150)

彼女は何人かの兄弟姉妹、母親、そして祖母を扶養しなければならないので、世鈞をこのような状況に引きずり込みたくないと思った。また、世鈞の職業生涯は始まったばかりで、家計を賄うのが大きな負担となり、二家庭（顧家と結婚後の家庭）の家計を賄うと、世鈞の負担がより重たくなると曼楨は考えた。さらに、彼女は自分の努力で顧家を支え続けると決めていたので、二人は結婚の話をそれ以上しなかった。

曼楨は他人の立場から物事を考える力を持ち、自分の夢に執着すると同時に、他人の夢（職業生涯）も全力で応援していた。また、当時は、家族を扶養するのが男性の責任だったが、曼楨は本来男性の持つ扶養の役割を自ら担うことにおいて、彼女は自立する女性としての自己を強く主張していると考えられる。

4.3.1.7 矛盾の始まり

世鈞の父親の沈氏は、南京で大規模なレザー産業を有し、有名な商人でもあった。その日の夜、南京の母親から電報が来て、沈氏が重い病気になったことを世鈞は知った。そのため、世鈞はすぐに南京に帰らなければならなかった。

沈氏の病気が治りそうになかったので、沈氏と沈夫人（世鈞の母親）は息子である世鈞に、上海の仕事をやめて実家の事業を継承するよう勧めた。最初は、世鈞はそれを拒否したが、結局父親の様子がそれから徐々に悪化していく様子を見ているうちに、彼は両親の提案に同意せざるを得ない気持ちになってしまった。

沈氏の調子が少し落ち着き、世鈞は工場の仕事をやめるために上海に行った。仕事をやめる前に、世鈞は曼楨にそのことについて一言も言わなかった。もし曼楨が彼の計画を分かったら、彼女は必ずそれに反対することは分かっていたので、世鈞は「先に行動、後に報告」“act first, get permission later” (167)と決め、曼楨のオフィスに歩いて行った。

曼楨は世鈞の父親の病気について彼に尋ね、世鈞は簡単に事情を言い、それから時間をかけて辞職するという決定に至った経緯を説明した。世鈞は南京から上海に戻る列車の中で眠れない夜を過ごしたと曼楨に話し、父親が回復しなければ、母親、義姉、甥を支えるのが彼の負担になると言った。沈氏は事業のすべてを、妾の代わりに（妻の沈夫人以外、沈氏には妾もいた）、世鈞に頼っていた。つまり、世鈞は家族の財政を

管理し、それによって母親と未亡人の義姉（世鈞の兄が何年前に亡くなった）の安定した生活を保証することができると彼は述べ、それが工場の仕事を放棄しなければならない理由だった。

それ以外に、別の理由もあったが、世鈞はそれを曼楨に言えず、彼自身もその理由を完全に認めることができなかった。もし世鈞が父親の事業を相続したら、すべてのことが一気に解決できるのではないか、ということだった。そうすれば、曼楨と結婚した後、曼楨の家族も支えることができると彼は考えた。しかし、そうしなかったら、世鈞は母親、義姉、そして甥をわずかな工場の仕事の給料で支えることになる。彼は彼の家族を扶養しなければならず、曼楨も彼女の家族を扶養しなければならないので、このような調子だと、二人は結婚できなくなると世鈞は思った。世鈞は曼楨に自分の悩みを言えず、もちろん曼楨は彼の決意が理解できなかった。

How could he have suddenly patched things up with his family, and left his job, without consulting her? She was hurt and upset. His work had meant a great deal to her. She was fully prepared for the sacrifices needed so that he could progress in his career; but he had tossed it aside. She was on the point of saying all this, but when she saw how crushed he was, she couldn't add to his burden. (169)

世鈞が家族と妥協したこと、そして彼女と相談せず勝手に辞職したことが、曼楨は理解できなかった。曼楨にとって、世鈞の仕事、あるいは彼の夢は大切なもので、そのために自分はどのような犠牲を払ってもいいし、どのような努力もすると彼女は考えたが、世鈞は先に自分の夢を放棄してしまった。曼楨は世鈞の自暴自棄に失望を感じたが、彼の悲しそうな表情を見ると、彼を責めようとしなかった。

この出来事から見ると、曼楨は夢に執着する、理想を追い求める人格を持つ人間だったが、世鈞は残酷な現実にも妥協しやすい人格であったと言える。二人の価値観に、違いが存在するのが分かった。今回のことで、二人は喧嘩をしなかったが、矛盾の種がもう二人の心の中で埋められたと考えられる。

世鈞はそれから数日上海に滞在し、曼楨と毎日会っていた。表面的に、すべてが昔と同じように見えたが、別れた後、彼は何か前と違うと感じた。世鈞が南京に戻ってからすぐに、曼楨に手紙を書き、叔恵と一緒に南京に来るように誘った。この機会

を使って、曼楨を沈氏と沈夫人に紹介しようと世鈞は考えた。手紙を受け取った曼楨と叔恵は、その週末に南京行きの列車に乗ったのである。

4.3.1.8 矛盾の深刻化

曼楨と叔恵は列車から降り、駅で待っている世鈞を見かけた。三人は馬車を呼び、世鈞の家に駆け付けた。沈夫人は曼楨と叔恵を優しく歓迎し、三人と一緒に晩御飯を食べた。晩御飯の後、世鈞は曼楨と叔恵を沈氏に紹介した。沈氏は病気のため、自分の部屋から出られず、家に話のできる人もいないから、寂しく感じていた。しかし、初めての対面だったが、沈氏は叔恵をとて人懐っこい人だと思った。曼楨が若い女性であるため、沈氏は曼楨を直視する代わりに、彼女に軽く頷いた。突然、沈氏は何かを思いついたように、曼楨に聞き始めた。

Suddenly he turned to her and asked, “Miss Gu, have you been to Nanking before?”

“No,” she replied.

“I think I’ve seen you somewhere before, but I don’t remember where.”

Manzhen looked at him carefully. “I don’t know. Could we have met in Shanghai? Do you often go to Shanghai, sir?” (175)

その時、沈氏はあることに気づいた。何年か前に、沈氏は上海にいる沈夫人の弟菊氏（世鈞の叔父）の紹介によって、李璐というタクシーダンサーと会ったのである。現在目の前に座っている曼楨は、そのタクシーダンサーの李璐と似ていると沈氏が思っていた。しかし、その話は曼楨の前でするのが良くないと沈氏は考え、別の話題に変えてしまった。

その後の何日間、叔恵、曼楨、そして世鈞は南京で観光したり、遊んだりしていた。曼楨と叔恵が上海に帰る前に、世鈞は曼楨にルビーの指輪を贈った。ルビーということだったが、実はこの指輪が宝石の欠片を集めて作られたもので、世鈞は辞職して得た 60 元で買ったものだった。

世鈞が自分の稼いだお金で指輪を買ったことに、曼楨は喜んでいて、嵌めてみると、指輪は少し緩かった。世鈞は曼楨の服の袖（曼楨は世鈞の古いセーターを着ていた）から一本の糸がぶら下がっているのに気づき、糸を引っ張り、一片をはがして指輪

の後ろに巻き付けた。曼楨は再び指輪を嵌め、サイズはちょうどになった。

曼楨と叔恵は上海に帰ったが、世鈞の叔父菊氏は上海から南京にやってきたので、沈氏はこの機会に、菊氏に李璐のことを聞いた。李璐は数年前にある商人と結婚し（事実婚）、タクシーダンサーをやめ、個人所有の売春婦になったと菊氏は語っていた。

Hearing about Li Lu's (李璐) new situation, Hsiao-tung's (沈氏) view of her was confirmed. "Who would have imagined that she'd sink so fast!" he sighed.

Jyu-sun (菊氏) crossed his legs and smiled. "Sound as though you're still hooked on her!"

"No, no. I'll tell you why I suddenly remembered her. A few days ago I saw a girl who looks just like her."

.....

"it could be her younger sister. Li Lu (李璐) had a lot of little sisters, as I recall, though they were snotty-nosed brats back then."

"What was her real family name? She wasn't really a Li, was she?"

"Her real family name is Gu."

Hsiao-tung (沈氏) stared. "That's it! This other girl's name is also Gu." (192-193)

タクシーダンサー李璐は顧曼璐だったということが分かり、世鈞の彼女である顧曼楨は、このタクシーダンサー李璐の妹だと、沈氏が確認していた。沈氏は沈夫人に自分の推測を言い、曼楨は工場の職員だが、彼女の姉のようにタクシーダンサーか売春婦をやっていたかもしれないとも沈夫人に言った。沈夫人は沈氏の話聞いてから、世鈞と曼楨が結婚をしないように望んだので、沈氏の言葉を世鈞に伝えた。母親の話聞いた世鈞はとても不愉快な表情を浮かべ、曼楨の家族には何の問題もないと信じ、母親との会話を終えた。

翌日、世鈞は叔父の菊氏を上海の家まで送り、夜が遅くなったので、彼は叔恵の家に泊まることにした。曼楨に会いに行くかどうかを躊躇した後、次の日、彼は顧家に駆け付け、曼楨に父親と母親が思ったこと（上記引用にある）のすべてを曼楨に言ってしまった。その話を聞いた曼楨は世鈞の父親に反感を持ち始め、良い人に見えたが、娼婦と遊んだりしたことに驚いた。また、世鈞は曼楨一家がこれから曼璐と話をしな

いように、そして曼璐と会わないために引っ越しを勧めた。曼楨は彼の考えが癪に障り、さらに、世鈞が実家に籠り、自立しようとしないうちに、曼楨は悲しんでいた。

“I am not disappointed, I tell you. But there is one thing I want to know. Do you plan to go out and get a job? I can't believe you'd be willing to stay at home your whole life, like your father.” (Manzhen)

“My father may be behind the times, he may have an old-fashioned way of thinking, but that's no reason for you to disrespect him!” (Shijun)

“When have I ever disrespected him? It's you who don't respect people! I don't think there's anything wrong with my sister, no reason why she should be hidden away, kept from meeting people. She hasn't done anything wrong. It's all society's fault- this unfair society of ours! If you want to talk about immorality, I don't know who's more immoral: prostitutes, or the men who are their clients!” (Manzhen) (202-203)

まず、曼楨は世鈞が父親から商売を継承することに不満を表した。また、姉の曼璐は売春婦だったので、曼楨はそれを恥ずかしいと感じていたが、家計のために働いていたという理由で、曼璐が悪いと曼楨は考えていなかった。世鈞と沈氏が姉の曼璐を悪く思っていることに、曼楨は不満を感じていた。売春婦より、お客となる男たちがもっと不道德だと曼楨は思い、世鈞の考え方に抵抗するだけでなく、この不公平かつ男尊女卑の社会に抵抗していたとも考える。現代の立場から見ると、曼楨の主張は正しいが、伝統思想に支配された当時は、曼楨のように女性としての尊厳を守ろうとする人は少なかった。彼女は自分の力で男尊女卑という世相と戦っていたが、孤独な存在だったとも考えられる。

この会話によって、世鈞も曼楨と自分の価値観が合わないことに気づいた。憤慨しながら、彼は顧家から立ち去ったのである。世鈞の辞職は矛盾の始まりで、曼璐の売春婦の身分は二人の矛盾をより深刻にさせた。

4.3.1.9 孤立無援

世鈞が立ち去った後、張豫瑾は顧家にやってきた。豫瑾は明日結婚することを顧家の人々に知らせ、顧家が結婚式に出席してほしいと彼は述べた。良い知らせの後にや

ってきたのは、曼璐の病気がひどくなったという悲しい知らせだった。曼楨は母親の顧夫人と一緒に姉の住む豪邸に見舞いに行ってしまった。

実際に、曼璐は命に係わる病気ではなかった。祝鴻才は子供が欲しかったが、長年売春婦をやった曼璐は出産できないため、妹の曼楨の腹を借り、子供を産もうと計画した。顧夫人は年を取っていたので、先に家に帰ったが、曼楨は祝家に残り、曼璐の世話をし続けた。しかし、その日の夜、曼楨は祝鴻才に強姦された。その後、彼女は祝鴻才と曼璐に監禁されることになった。

顧夫人は曼楨が豫瑾の結婚式に来ていなかったことに気づき、心配しながら、翌日に祝家へ行った。曼璐は曼楨が強姦されたことを顧夫人に言い、顧夫人は泣きながら、曼楨の不幸に同情した。しかし、祝鴻才と曼璐は常に顧家に経済的な援助をしているので、顧夫人は彼らからの助けを失うことを恐れていた。さらに、このような不道徳なことを他人に知られると、顧家の体面が汚されるので、顧夫人は曼楨を救う代わりに、口を閉じ、黙ることにした。

一方、世鈞は曼楨と喧嘩したことを後悔し、工場に電話して、曼楨が出勤していなかったのを知り、心配になった。彼は顧家に駆け付けたが、誰もいなかった。世鈞は顧家の前で曼楨を待っていた時、隣人から豫瑾が結婚したことを知った。顧夫人がその時に家に戻って来て、曼楨が病気となり、曼璐の家で数日間を休養する必要があると世鈞に伝えた。すると世鈞は顧夫人に曼璐の住所を聞いたが、顧夫人がなかなか彼に教えようとしなかった。

Shijun could tell that she (Mrs. Gu) was trying to deceive him, which struck him as bizarre. Could it be that this was Manzhen's idea? Had she told her mother not to give him the address, because she didn't want to see him? But even if that were the case, the older generation always urges peace and reconciliation. Even if Mrs. Gu were upset with him and thought him in the wrong, she would, at the most, treat him coldly; she wouldn't try to prevent them from seeing each other. Suddenly he remembered that Yujin had been there, according to Amah Gao (The neighbor). Could this all be because of him (Yujin)? (228)

世鈞は心配するより、曼楨を疑い始めた。喧嘩後、曼楨が張豫瑾と駆け落ちするのではないかと世鈞は推測し、曼楨への不信感がここから生じた。しかし、顧夫人に尋

ねる代わりに、彼は曼璐の住所を自分で調べることにし、自分の力で事情を調査しようと思決心した。

一方、監禁された曼楨を見てみると、彼女は祝家から脱走を計画していた。突然、彼女は隣の部屋から誰かの声を聞いた。曼楨がいる部屋のドアに、一人の大工が板張りを打ち込めていた。曼璐の使用人である阿宝（本来は顧家の使用人だった）は大工に、曼楨が精神的な病気を患っていると言い、ここに監禁しないといけないと説明した。

しかし、曼楨は、大工が自分を助けてくれると思いい、その瞬間、彼女の心は希望に満ちた。曼楨はドアに押し付けて叫び始め、顧家の住所、そして世鈞の住所を大工に伝え、そこに手紙を持って行くのを頼んでみた。また、自分が残酷に虐待され、罣に陥り、そして監禁されたと大工に言った。曼楨は声が枯れるまで、自分の遭遇を大工に言い続けたが、その後自分が何を言っているのかわからなくなった。このように叫び、泣き、拳でドアを叩くのは、精神的な病を持つ人のやることと同じだと曼楨は気づいた。

Suddenly she stopped. The next-door room was eerily quiet. Ah Bao (阿宝) had certainly already explained to the workman that the girl inside had a severe mental illness. And she herself was beginning to suspect that she was indeed neat the edge of real madness. (235)

大工が彼女を助けてくれるのはあり得ないと曼楨は思い、絶望のため、彼女は高熱になり、遂に倒れてしまった。翌日、使用人の阿宝は曼楨に食事を持ってきた。曼楨は阿宝に助けを求めようと思ったが、今の彼女はお金など全くなく、何かの物で阿宝を賄賂しなければならぬと考え、曼楨は世鈞からもらったルビーの指輪を見た。

That gave her an idea. Women like jewellery, she thought to herself. If I give her (阿宝) this ring, she might change her mind and help me. If she doesn't like the ring, it still can act as a surety- I'll buy it back from her, at a good price, once I get out of here. (238)

この指輪は曼楨にとって重要な意味があるが、自己を救うために、それを一時的に

放棄するしかないと思えば、その指輪を外し、阿宝に渡した。阿宝に、紙とペンを要求し、手紙が書けたら、世鈞の住所に持って行ってくれるように阿宝に頼んでみた。しかし、阿宝は曼楨の言う通りに行動せず、指輪を曼璐に渡し、曼楨の計画さえも曼璐に言ってしまった。それを聞いた曼璐は、褒美として、阿宝に 100 元をお礼として渡した。

年末になって、顧夫人は世鈞を避けるために、家族ごと蘇州に引っ越した。顧夫人に事情を聞けなくなり、世鈞は直接祝家へ行き、曼璐に聞こうと決心した。曼璐は世鈞を客間まで呼び、ルビーの指輪を彼に見せた。婚約指輪が曼楨の姉を通して返され、世鈞は曼楨への疑いがより一層増えた。

“Did she marry Zhang Yujin?” he continued.

Manlu raised the teacup to her lips and took a sip. She was simply improvising, and though she knew that Shijun was jealous of Yujin, she didn't want to state outright that Manzhen had married him, since that kind of falsehood would be easy to disprove. But it looked as though SHijun wouldn't give up unless she confirmed this story. Holding the teacup up, she peered at him cross the rim. “Since you already know, there's nothing more for me to say.”

Shijun had carried almost no hope with him when he entered this house, but her words still felon his ears like thunder. He sat there stunned, unable to say a word. After a long moment, he forced himself to his feet, nodded, and said, “I'm sorry for disturbing you.” He turned and left. (251)

曼璐の話聞き、世鈞は曼楨がすでに豫瑾と結婚したと確信し、絶望してしまった。その指輪をポケットに入れ、彼は曼璐の家から出た。もし世鈞がその指輪をよく見ていたなら、指輪を包んでいる毛糸の上の血痕（曼楨が抵抗する時に残った血痕）を発見できた可能性はある。しかし、彼の心は酷く傷ついていたため、ポケットから指輪を出し、一瞥することもなく、遠いところに投げ捨ててしまった。

祝鴻才は曼楨を強姦し、姉の曼璐は夫と一緒に彼女を迫害した。また、母親の無視、使用人阿宝の裏切り、そして世鈞の不信によって、曼楨は完全に孤立してしまった。どれだけ抵抗をしても、曼楨は祝家から脱走することができなかった。

その後、曼楨は自分の妊娠に気づいた。世鈞は父親の沈氏を失い、実家に帰った後、幼馴染の女性と結婚した。

4.3.1.10 逃走

曼楨が出産時に、難産となり、病院まで運ばれた。最初、曼楨が逃走するのを恐れ、曼璐は彼女を入院させまいと考えたが、結局入院しないと命が危ないため、計画通りにならなかった。曼璐は、曼楨が他の人と接触しないように、単独の病室をとろうとした。しかし、個室が満員のため、曼楨は普通の病室に入るようになってしまった。

By the time she was wheeled out of the house, Manzhen was slipping out of consciousness. But when the car door closed and the vehicle crept down the drive, followed by the creaking of the metal gate as it swung wide, her senses cleared. Finally, finally, she was out. She made a vow never return to that place. She hated that house. But it would come back to her... in nightmares. (268)

曼楨はこれを機会に、祝家から出られた。二度とこの家に戻りたくないと思いつつ、彼女はこの機会に、曼璐と祝鴻才の監禁から逃走しようと計画し始めた。病院に着いてから、曼楨は男の子を出産した。生まれた赤ん坊には罪はないのだが、曼楨はこの強姦の結果生まれた息子に嫌悪感を持たずにはいられなかった。しかし、やはり自分の産んだ息子なので、曼楨は思い直して息子にキスをした。曼楨は、生きている間に、息子と会えないと思い、悲しんでいた。

曼楨は自分の将来がどうなるのかも知らないから、息子を連れて一緒に逃走することはできないと考えた。また、姉の曼璐は息子を欲しかったので、自分の息子を優しく育ててくれるだろうと曼楨は確信し、一人で逃走する決心をした。入院してから数日が経ち、曼楨は隣の病床の蔡夫人と仲良くなり、過去の一年間に遭遇したすべてのことを蔡夫人に話した。

蔡夫人は曼楨に同情し、彼女を助けると約束した。曼楨は蔡夫人の夫である蔡氏に、顧夫人のところに手紙を持って行ってもらおうと考えた。しかし、過去の一年間、母親は自分の苦難を無視していたので、手紙を読んでも、母親の顧夫人は自分を助けてくれないかもしれないと曼楨は思った。曼楨は母親がこのような無情な人だと想像し

たくなかったが、現実は残酷だった。

翌日、曼楨は曼璐がない時に、蔡夫人の振りをして、蔡氏の助けで病院から脱走できた。彼女は行く場所がなかったから、暫く蔡家に泊まることになった。世鈞の実家に手紙を出したが、世鈞から返信はなかった（沈夫人はその手紙を受け取り、世鈞がすでに結婚していたので、沈夫人は曼楨の手紙を焼いた）。体調が回復してからすぐ、曼楨は叔恵の家を訪ね、叔恵から世鈞の情報を聞こうとした。しかし、叔恵は世鈞がすでにある女性と結婚したと言い、曼楨は絶望的になり、世鈞と再会することも断念した。

その後、曼楨は学校の先生となり、蔡家から教員寮に引っ越した。教えながら、給料はわずかであるが、曼楨は再び自分の生活を支えるようになった。昔の曼楨は人（家族と世鈞）を愛し、人にも愛され、愛の絆が存在するからこそ、彼女は自立しようとし、家族を支えていた。しかし、祝家の迫害、母親の無視、そして世鈞の不信は曼楨を絶望させた。もし当時、祝鴻才と曼璐に妥協して、祝鴻才と結婚したら（曼璐は祝鴻才と正式的に結婚していなかった）、曼楨は裕福な生活を送れたかもしれないが、自由への渴望は金銭の誘惑を退け、困難にもかかわらず、勇敢に病院から脱走した。現在の曼楨は頼れる人が誰もいなく、自立しなければならなかった。希望に満ちた心が、今失望しか感じていなかった。曼楨は「新しい女性」から、序論で定義した通り、苦難を受け入れる「理想的な女性」という特質を持っていたが、孤独な存在でもあった。このように、曼楨は約二年間その学校で教え続け、給料の半分を母親に振り込んでいた。

4.3.1.11 自己犠牲

ある日、顧夫人が曼楨の住む教員寮を訪れた。母親は曼楨にここ何年間の出来事を伝え、曼楨に祝家に戻るべきだと説いた。曼楨は母親への怒りがまだあり、母親の話が終わらないうちに、母親を帰らせた。数か月後、重病になった曼璐はその息子（曼楨と祝鴻才の息子）を連れて、教員寮にやってきた。曼璐は重い病気を患い、余命が長くないことを曼楨に伝え、息子のために、祝家に戻って欲しいと曼楨に嘆願した。曼楨は曼璐の要求を断り、彼女を帰らせた。部屋が静かになったが、曼楨の心は落ち着かなかった。

The revulsion she felt towards Hongtsai was so fierce, so instinctive, that just hearing his name was enough to set her off- which was why she'd rejected her sister's plea without a moment's deliberation. But after she'd calmed down and thought it over, it still felt like the right thing to do. Of course she loved her son- and now he was the only family she still had. If she had any means of getting him out of there, she'd raise him on her own; she had no qualms about this whatsoever. She was ready to endure all the opprobrium, all the social pressure meted out to single mothers. She'd do anything for her son- anything except marry Zhu Hongtsai. (288)

息子を深く愛している曼楨はどのような犠牲をしてもかまわなかったが、ただ祝鴻才と結婚することはできないと彼女は考えていた。姉の曼璐が生きている限り、息子は虐待されないと曼楨は思った。また、母親と姉に居場所を知られることのないように、曼楨は学校の仕事をやめ、ある会社で会計係として働くことになった。新しい仕事が見つかり、彼女は教員寮から出て、別の住所に引っ越した。

ある日、仕事が終わり、曼楨は歩いて家に帰ってきた。近くに、昔の使用人である阿宝がいた。阿宝は曼楨を見掛け、曼璐がすでに亡くなったこと、そして祝鴻才の商売が順調にいかず、昔の豪邸を売ってしまったことを曼楨に伝えた。また、曼楨の息子が祝家の新しい使用人の周媽に虐待されていることを告げ、阿宝はその周媽と喧嘩したため、祝家の仕事を辞めたのだと曼楨に言った。

姉の死に、曼楨は複雑な感情を抱いた。息子が虐待されていることに、曼楨の心が酷く痛んだ。祝鴻才と会いたくないが、曼楨はやはり阿宝から祝家の新住所を聞き、息子に会いに行くことを決心した。

祝家に行ったら、曼楨は息子の榮宝が猩紅熱に掛かったことを知った。祝鴻才も曼璐の遺影の前で泣き続け、過去の犯行や無責任を深刻に反省しているように見えた。

His self-accusation made her think that he had some kind of conscience after all. Her experience of the world was still not deep enough to help her see that cruelty and cowardice go hand in hand; and that those who, when they're riding high, transgress flagrantly are later crushed by the slightest touch of hardship, at which they pull long, sad faces. A small streak of sympathy leavened her loathing: she had no intention of heeding his wishes, but neither

did she want to add to his suffering. (306)

曼楨は祝鴻才の懺悔を聞くと、彼への嫌悪感が少し減った。昔、曼璐は何度も曼楨に、祝鴻才が彼女を尊敬し、ほかの女性とは異なり、曼楨は最も上品だったと言ったことがあった。祝鴻才が曼楨を強姦したのも、彼女を深く愛しているからだったと曼璐が亡くなる前に何度も言ったと書かれている。現在、姉の話の思い出すと、曼楨は祝鴻才が自分の思ったような悪い人ではなく、彼を許そうとした。また、息子の榮宝の面倒を見ないといけないと思い、長く躊躇した後、曼楨は自己犠牲の精神から、祝鴻才のもとに戻ることを決めた。

She herself was suspended in limbo: where she went was of no consequence, made no difference to her. It was about the same as being dead already. (312)

昔は強く自己主張をした曼楨は、その時から運命に妥協しようとした。自分の尊厳と幸せより、息子のことを優先し、曼楨は完全な利他主義者となったと考えられる。このことにより、曼楨は祝鴻才と結婚した。

結婚後、曼楨はいつも態度が冷たく、祝鴻才は徐々にそれに我慢できなくなった。昔、彼は彼女を切望していたが、現在の彼女はつまらない人間だと祝鴻才は認識し、失望感が心から溢れ出た。彼は「欲張り」「Greed」(306)の本性が変わらず、外で娼婦と遊び、家に帰ったら、曼楨を何度も挑発しようとしたが、曼楨は彼の怒りを無視するしかなかった。息子さえ彼女のそばにいれば、ほかのことに、曼楨は気にしない態度をとった。しかし、曼楨の心は苦痛に満たされ、誰にも訴えることもできなく、孤独だった。

本節では、曼楨は、その行動によって運命に妥協したことを論じてきた。息子を保護するために、彼女は自己主張を失い、尊厳や幸せを犠牲したのである。自分の子供を愛するのが人間の本性なので、「新しい女性」あるいは「理想的な女性」になる前に、人間性を持たないといけないと考える。人間は永遠に良い方向に向かうのではなく、間違えた方向に向かうこともある。曼楨もこのような人間であり、一時的に自己を失ってしまったが、後に現状に目覚め、再び運命に抵抗することに決心した。

4.3.1.12 「理想的な女性」曼楨

夫婦の喧嘩が子供に悪い影響を与えるので、栄宝もこのような悪い影響を受け、圧迫感も感じ、消化不良などの症状が出てしまった。また、祝鴻才は外で愛人ができ、その愛人と同棲し、家に帰らなくなり、曼楨は家庭の圧迫感に我慢できなくなった。当初、息子のために、彼女は祝鴻才と結婚したが、現在、曼楨は息子が健康に成長できるように、離婚を考え始めた。

These past few years had been terribly hard on her, just as she had foreseen. But there hadn't been any pleasure for him (Hongtsai) either. If she was doing this for her son's sake, then all she really was doing was dragging him into misery too. Her self-sacrificing plan sprang from a suicidal impulse. If she had done that- killed herself- it would have ended there. Life can indeed be worse than death, because it unfolds in twists and turns; and her life had grown worse. It was even more awful now than anything she'd been able, back then, to imagine. (338-339)

数年間の結婚生活は曼楨にとって辛かった。このような圧迫感が溢れる生活を続けると、事情がより悪くなるしかないと思っただ。問題を解決するには、祝鴻才と離婚するのが唯一の方法だった。祝鴻才は不倫などをしていたので、曼楨は彼と離婚しようとしたら、栄宝の養育権が彼女にいくべきであるが、財産家である祝鴻才が裁判員を賄賂によって買収すれば、結果は不確実になろうと曼楨は考えた。離婚は彼女の想像以上困難で、過去を振り返ってみると、曼楨は祝鴻才と結婚するべきではなかったと後悔し、それは最も大きな間違いだったと彼女は気づいた。

息子のため、自己を犠牲した曼楨はその時から目覚めてきた。生きることは簡単ではないが、息子のためであり、自分のためでもあるので、奮闘しなければならないと曼楨は考え、失った自己主張が戻り、三度目の自立をし始めた。訴訟のために莫大な金額のお金を借り、曼楨は祝鴻才と離婚ができ、栄宝の養育権も得られた。その後、彼女はまた「理想的な女性」となり、生活は貧困だったが、働きながら、借りてきたお金を返し、息子の世話をしていた。

ある日、曼楨はアメリカへの留学から帰ってきた叔恵の家を訪ね、そこで世鈞と会った。世鈞は曼楨と別れてから南京へ戻り、そこで幼馴染の女性と結婚した。結婚後

二人の子供が生まれ、ごく平凡な暮らしをしていた。数年前、世鈞一家は南京から上海に引っ越した。彼は曼楨と同じ目的で、叔恵の家に来たのである。

世鈞は何度も曼楨と再会することを夢見ていたが、この再会は彼が想像していたものとはまったく異なっていた。曼楨は14年前と比べたら、かなり痩せていて、生き生きとした表情も彼女の顔から消えてしまった。二人は叔恵の家から出て、街角のレストランに入った。曼楨は当時起こったことのすべてを世鈞に話し、それを聞いた世鈞は涙を流しながら、何も言えなかった。

He said nothing, waiting for her to continue, his throat so tight he couldn't speak.

A long moment passed. "Shijun, we can't go back." (372)

世鈞はまだ曼楨を愛していて、曼楨も世鈞に同様な感情を持っていた。しかし、世鈞はすでに結婚しているので、曼楨は彼の家庭を破壊してはいけないと思った。最後、彼女は「もう過去に戻れない」と彼に言い、二人の物語は終結した。

曼楨は苦しいことを経験しても、生活がどのように辛くても、希望を諦めず、意志強く努力し続けていた。また、彼女は道徳を守り、どのように世鈞を愛しても、彼の生活を邪魔したり、彼の家庭を破壊したりすることはしなかった。曼楨は当時の女性にはあまりなかった特質を持ち、「理想的な女性」だと考えられる。しかし当時、曼楨のような女性を理解してくれる人は少なかったので、「新しい女性」あるいは「理想的な女性」になるには、孤独になるという代価も払わなければならなかった。

4.3.2 曼楨の恋愛結婚観

前節に、曼楨の性格、そして美德を見てきた。本節で、物語の描写を分析しながら、曼楨の恋愛結婚観を見ていきたい。

4.3.2.1 過剰な自己主張

曼楨は自分の努力で家族を養い、世鈞との将来にも憧れていた。彼女は強い自己主張を持ち、自分の夢を実現することに努力し続けるだけでなく、恋人である世鈞の自立や夢も全力で応援していた。また、曼楨は完全に自立するまで、結婚はしないと言い、世鈞に経済的な負担を掛けないと決心した。しかし、世鈞は曼楨と早く結婚し

たいとの願望があり、結婚後二人は一緒に努力し、困難を乗り越えることを信じていた。彼は何度も曼楨に求婚したが、曼楨に断られた。曼楨は世鈞を愛していないわけではなく、他人の力によって家族を支えるのが良くないと彼女は思ったので、結婚を延期した。またその後、世鈞が上海の仕事をやめ、南京にいる家族のもとへ戻り、父親の事業を継承したことに、曼楨は不満だった。世鈞は自分の夢を守ろうとしても、残酷な現実を見たために、それに妥協してしまっただが、曼楨は世鈞の状況を理解しようせず、自分の価値観を世鈞に押し付け続けていた。

以上のことから見ると、曼楨は過剰な自己主張を持つ人だと考えられる。世鈞の助けを断り、自分の努力で自立するのが不可能だと曼楨は思わなかった。また、彼女は恋人に、自分と同じような価値観を持つことを要求したのも、過剰な自己主張だと考え、最終的に幸せを逃がしたのではないだろうか。

4.3.2.2 伝統思想の束縛

曼璐と祝鴻才からの迫害に強く抵抗したが、強姦されてから約一年間の監禁生活を送っていた。監禁されてから最初の機会に、彼女は祝家から出ようとし、何回も手を怪我してしまった。

There was a gaping wound in her palm, oozing blood. She raised her hand to look at it and noticed the red-jewel ring on her finger. Her ideas about sexual purity were different from those women in earlier times- when she thought of Shijun, she had no sense of guilt or failure. Nevertheless, when she looked at the ring, she felt a stab of pain. (233-234)

曼楨は被害者で、彼女は自分が強姦されたことに罪悪感を持っていなかった。しかし、世鈞からもらったルビーの指輪を見ると、曼楨の心は苦しくなった。強姦されたのは彼女のせいではなかったが、世鈞に貞操を守れなかったことに、曼楨は自己を恥じるようになってしまった。彼女には「新しい女性」の特徴が見られるが、貞操観念の点から見ると、曼楨はやはり伝統思想の束縛から抜け道が見つけられなかったことが分かる。

また、祝家から逃げ出した後、曼楨は警察に事情を報告せず、「母親が家の恥ずかしい秘密を他人に知らせたくない」“she would not want any public airing of the family’s dirty

secrets”(234) という考え方を継承した。女性である曼楨は迫害されたが、このような事情を警察に報告すると、女性としての体面を失ってしまうかもしれないと彼女は考えた。曼楨は体面が正義よりも重要だと考え、彼女はやはり伝統思想に束縛されていたことが分かる。

さらに、姉の死後、曼楨は祝鴻才と結婚することになってしまった。

Mrs. Gu was convinced that a woman is supposed to stick with one man, for life. (234)

曼楨は「女性の一生は一人の男性に固執しなければならない」という顧夫人の考え方も継承した。息子を保護するためだけではなく、その時の曼楨は自分の人生を完全に諦めてしまい、貞操を失った女性は幸せを求める権利がないと彼女は信じていた。しかし、結婚後の曼楨は毎日苦しみを味わい、夫婦の喧嘩も息子に悪い影響を与えてしまった。

曼楨は「新しい女性」と「理想的な女性」の特質を持っていたが、恋愛結婚観において、彼女はやはり中国の伝統思想に束縛され、結局自分の幸せを守ることができなかった。

4.3.3 曼楨の孤独な人生

曼楨は高等教育を受け、工場で正当な職業に就き、そこで同僚の沈世鈞と恋人となった。曼楨の心の底に、愛への追求が見られ、世鈞と幸せに暮らすことに憧れていたことが分かる。しかし、姉曼璐の結婚とともに、家族を養うことは曼楨の負担となってしまった。世鈞に何度も求婚されたが、曼楨は彼に経済的な負担を掛けないように、彼の求婚を断り、自己の幸福を断念した。姉と祝鴻才に迫害されても、曼楨は姉の恩恵を忘れられず、結局姉を許してしまい、自己を束縛することにした。さらに姉の死後、曼楨は息子のために、憎んでいる祝鴻才と結婚し、母親としての責任を取ることに力を尽くした。彼女の人生は葛藤に満ち、結局心は孤独になってしまう。曼楨の心理はフロイトの精神分析理論に当て嵌まると考える。フロイトの精神分析は心的生活において、「エス」、「自我」、「超自我」の三つの部分に区別する。「エス」は人間の本能的活動を指し、つまり曼楨の愛への追求だと考える。次に「自我」とは人間の人格の組織化された部分であり、つまり曼楨が経済的な原因で自己を束縛することだと考

える。「超自我」は道徳的良心に相当するもの、つまり曼楨の母親の理想的姿であると考える。「新しい女性」かつ「理想的な女性」である曼楨は幸せになれず、孤独な存在だったということを、フロイトの精神分析理論を使って、曼楨の孤独な人生を具体的に見ていきたい。

まずは「エス」、つまり愛への追求を見てみよう。曼楨と世鈞は職場で出会い、その後恋人となった。二人は同じ工場で働き、一緒に昼食をとり、世鈞は曼楨の性格に惹かれ、曼楨も世鈞のことが好きになった。二人の恋は平凡だったけれども、愛は川のように、曼楨と世鈞の心に流れていた。世鈞を愛するのは曼楨の本心であり、どのような困難があっても、二人の愛を諦めず、人生の終焉まで世鈞と共に生きていこうと決意していた。また、祝鴻才と曼璐に迫害されても、曼楨はやはり世鈞を愛する本能を持っていて、生への希望を諦めず、祝家から逃げ出し、世鈞に手紙を書き、彼に会おうとしていた。さらに、祝鴻才と結婚する前に、曼楨は世鈞に以下の手紙を送った。

“Shijun, I want you to know there’s someone in this world who’s always yours. Please know that, forever and wherever. Yours, always-” (366)

息子のために祝鴻才と結婚することになり、曼楨は自分の幸せを犠牲にする心の準備ができて、世鈞への愛は最初から変わらなかったことが、彼女の手紙から読み取れるのではないだろうか。

次は曼楨の「自我」、つまり自己束縛を見てみよう。世鈞は曼楨に何度も求婚したが、曼楨は彼に経済的な負担を掛けたくないから、求婚を断ったのである。曼楨は顧家の経済問題を心配し、自分の負担を他人にさせまいと思い、世鈞と結婚しようとしても、曼楨は自我を束縛することにした。また、祝鴻才と曼璐に迫害されても、曼楨は警察を呼ばず、最後に曼璐を許すことにした。顧家の父親が亡くなってから、姉の曼璐は水商売をし、一家を支えてきたので、曼楨は姉に感謝と慚愧の気持ちを持っていた。当初、姉から経済的な恩恵があったので、曼璐を憎んでも、結局彼女は姉を許してしまった。このように、曼楨は再び自我を束縛してしまった。

最後は曼楨の「超自我」、つまり母親としての責任感を見てみよう。息子のために、曼楨は祝鴻才と結婚することを決めた。自分の幸せを犠牲にした曼楨は良い母親になろうという責任感を持つようになってきた。しかし、結婚後、曼楨は祝鴻才と喧嘩し

たり、祝鴻才の外で愛人と同棲したりして、最初彼女が求めた健康な家庭環境が全くなく、息子もこのような家庭から様々な悪い影響を受けていた。曼楨はそれに気づき、息子への責任感から、彼女は祝鴻才と離婚して、一人で息子を扶養することを決心した。息子には、曼楨は責任感を持ち、この責任感彼女の超自我だと考えられる。

曼楨は人を愛する本能を持ち、それで世鈞と幸せな生活を送るようになれたかもしれないが、経済的な負担で、彼女は自己を束縛し、幸せな生活を掴みそこなった。また、姉に迫害されても、曼楨は姉からの恩恵を思い出し、自己を束縛し、姉を許してしまった。それで、彼女は幸せになる機会を完全に失ってしまったと考える。しかし、幸せになるという希望は消えたが、曼楨は息子に責任感を持ち、息子に自分の人生を捧げようと努力した。曼楨は新しい思想を追い求める「新しい女性」と苦難を受け入れる「理想的な女性」の特質を持つと同時に、伝統思想の影も彼女の人生に見られる。新旧交替の時代に、東西融合の象徴である上海で、曼楨は孤独の運命から逃げ出せなかったと考える。

第五章 結論

5.1 Siblings 像の多様性

5.1.1 *Pride and Prejudice* に見る Siblings 像の多様性

Austen の多くの小説に多くの Siblings が登場する。中でも *Pride and Prejudice* では 5 人姉妹が描き分けられる。Siblings たち、つまり姉妹たちは、同じ環境で育てられるのではあるが、5 人の受けた教育や性格は全く異なっていることが分かる。このことから、Siblings 像には多様性がみられる。主人公の次女エリザベスは、財産家の男性ダーシー氏と舞踏会で出会い、互いの性格に存在する問題点を意識し、そして二人の間に生じた誤解を克服し、恋愛の末に結婚した。エリザベスという人物を創造する時に、作者の Austen は第一波フェミニズム、特に女性の新しい思想という考えの影響を受けたと考えられる。女性たちが結婚市場で争奪戦を繰り広げる時に、エリザベスは富豪であるダーシー氏に媚びを売ることがなく、彼を非難したり冷たい態度をとったりしていた。また、彼女は理性、知性、精神的自立を求めているだけでなく、男性より劣った存在だという偏見を持たれていることに不満を表し、女性も良い教育を受ける権利、及び愛する男性を選ぶ権利があると主張する。このようなエリザベスはダーシー氏の関心を引くことになった。誤解を解いてから二人は理解し合い、恋が芽生え結婚に至り、幸せな生活を送り始めた。一方、エリザベスと対照的に描かれる末娘のリディアにはエリザベスの持つ特質が見られず、彼女は自惚れで、精神的自立を求めない軽薄な少女であり、牧師であるコリンズ氏を嘲笑したり、自分のことを商品だと考える彼女はメリトンに駐屯する軍人たちに媚びを売ったり、やがて金銭トラブルに陥る不誠実な軍人ウィッカム氏と駆け落ちの末に結婚した。結婚後のリディアは自分の愚かな行為を反省する姿が見られず、貧困な生活に苦しみ、幸せにはなれなかったと考えられる。

また、本博士論文では分析していない長女のジェーン、三女のメアリー、四女のキティーなどの脇役がいる。長女のジェーンは理性、知性を求めるが、性格は姉妹たちと比べると控え目だった。資産家のビングリー氏に好意を持っているが、言葉や行動に自分の感情を表すことができなかった。やがてビングリー氏との間に誤解が生じ、

すれ違うことになった。しかし最後のシーンで、ジェーンはビングリー氏の誤解を解き、勇敢に自分の感情を表し、ビングリー氏の求婚を受け入れ、幸せな生活を送るようになった。三女のメアリーと四女のキティーは物語の中では結婚に至らなかった。メアリーは社交やパーティーに興味を示さず、ピアノや本を読むなどを好む性格を有し、異性愛的欲望を持たない人物だと考えられる。キティーはリディアと同じように軍人に媚びを売ったりしていたが、自分に好きな人との出会いがないことに悔しさを覚えたり、リディアのことを嫉妬したりもした。

新しい思想を有するエリザベスと精神的自立を求めないリディアは多様な *Siblings* 像を提供し、ジェーン、メアリー、そしてキティーの登場はその多様性をさらに拡大したと考える。

5.1.2 *Little Women* に見る *Siblings* 像の多様性

南北戦争前後のアメリカ北部を舞台とした Alcott の *Little Women* は、マーチ家の 4 人姉妹をめぐる小説である。10 代の 4 人姉妹は母親マーチ夫人の指導の下で成長していく。物語では各姉妹のエピソードが語られ、その中で長女のメグは結婚して素敵な家庭の主婦となった。三女のベスは結婚しなかったが、マーチ家の「家庭の天使」を勤めていたと考える。彼女は家でピアノを弾くことや家族と過ごすことが好きで、家事をしたり、貧困な隣人（フンメル家）を助けたりしていた。姉妹たちが将来の夢について語り合う際、メグは主婦、ジョーは作家、エイミーは芸術家になりたいと言うが、ベスは家族と一緒に暮らすことに満足し、それ以上何も望まないと言っていた。やがて彼女は猩紅熱に掛かり、一時的には治ったが、体が病弱になってしまい、19 歳で不幸にも亡くなってしまった。その頃、ベスは自分が長生きできないだろうということや、だから将来や結婚については考えられず、進路や結婚について考えられなかったとジョーに告げた。家事や家族が好きだったが、結婚を望まなかったベスは 3 章で論じたように、非典型的「家庭の天使」になったと考える。一方、末娘のエイミーはベスと異なり、結婚したが、「新しい女性」の特質も持っていると考えられる。エイミーは少女期から芸術家になることを目指し、この野望を持っていることから、伝統的な女性像と大きく異なっていることが分かる。夢を実現するために、エイミーはヨーロッパ旅行の機会を獲得し、旅の途中で彼女は自分に芸術の才能はあるものの、天才とは言えないと自覚した。このように、彼女は自分を過大評価して大それた夢や野望を

持つのではなく、自分の能力をはっきり認識し、芸術の天才ではないことを認める勇気があることは、希にしかない特長だと考えられる。さらに、エイミーは芸術のみに没頭するのではなく、ほかの才能を磨く決心を示し、機会があれば、社会に貢献したい気持ちも表した。ローリーと結婚後のエイミーは個人として、夢を追いつつ続けようと決心した。夫のローリーは芸術の夢を持つ人々を助けるが、女性であるエイミーも社会的責任感を持ち、夫と同じことをしている点から見ると、この二人の男女は、平等な関係にあると考える。エイミーは家庭、仕事、そして願望などのバランスをよく調整し、男女におけるステレオタイプに陥らず、「新しい女性」の模範像を示した。ベスとエイミーの関係からも、**Siblings** の多様性が現れていることが分かる。

また、本論文で詳しくは論じていない長女のメグと次女のジョーがいる。メグは伝統的な価値観を持ち、華やかな社交や金銭に憧れたことがある。しかし母親のマーチ夫人は、お金持ちと結婚するよりも善良な男性に選ばれ愛される方が女性の幸福だとメグに説いた。やがてメグはローリーの家庭教師ジョン・ブルックと結婚し、ジョンは裕福ではないが、家庭に責任感を持つ善良な青年で、メグは彼と幸せな結婚生活を送り始めた。一方、ジョーは自立心を持ちフェミニズム的な思想を有する「新しい女性」だと考えられる。ジョーは戦場に行つて父親を助けたいと願ったり、隣家の少年ローリーの求婚を断ったり、文学作品を創造して原稿料を得たりして、芸術的創造性を有する女性像と自立に向かう女性像を表したと考えられる。ジョーが代表する女性像と他の姉妹が代表する女性像が並存し、**Siblings** 像の幅をさらに広げていく。

5.1.3 『半生縁』に見る **Siblings** 像の多様性

張愛玲の『半生縁』は顧家姉妹を主人公とし、沈世鈞、張豫瑾、祝鴻才などの男性人物も登場させ、姉妹2人の悲劇と孤独を描く物語である。上海は中国の港として開かれ、西洋世界とつながるようになり、新しい文明も上海に影響を与えていた。このような時代背景の下に、人々は新しい文明と伝統思想の矛盾を感じながら、自分なりの生き方を模索していた。顧家の姉妹は時代の産物であり、彼女たちの生き方は上海で生きている多様な **Siblings** 像を提供したと考える。父親の死後、長女の顧曼璐は家計や兄弟たちの学費を払うために、初恋の張豫瑾と別れ、水商売を始めた。やがて、彼女は商人である祝鴻才と結婚した（事実婚）が、子供ができないことに気づいた。このことで曼璐は夫に不満を持たれたため、妹の顧曼楨のお腹を借りて、夫の子供を

産んでもらうことにした。最後、曼璐は自分の人生を悔しく感じながら、悲しんで亡くなった。本来、曼璐は善良な少女だったが、水商売の生涯は彼女の心を腐敗させ、妹を迫害することまでしてしまい、妹の幸せや将来も犠牲にしてしまったのである。曼璐は自己を犠牲する勇気を持つ、家族へ青春や人生を捧げる偉大な人間だったが、伝統思想の角度から見ると、彼女は不敬虔で、恥知らずな売春婦だった。彼女の内心は矛盾に満ち、結局善良な少女から腹黒い婦人へと変貌してしまった。

一方、伝統思想に囚われる姉と違い、妹の顧曼楨は高等教育を受け、新時代の潮流を受け入れ、新しい思想を持つ女性だと考えられる。大学を卒業した曼楨はある工場で秘書として勤め、職場で中流家庭出身の沈世鈞と恋に落ちた。彼女は世鈞に迷惑をかけたいと思わず、自分の力で家族を養うと決心したので、世鈞の求婚を何回も断った。しかし、このような忍耐強い、純粋な曼楨は不妊の姉曼璐に騙され、姉の夫の祝鴻才に暴行され、約一年間監禁された。やがて、曼楨は難産のために入院し、看護の隙間に姉とその夫の監視から逃げる事ができた。自由になったが、彼女は友人から世鈞の結婚を知り、ショックを受けたあと、彼女は身を隠し、働きながら生きていた。姉の曼璐が病死した後、息子が猩紅熱で倒れた。曼楨は看病のため、息子のそばに戻ってきた。その後、曼楨は母親としての責任を取り、祝鴻才と結婚し、強い母親に成長してきた。後に、祝鴻才は愛人ができ、その愛人と同棲し、家に帰らなくなり、家庭の圧迫感に我慢できなくなった曼楨は彼と離婚すると決めた。中華人民共和国成立後、曼楨は14年ぶり世鈞と再会するが、彼の手を振りほどき、「もう元には戻れないわ」と彼女は呟いた。姉の曼璐と異なり、曼楨は運命に流されることがなく、理想的な生活を求めることに努力し続けていたが、新旧思想が交代する時代に、「新しい女性」と「理想的な女性」の特質を持つ曼楨は孤独な存在だった。同じ家庭、社会環境で育てられた顧家の2人姉妹が全く異なる人生の道を歩んだことで、多様な Siblings 像が『半生縁』を通して示されたと考える。

5.2 女性たちの恋愛結婚観

姉妹を描き分ける物語には、多様な Siblings 像が見られる。本論文で取り上げる三つの小説は異なる文化背景、異なる時代背景を持つが、それぞれの文脈に、新しい思想を持ち、自由恋愛を主張する女性が存在するのだが、伝統思想に束縛される、古い結婚観に執着する女性も存在する。それ以外に、結婚しない女性、及び軽率か奔放な

女性も存在する。本節で、本論文の研究対象の女性たちの結婚観をまとめていきたい。

Pride and Prejudice のエリザベス、*Little Women* のエイミー、そして『半生縁』顧曼楨は自由恋愛を主張する「新しい女性」だと考える。継嗣相続制度がある 19 世紀のイギリスでは、多くの女性は生存するために、相手の性格などをよく知らず、ただ生活あるいは金銭、地位のためだけで結婚する。*Pride and Prejudice* の主人公のエリザベスはそのような愛なき結婚に不満を持ち、彼女は相手との相互の理解、知的釣り合いを重視し、「尊敬」、「敬意」、「信頼」という理念を将来の結婚生活に期待している。舞踏会で、気位の高い態度を取るダーシー氏に、エリザベスは強い反感を持っていた。やがて、ジェーンとビングリー氏との行き違いや、妹のイディアとウィッカム氏の駆け落ちなどの事件を経て、エリザベスはダーシー氏に対する見方を改め、彼の高貴さと誠実さを知り、愛情が芽生えてきた。ダーシー氏もエリザベスの活気に惹かれ、二人は結婚することとなった。エリザベスは相手の内面性を金銭より重視し、ダーシー氏と理解、尊敬、信頼し合い、お互いに愛していると同時に愛されている。*Little Women* のエイミーはエリザベスと似ているところがあり、男性の人間性に目を向け、結婚相手を選んだ。ヨーロッパ旅行の途中、エイミーは同行者のフレッドに求婚されたが、彼女はそれを断った。フレッドのような教養が高く、ハンサムで、お金持ちの若い男性は当時の女性にとって、理想的な結婚相手だったが、エイミーは自分の心の意志に反して、愛していない相手と結婚することはできなかった。一方、彼女は音楽に情熱を持つ、善良なローリーに惹かれ、二人は結婚することとなった。結婚後、エイミーは夫のローリーと一緒に芸術の夢を持つ若者たちを助け、二人の男女は、平等な関係にあると考える。『半生縁』の顧曼楨は沈世鈞と職場で出会い、お互いの気持ちを分かってから恋人となった。姉の曼璐と異なり、曼楨は男性の内面性と人間性を重視しながら、相手を選んでいた。やがて、彼女は曼璐と祝鴻才に迫害され、息子を出産した。姉が病死した後、曼楨は母親としての責任感から、祝鴻才と結婚した。しかし、曼楨は祝鴻才を愛することができなく、二人は離婚することとなった。迫害される前の曼楨は自由恋愛を求め、将来の結婚生活に憧憬していた。迫害されてから、曼楨は息子のために祝鴻才に妥協し、彼と結婚した。結婚後、夫婦二人の喧嘩は息子に悪い影響を与えているのに気づき、曼楨は祝鴻才と離婚すると決意した。物語の前半の彼女は自由な恋愛と結婚を求める女性で、物語の後半では、曼楨は社会伝統に反し、勇敢に自由を求める女性となったと考える。

一方、『半生縁』の顧曼璐は伝統思想に束縛される、古い結婚観に執着する女性だと考える。曼璐と初恋の張豫僅が知り合ったのは親戚の紹介だったが、二人はお互いに愛し合ったので、封建社会の下での自由恋愛だと考える。父親を失った後、曼璐は家族を養うために、自分の職業生涯を犠牲にするだけでなく、結婚も犠牲にしてしまった。長期の安定な生活（経済的）が望ましいと考え、彼女は愛していない商人の祝鴻才と結婚することにした。曼璐と祝鴻才の結婚には、「愛」が存在せず、「就職」の意味となってしまったと考える。また、当時の社会背景の下で、既婚の女性は生育の義務があったが、長年水商売をした曼璐は不妊症にかかり、「祝夫人」という職業を維持するために、妹の曼楨を迫害することまで行ってしまう。曼璐は家族の生存を維持するために、自分の幸せを犠牲して、愛していない人と結婚した。また、結婚後も、夫の欲求、「祝夫人」という身分、及び夫からの経済的応援を確保するために、妹の幸せをも犠牲にしてしまった。物質が乏しい社会で生きていた曼璐は「愛」と比べて、「生存」を結婚の前提としていた。結婚後、彼女は男性を家庭の優位に置き、「三従四徳」という伝統思想に囚われていたと考える。

また、*Little Women* のベスのような結婚しない女性も居る。マーチ家の四人姉妹の中で、唯一結婚しなかったのは三女のベスである。猩紅熱にかかる前に、ベスはピアノを弾くことや家族と一緒に過ごすことが好きで、家事と慈善活動にも熱心に携っており、実家の生活に満足していてそれ以上何も望みはなかった。やがて、ベスは猩紅熱にたおれ、体が日々に衰弱していき、19歳で死期を迎えた。長生きができないと感じたベスは、将来の生活や結婚の計画について何も考えられなくなってしまった。健康な時でも、病気になっても、ベスは結婚しないまま死ぬことを悔やんだり、恋愛に憧れたりもしなかった。彼女は家に居て、家事をしたり、家族の世話をしたりするが、結婚を望まなかったことは、当時の社会の主流観念から逸脱した女性だと考えられる。

最後、*Pride and Prejudice* のリディアは自分の楽しみを第一義にし、家族のことを考えず、不誠実な男ウィッカム氏と駆け落ち、後に結婚した。リディアの結婚は軽率さゆえの失敗として描かれた。彼女はウィッカム氏の本性を知らず、長く付き合ったこともなかったから、二人の結婚は「閃婚」だと考えられる。ウィッカム氏のハンサムな顔に惹かれたリディアは、理性的な判断を失い、肉体的な衝動にまかせ、ウィッカム氏と駆け落ちしてしまった。結婚後のリディアは幸せそうに見えたが、ウィッカム氏の不誠実な本性が暴露され、彼女は自分が騙されたのに気づき、「閃婚」に後悔する

気持ちになったと考える。また、ウィッカム氏は結婚しても相変わらず、忘恩の振舞いを続け、数々の嘘を吐き散らかし、正当な職業が見つからず、日々を無駄に暮らしていた。その原因で、ウィッカム家の経済状況は赤字となり、「裸婚」を経験しているリディアは悔しさを覚えたと考えられる。

以上、時代背景と文化背景が異なる三編の小説における女性の結婚観を見てきた。幸せになり、生活に満足している女性は *Pride and Prejudice* のエリザベス、*Little Women* のエイミーとベスだと考える。エリザベスとエイミーは結婚することができ、結婚相手と信頼、尊敬、愛し合い、共通の価値観を持つことで、幸せになったと考える。また、ベスに結婚相手はいなかったが、結婚せず家族と日々を過ごすのが彼女にとって最も幸せなことだと考える。一方、*Pride and Prejudice* のリディア、『半生縁』の顧曼璐と顧曼楨は幸せになれなかった。リディアは肉体的な衝動を働かせ、ウィッカム氏と駆け落ち、後に結婚したが、彼の本性が分からず、共通の価値観も持っていなかった。ウィッカム氏と結婚後に、二人は経済的赤字に陥ってしまい、リディアはこのような結婚生活が苦しいものであることが分かる。『半生縁』の顧曼璐は生計のために初恋の張豫僅と別れ、自分の愛していない商人の祝鴻才と結婚する（事実婚）ことにした。長年売春婦をしてきた曼璐は不妊症を患い、子供が欲しい夫の祝鴻才を満足させるために、妹の曼楨を迫害し、彼女の腹を借りて子供を出産させる。しかし、曼璐はやはり夫に愛されることができず、病気になり、鬱状態になり亡くなってしまった。妹の曼楨は祝家から逃げたが、姉の死後、彼女は母親としての責任をとろうとし、自分を迫害した祝鴻才と結婚することにした。結婚後、祝鴻才は曼楨へ新鮮感を感じられなくなり、夫婦二人はよく喧嘩するようになった。曼楨はこのような現状が息子に悪い影響を与えたいと思ひ、祝鴻才と離婚すると決めた。

本論の研究対象である 6 人の女性の恋愛結婚観から見ると、以下の結論を出すことができる。共通の価値観を持つ、愛し合う人と結婚することによって、女性は幸せになれる。また、愛し合う人が居なくても、結婚しないまま、家族と一緒に暮らす、あるいは一人で生活することによっても幸せになれる。一方、愛していない人、または共通の価値観を持たない人と結婚すると、女性は幸せになれない。以上を纏めて書くと、共通な価値観と「愛」が存在しない結婚の下で、女性は幸福を獲得することができない、ということになる。

5.3 女性像の多様性

イギリス女性文学、アメリカ女性文学、そして中国女性文学に登場する女性人物の性格と結婚観を見てきたが、それぞれの国の女性たちは異なる女性像を持つことが分かる。Austen は理解、尊敬、信頼、愛を求める女性、軽率で愚かな女性などの女性像を作り上げたが、19 世紀を背景としたこの *Pride and Prejudice* では、女性たちの活躍場所は家庭内だけになってしまい、外で働く場面は描かれていないことが分かる。一方、南北戦争を背景とした Alcott の *Little Women* は、「新しい女性」と非典型的「家庭の天使」などの女性像を作り上げただけでなく、彼女たちは家から離れ、外の世界を見ながら、物事を経験することが多く描かれている。女性たちは家に居るだけでなく、家庭から出て社会に貢献することもできると Alcott は主張していた。また、中華人民共和国成立戦後の上海を背景として書かれた張愛玲の『半生縁』は働く女性を主人公とした。水商売をする姉、正当な職業につく妹のどちらも悲惨な目に遭った。伝統的な女性の姉は鬱の中で亡くなったが、「新しい女性」かつ「理想的な女性」の妹は意志強く運命と闘う姿を見せた。時代背景と文化背景が異なるこの三作では、家庭内に居る女性、家庭から出て外の世界を見る女性、そして働く女性がそれぞれ描かれた。また、時代の流れと共に、自分の幸せを考える女性から、自分と家族の幸せを考える女性に、さらに伝統思想や社会規制と闘う女性になってきたという女性の成長史も見られる。以上の三作の物語を分析することによって、多様な女性像が存在することが分かる。

5.4 将来の課題

Austen の *Pride and Prejudice*、Alcott の *Little Women*、そして張愛玲の『半生縁』における Siblings 像と女性像の分析をしてきたが、その三人の作家以外の女性作家の小説に登場される Sibling 像も分析していきたい。

また、女性文学に登場する女性人物を見るだけでなく、男性人物の性格及び結婚観も見ていきたいと考えている。たとえば、*Pride and Prejudice* に登場するウィッカム氏は最初女主人公のエリザベスに惹かれたが、やがてエリザベスの妹であるリディアと駆け落ちしたこと、*Little Women* の男主人公のローリーは最初女主人公のジョーと幼馴染だったが、やがてジョーに振られて、その妹のエイミーと結婚することになったこと、そして『半生縁』に登場する曼璐の初恋である張豫瑾は、大人になった曼楨に

惹かれたことがある。リディアとエリザベスは姉妹、エイミーとジョーは姉妹、曼璐と曼楨も姉妹で、似ている顔をしていると推測される。以上の三作の物語に登場される男性たちは女性の外貌を重視することが分かり、相手を選ぶ時に、自分の愛する女性と似ている外貌を有する女性に惹かれることが多いと考える。男性の結婚観における女性の外貌の重要性も将来の課題として研究していくつもりである。

テキスト

- Alcott, Louisa May. *Little Women. Little Men. Jo's Boys*. New York: The Library of America, 2005.
- Austen, Jane. *Pride and Prejudice*. London: Penguin Books, 2014.
- Chang, Eileen. *Half a Lifelong Romance*. Translated by Karen S. Kingsbury. London: Penguin Books, 2014.

日本語引用文献

- 新井潤美『自負と偏見のイギリス文化：J・オースティンの世界』岩波書店，2008.
- 荒木菜穂「フェミニズム的活動における権力の獲得について」『女性学評論』第30巻，神戸女学院大学女性学インスティテュート，2016.
- 有賀夏紀『アメリカ・フェミニズムの社会史』勁草書房，1988.
- 別府恵子・渡辺和子編著『新版アメリカ文学史』ミネルヴァ書房，2000.
- 陳懌懿「*Pride and Prejudice*に見るエリザベスの目覚め及び結婚観」『関西外国語大学大学院院生研究会研究論集 Fons Linguae』第44巻，関西外国語大学大学院院生研究会，2021.
- 榎本みな子『オースティンの小説とその周辺』英宝社，1984.
- 平田沙耶香「『高慢と偏見』論 —結婚と社会—」『英米文学英語学論集』第4巻，関西大学英米文学英語学会，2015.
- 廣田美玲「『高慢と偏見』における平等な結婚の誕生」『東京藝術大学音楽学部紀要』第33巻，東京藝術大学音楽学部，2007.
- 池上貞子『張愛玲 愛と生と文学』東方書店，2011.
- 伊藤正哉・川崎直樹・小玉正博「自尊感情の3様態：自尊源の随伴性と充足感からの整理」『心理学研究』第81巻第6号，2016.
- 伊藤淑子『アメリカ文学にみる女性改革者たち』彩流社，2010.
- ジェイン・オースティン著『自負と偏見』小山太一訳，新潮文庫，2014.
- ジェイン・オースティン著『高慢と偏見』大島一彦訳，中公文庫，2020.

- ジークムント・フロイト著『自叙・精神分析』生松敬三訳、みすず書房、1999.
- 亀井俊介『アメリカ文学史 講義2 自然と文明の争い』南雲堂、1998.
- 廉岡糸子『ルイザ・メイ・オルコットの秘密 —煽情小説が好き—』燃焼社、2016.
- 川口能久『個人と社会の相克：ジェイン・オースティンの小説』南雲堂、2011.
- 河尻和也『『沈香屑 第二炉香』を読む —文明、人種の問題を中心に—』『多元文化』
第5巻、名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、2005.
- 川本静子『ジェイン・オースティンと娘たち：イギリス風俗小説論』研究社出版、
1984.
- 近藤いね子『英国小説と女流作家——オースティンとウルフ』研究社、1955.
- 児玉晃二「ギルマン」『アメリカ文学案内』朝日出版社、2008.
- 顧蕾「『沈香屑--第二炉香』と『女家族』における母娘関係の比較」『多元文化』第3
巻、名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻、2003.
- 栗原涼子「第一波フェミニズムをめぐる女性運動史」『アメリカ研究とジェンダー』
世界思想社、1997.
- 前田絢子・勝方恵子『アメリカ女性作家小事典』雄松堂出版、1993.
- 前田淑江『『高慢と偏見』(Pride and Prejudice) あらすじと解説』『ジェイン・オ
ースティンを学ぶ人のために』内田能嗣・塩谷清人編、世界思想社、2007.
- 松本啓『ジェイン・オースティンの世界』近代文藝社、2011.
- 源淳子『『男尊女卑』考：近代日本における『男尊女卑』について』『関西大学人権問
題研究室紀要』第70巻、2015.
- 宮崎麻子「四人姉妹と五人姉妹を描き分ける近代文学の物語 『高慢と偏見』『若
草物語』『細雪』における姉妹たちの多様性の限界」『言語文化共同研究プロジェ
クト』大阪大学大学院言語文化研究科、2019.
- 森有礼「スクリーンの中の『若草物語』 —映画・アニメ版『若草物語』が描かな
かったもの—」『中京大学国際英語学部紀要』第25巻、中京大学国際英語学部、2020.
- 森山千晶『『若草物語』の研究 —四人姉妹の結婚観に触れて—』『たまゆら』比治
山女子短期大学国文学会、1989.
- 中村純子「理想自己と現実自己の差異と自己注目が劣等感に与える影響」『人間生
活文化研究』第26巻、2016.
- 長島万里世「Little Women における Louisa May Alcott の女権拡張論」『英文学論叢』

- 第 29 卷, 日本大学英文学会, 2008.
- 長島万里世『『若草物語』におけるルイザ・メイ・オルコットの男女平等観』『英文学論叢』第 58 卷, 日本大学英文学会, 2010.
- 中尾真理『ジェイン・オースティン: 小説家の誕生』英宝社, 2004.
- ノーマ・ジョンストン著『ルイザ 若草物語を生きた人』谷口由美子訳, ドメス出版, 2000.
- 大島一彦『ジェイン・オースティン: 「世界一平凡な大作家」の肖像』中央公論社, 1997.
- 李金然「『沈香屑 第一炉香』における母娘関係』『多元文化』第 8 卷, 名古屋大学国際言語文化研究科国際多元文化専攻, 2008.
- ロバート・ウエルダー著『フロイト入門』村上仁訳, みすず書房, 1978.
- ルイザ・メイ・オルコット著『病院のスケッチ』谷口由美子訳, 篠崎書林, 1985.
- ルイザ・メイ・オルコット著『若草物語 I&II』谷口由美子訳, 講談社, 2021.
- 佐藤広子『アメリカの家庭小説——十九世紀の女性作家たち』研究者, 1987.
- 滋賀秀三『中国家族法の原理』創文社, 2009.
- 惣谷美智子『ジェーン・オースティン研究——オースティンと言葉の共謀者達』旺史社, 1993.
- 鈴木美津子『ジェーン・オースティンとその時代』成美堂, 1995.
- 鈴木基子「張愛玲『小團圓』における恋愛と結婚: ヒロイン九莉を中心に」『研究紀要』第 76 号, 日本大学経済学部, 2004.
- 塩谷清人『ジェイン・オースティン入門』北星堂書店, 2001.
- 邵迎建『伝奇文学と流言人生—1940 年代上海・張愛玲の文学』お茶の水書房, 2002.
- 朱珊「張愛玲の作品における『理想的な女性』について」『お茶の水女子大学中国文学会報』第 35 卷, お茶の水女子大学, 2016.
- 武田千枝子「ショパン ケイト」『アメリカ文学案内』朝日出版社, 2008: 203.
- 谷林真理子「フェミニストとしてのルイザ・メイ・オルコット」『日本女子大学英文学研究』第 32 号, 日本女子大学, 1997.
- 谷田恵司・向井秀忠・清水明編著『ジェイン・オースティンの世界』鷹書房弓プレス, 2003.
- 田梅「流行語から見る中国の若者の婚姻観: 「…婚族」について」『大学教育』第 9

- 卷, 山口大学大学教育機構, 2012.
- 上田吉一『人間の完成 マスロー心理学研究』誠信書房, 1999.
- 山本孝司「ルイザ・メイ・オルコットの文学作品にみる女子教育観の進歩性 ——女子労働との関連で——」『教育新世界』第37巻第1号, 2012.
- 山本孝司「ルイザ・メイ・オルコットの教育思想 ——アメリカ進歩主義教育へのプレリュード——」『岡山県立大学教育研究紀要』第5巻第1号, 2021.
- 山口ヨシ子『女詐欺師たちのアメリカ ——十九世紀女性作家とジャーナリズム』彩流社, 2006.
- 山口ヨシ子『アメリカ文学に見る女性と仕事 ——ハウスキーパーからワーキングガールまで』彩流社, 2006.
- 吉田純子『アメリカ児童文学 家族探しの旅』阿吽社, 1992.
- 吉田良夫『英国女性作家の世界』大阪教育図書, 2004.

英語引用文献

- Alcott, Louisa May. *The Journals of Louisa May Alcott*. Eds. Joel Myerson and Daniel Shealy. New York: Little Brown & Co., 1989.
- Alcott, Louisa May. (A. M. Bernard) “*Behind a Mask, or a Woman’s Power.*” 1866. *Behind a Mask: The Unknown Thrillers of Louisa May Alcott*. Ed. Madeleine Stern. New York: Morrow, 1995.
- Alcott, Louisa May. “*V. V.: or, Plots and Counterplots.*” 1865. *Plots and Counterplots: More Unknown Thrillers of Louisa May Alcott*. Ed. Madeleine Stern. New York: Morrow, 1976.
- Alcott, Louisa May. *Work: A Story of Experience*. 1873. Ed. Joy S. Kasson. New York: Morrow, 1976.
- Austen, Jane. *Emma*. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- Austen, Jane. *Mansfield Park*. Oxford: Oxford University Press, 2008.
- Austen, Jane. *Northanger Abbey*. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- Austen, Jane. *Persuasion*. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- Austen, Jane. *Sense and Sensibility*. Cambridge: Cambridge University Press, 2013.
- Cheney, Ednah D. *Louisa May Alcott: Her Life, Letters and Journals*. Boston: Roberts

- Brothers, 1889.
- Eselein, Gregory and Anne K. Philips, eds. *The Louisa May Alcott Encyclopedia*. Connecticut: Greenwood Press, 2001.
- Fergus, Jan. *Jane Austen: A Literary Life*. New York: St. Martin's Press, 1991.
- Freeland, David. *Automats, Taxi Dances, and Vaudeville: Excavating Manhattan's Lost Places of Leisure (English Edition)*. New York: NYU Press, 2009.
- Goble, Frank G. *The Psychology of Abraham Maslow*. Chicago: Grossman Publisher, 1970.
- Green, Harvey. *The Light of the Home: An Intimate View of the Lives of Women in Victorian America*, New York: Pantheon, 1983.
- Halperin, John. *The Life of Jane Austen*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1984.
- Honan, Park. *Jane Austen*. New York: St. Martin's Griffin, 1996.
- Johnston, N. *Louisa May*. New York: A Beech Tree Paperback, 1991.
- Keyser, Elizabeth L. *Little Women: A Family Romance*. New York: Twayne, 1999.
- Keyser, Elizabeth L. *Whispers in the Dark: The Fiction of Louisa May Alcott*. Knoxville: University of Tennessee Press, 1993.
- Leavis, Frank R. *The Great Tradition*. London: Chatto and Windus, 1948.
- Le Faye, Deirdre, ed. *Jane Austen's Letters*. Oxford: Oxford University Press, 1995.
- MacDonald, Ruth K. *Louisa May Alcott*. New York: Twayne, 1983.
- Mallett, Peter J. "Love and Marriage in the Novels of Jane Austen." *Journal of the Faculty of Letters* 3, Kobe Shoin Women's University: JOL, 2014.
- Maslow, Abraham H. *Toward a Psychology of Being*. New York: Start Publishing LLC, 2013.
- Mores, E. *Literary Women*. New York: Doubleday & Company, 1976.
- Poplawski, Paul, ed. *A Jane Austen Encyclopedia*, Connecticut: Greenwood Pub Group, 1998.
- Reisen, Harriet. *Louisa May Alcott -The Woman Behind Little Women*. New York: Picador, 2009.
- Rioux, Anne B. *Meg, Jo, Beth, Amy: THE STORY OF LITTLE WOMEN AND WHY IT STILL MATTERS*. New York: Norton, 2018.
- Shealy, Daniel, ed. *Alcott in Her Own Time*. Iowa City: University of Iowa Press, 2005.
- Showalter, E. *A Literature of Their Own*. New York: Princeton University Press, 1977.
- Stern, Madeleine B., ed. *Critical Essays on Louisa May Alcott Guide*. Boston: G. K. Hall &

Co., 1984.

Tucker, George H. *A HISTORY OF Jane Austen's Family*. Gloucestershire: Sutton Publishing Limited, 1998.

Williams, Merryn. *Women in the English Novel*. London: Palgrave Macmillan, 1984.

中国語引用文献

- 白落梅『因为懂得所以慈悲（张爱玲的倾城往事）』中国华侨出版社, 2012.
- 陳東原『中国婦女生活史』台湾商務印書館, 1978.
- 陈慧「当代中国知识女性主体意识的消解与重塑」『河北学刊』第31卷, 2011.
- 陳子善『說不尽的張愛玲』上海三聯書店, 2004.
- 陳子善『記憶張愛玲』山東畫報出版社, 2006.
- 陳子善『研讀張愛玲長短錄』九歌出版社有限公司, 2010.
- 陳子善編『作別張愛玲』文匯出版社, 1996.
- 韩立群『现代女性的精神历程』中国人民大学出版社, 2013.
- 胡蘭成『今生今世』遠景出版, 2004.
- 金宏达編『回望张爱玲 华丽影沉』文化藝術出版社, 2003.
- 李志华「苍凉的手势—解读张爱玲小说的女性意识」『华东师范大学学报』第5卷, 2005.
- 柳星『英语世界的张爱玲研究』中国社会科学出版社, 2016.
- 钱理群·温儒敏·吴福辉『中国现在文学三十年』北京大学出版社, 2007.
- 蒙曼『武則天』广西師範大學出版社, 2015.
- 乔以钢『中国女性与文学』南开大学出版社, 2004.
- 曲亚红「张爱玲小说的人性视角」『南京理工大学学报』第15卷, 2005.
- 舒新城『中国近代教育史资料』人民教育出版社, 1979.
- 韦清『女生张爱玲』世界知识出版社, 2005.
- 吴家凡『民国三才女』中国婦女出版社, 2004.
- 吴琪『张爱玲小说 苦难叙事研究』华南理工大学出版社, 2020.
- 西峰雪『寻找张爱玲』时代文艺出版社, 2006.
- 余斌『张爱玲传』南京大学出版社, 2007.

- 于青『張愛玲傳』花城出版社, 2008.
- 张爱玲『张爱玲文集·私语』安徽文艺出版社, 1995.
- 張愛玲『半生缘』北京十月文艺出版社, 2020.
- 張愛玲『红玫瑰与白玫瑰』北京十月文艺出版社, 2020.
- 張愛玲『倾城之恋』北京十月文艺出版社, 2020.
- 張愛玲『小团圆』北京十月文艺出版社, 2020.
- 張愛玲『怨女』北京十月文艺出版社, 2020.
- 張子静『我的姊姊張愛玲』文匯出版社, 2003.
- 止庵『讲张文字 张爱玲的生平与创作』华文出版社, 2021.